



### 靖國神社みたままつり

7月13日から16日まで、恒例の靖國神社「みたままつり」が盛大に斎行され、参詣者は延べ三十数万名に及んだという。今年第67回目を迎えた「みた

ままつり」は、今や、都心で催される新暦の一大盆祭りとして定着しているが、この「みたままつり」の最大の特色は、老いも若きも世代を超えて、こ

こ靖國の宮居に集い、今は護国の神となられた祖父や父、兄弟、戦友たちを偲び、尊い命を捧げて国を守った英霊の御霊を迎えて共に一夜を楽しみ、遺徳を讃え、感謝の誠を捧げるところにある。そして、これは我が国古来の習俗である一大盂蘭盆の行事でもある。境内一面を照らす大小3万余の献灯や

報 特 攻

平成25年8月

### 第96号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594  
FAX 03 (5213) 4596

http://www.tokkotai.or.jp

振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能  
発行人 羽 渕 徹 也  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

靖國神社みたままつり……………1

暑中お見舞い……………3

靖國沖繩學徒顯彰六拾八年祭……………6

第37回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列して……………9

旧海軍鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式に参列して……………15

平成25年度義烈空挺隊慰霊祭に参列して……………16

### 目次

平成25年度豫科練雄飛会戦没者靖國神社慰霊祭に参列して……………19

平成25年度(第59回)知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して……………20

第42回萬世特攻慰霊碑慰霊祭に参列して……………23

鹿児島県出水市特攻慰霊碑慰霊祭に参列して……………27

大市の女神の鎮魂式……………28

出水市特攻慰霊碑慰霊祭に参列して……………30

平成25年度・第2回「あ、特攻」勇士之像慰霊祭(京都山護國神社)に参列して……………32

第46回戦艦「大和」を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭に参列して……………34

第二艦隊特攻戦没者慰霊靖國神社共同参拝に参列して……………34

第47回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して……………35

特攻司令官の終戦……………37

——菅原道大陸軍中將……………37

特攻隊員の母の手記……………41

「幻の桜花四三乙型ターボジェット特攻機」(前編)——兵器システムの全容と作戦運用構想を探る……………44

戦争から学んだこと……………49

第42回萬世特攻慰霊碑慰霊祭に参列して……………51

特攻コラム(その二)……………52

新刊図書紹介「護國神社に花ひらく特攻花——荒毛反魂草……………53

『東京裁判を批判したマッカーサー元帥の謎と真実』……………54

DVD紹介『凜として愛……………55

事務局からのお知らせ……………56

事務局からの報告等……………56

○献燈 (懸け雪洞)

- ・元皇族・皇太后女官長北白川祥子様  
「戦争をしらぬ人らも広前にあふれにきわう夏祭の宵」
- ・元皇族・崇敬者総代 島津 肇子様  
「四海波静」

靖國神社崇敬奉賛会会長

- 「花」 水人「愛」 扇 千景様

- ・重要無形文化財(人間国宝) 歌舞伎俳優 坂田藤十郎氏

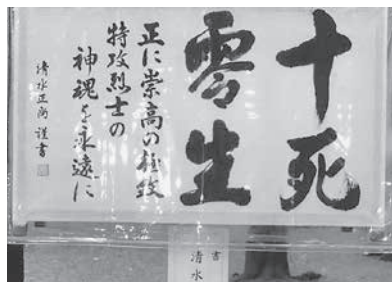
- 「藝」 清水 正尚氏
- ・書家



左島津肇子様・右北白川祥子様献燈



左坂田藤十郎氏・右扇千景会長献燈



清水正尚氏献燈



鈴木利男氏献燈

「十死 零生」  
正に崇高の極致  
特攻勇士の神魂を永遠に」  
画家(書画) 鈴木 利男氏  
「母さん 白髪がありますね」  
タンントンタン  
タンントン

懸け雪洞は、精霊の迎え火と送り火になぞらえたものである。我が国古来の習俗」がそこに表されている。今年是全国的な猛暑続きである。山梨や館林での39度を超えるとても暑い酷暑も記録されたが、東京でも35度前後の猛暑日が続く、熱中症患者は続出した。おまけに1週間後に参議院議員選挙を控えて首都東京は炎と燃

えていた。更に今年は20年に一度の伊勢神宮第62回式年遷宮(御神体を新宮に移し奉る遷御祭の日)は、天皇陛下の御裁決により、内宮は10月2日、外宮は10月5日と決定した」と60年に一度の出雲大社の式年遷宮の年に当たり、加えて熱田神宮の御創建1900年祭の年と重なり、彌が上にも熱く盛り上がった節目の年となった。

13日は、靖國神社「みたまつり」の前夜祭の日である。東京は、夕方から雷雨の子報であったが、幸い予報は外れて、薄曇りの蒸し暑い天気であった。土曜日とあって、浴衣姿の若者や子供連れの家族も大勢見受けられた。大鳥居から第二鳥居前にある下乗札までの外苑参道両側には、沢山の屋台が連なり、焼き鳥、焼きそば、焼きとうもろこしなどの香ばしい匂いが漂って

いる。大村益次郎銅像の周りには、盆踊りの舞台が作られ、浴衣姿やほっぴ姿の人々も大勢も見受けられた。やがて宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたまつり」の前夜祭は始まった。昭和22年7月13日〜16日に、神社の正式行事として斎行されてから今年で満66年、67回目を迎えた。

この「みたまつり」の由来や意義については、当顕彰会会報『特攻』第92号に掲載の東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』(平成10年8月・P.H.P新書)や靖國神社社報「やすくに」第624号(平成19年7月1日)掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたまつりの来歴と意義」に詳しい。

更に靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたまつり」以来、7月13日夕刻、みたまつり前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し戦域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合

暑中お見舞い  
申し上げます

公益財団法人

特攻隊戦没者  
慰霊顕彰会

理事長 杉山 蕃  
副理事長 藤田 幸生  
専務理事 衣笠 陽雄  
業務理事 小倉 利之  
業務理事 水町 博勝  
事務局長 羽 測徹也

公益財団法人

偕行社

理事長 志摩 篤  
副理事長 塩田 章  
副理事長 戸塚 新  
副理事長 深山 明敏  
専務理事 白石 一郎  
事務局長 若木 利博

公益財団法人

水交會

会長 夏川 和也  
理事長 藤田 幸生  
副理事長 田内 浩  
専務理事 齊藤 隆  
事務局長 本多 宏隆

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者  
慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸  
理事長 柚木 文夫  
事務局長 岩田 司朗

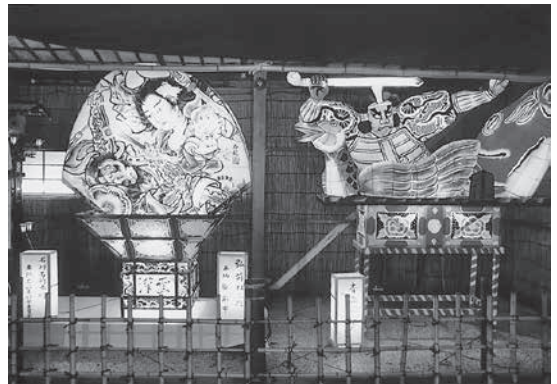
航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 遠竹 郁夫  
副会長 杉山 弘  
副会長 山本 修三  
副会長 藤川 壽夫  
副会長 小田 邦博  
副会長 奥村 佐登志  
専務理事 浦山 長人  
副専務理事 菊川 忠継



左宮島管弦船・右山鹿燈籠



左弘前ねぶた燈籠・右青森ねぶた燈籠

祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することとなった。

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早くからの強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日（停戦公表の日、月遅れの盆）に初めて実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたまつり」の延長線上にあるものと言えよう。

右の閣議決定文には「今次の大戦における全戦没者（軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む）に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・・」とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下に合わせて「全国民が一齐に黙祷するよう勧奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われている。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国戦没者之霊」と明記され、それへの拝礼・献花が今日まで続いている。神道の立場から見れば、この標柱は、全戦



江戸風鈴



福岡・八女提灯



ボニージャクス (国境の町)



あべ静江 (フランチェスカの鐘)



盲目の歌手清水博正と司会の合田道人



フィナーレ (東京五輪音頭)



ペギー葉山 (学生時代)



斉藤京子 (伊勢音頭・出雲安来節)

没者の神霊が宿る神籬ひもろぎの一種(神や御柱の類)にほかならない、と所教授は指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式」が、これからも共に永く続けられるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このことは、靖國神社に寄せる日本人の誠の心の表れである。

期間中遊就館内は夜9時まで開館されており、折柄特別展「大東亜戦争七十年展Ⅱ」や伊勢神宮御遷宮奉祝「第62回神宮式年遷宮写真パネル展」、戦史画家市川昭三氏の「太平洋海戦絵画展」、過去の、みたままつりに寄せられた漫画家・絵本作家の「揮毫ほんぼり展」なども開催され、熱心に鑑賞する参詣者で、遅くまで満員の盛況であった。

明るる14日(日)は、夕刻6時から第一夜祭が斎行されたが、その日も、東京は朝から猛暑日となり、夕刻には激しい雷雨となった。ところが、第一夜祭の少し前には雨も上り、拝殿から拝する御本殿の偉容は、ライトアップされていよいよ神々しく、御紋章は金色に輝いていた。時折吹き抜ける風は涼しさを運んで心地良かった。徳川康久宮司以下大勢の神官が御奉仕する諸

神儀を終えて、参列者一同御本殿に昇殿して拝礼し、第一夜祭は滞りなく終了した。

了した。今年、テレビ放送開始60周年を記念して、当時のヒット曲「君の名は」を青山和子が、「ガード下の靴みがき」を、あべ静江が、戦前・戦中の名曲「国境の町」をボニージャックスが、「空の神兵」をベギー葉山とボニージャックスが見事なハーモニーで歌い上げた。歌手生活60年の超ベテラン・ベギー葉山の「南国土佐を後にして」と「学生時代」は、懐かしい思い出と共に聴衆もこれに唱和した。最高齢の歌手・三島敏夫87歳も京都から駆け付け、「同期の桜」を聴衆と共に歌って英霊に捧げた。フィナーレは、2020年オリンピック東京開催を祈念し、「東京五輪音頭」を聴衆と共に全員で唱和し、2時間近くに及んだ奉納歌謡ショーは幕を閉じた。英霊もさぞ満足されたことであろう。

○鎮霊社例祭（諸霊祭）

靖國神社の拝殿から本殿へ向かう左側の回廊の途中に出入り口の扉があった。その外側の旧招魂斎庭に二つの小社がある。向かって右の小社を「元宮」といい、左の小社は「鎮霊社」という。この二社とも大樹の下にひっそりとして建っており、よく似た造りの小社であるが、「元宮」は瓦葺きで、「鎮霊社」は銅板葺きである。この旧招魂斎庭に入るには、通常、拝殿の左、回廊に連

なる玉垣の奥の門からであるが、門扉が開けられているのは午前9時から午後4時までである。

「元宮」は文久2（1862）年、津和野藩士出身で、平田篤胤派の国学者として尊攘志士と共に王政復古に活躍した福羽美静（1831年〜1907年、維新後、藩主亀井茲監が神祇官副知事に就任すると、福羽も神祇関係の要職を歴任、1869年明治天皇の侍講となる）が中心となり、初めて徳川齊昭卿ら維新の志士46人の霊を慰めるため、京都の邸内に密かに祠堂を建てて祀った。奠都に伴い東京に移されたが、招魂社の先駆けとも言う

べき由緒ある祠堂で、昭和6年、福羽家より神社に奉納され、「元宮」と称して今日に至っているが、例祭日は4月1日である。

一方、左の小社「鎮霊社」は、「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖國神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為、昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮齋」されており、例祭日は7月13日である。この「鎮霊社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた（昭和21年1月から昭和53年3月死去までの32年間）筑波藤磨氏が、前年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を訪問して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種的迫害等により数百万にも上る非戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆や空襲による死没者を始め、前記のように明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみならず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するため、建立されたのが、この「鎮霊社」であり、靖國神社では「元宮」と共に毎日、神官による祭祀が行われており、その例祭が、趣旨を同じ

鎮霊社



た田端義夫や塩まさるの後を継いで「かえり船」と「九段の母」を見事に歌い上げた。北海道出身で抒情の歌姫と言われる85歳の安藤まり子が、若々しい声で「花の素顔」と「毬藻の歌」を、民謡の大御所斉藤京子が、今年、伊勢神宮と出雲大社の御遷宮が重なる神の年を寿いで「伊勢音頭」と「出雲安来節」を声量豊かに歌い上げて聴衆を魅



くする「みたままつり」の前夜祭の後の宵祭りとして毎年7月13日の午後8時過ぎに行われている。

それより先、靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった、とのことであり、「鎮霊社」建立以後は、前記のように同社例祭として齋行されている。

大樹の下、昼なお暗い霊域において、御社の二つの燈明が幽かに揺らぐのみの、暗闇に包まれ、静寂にして幽玄の氣に満ちた中での神儀で、筆策しりもの音と共に、白装束の神官6名によって奉仕され、修祓、降神、献饌、祝詞奏上等が齋行される。参列者は、宮司以下遺族代表他十数名に過ぎない。

(飯田 正能記)

## 祭 殉國沖繩學徒顯彰六拾八年

「・・・小渡壯一命（沖繩県立第一中学校四年生・鉄血勤皇隊・戦死当時17歳）は次の辞世を遺されています。

身はたとひこの沖繩に果つるとも  
七度生まれ来て敵亡さん

祖国の防波堤となった軍官民一体の沖繩防衛決戦があったからこそ今の私達があり、御霊となっても祖国日本をお守り下さっている殉國學徒の御霊に感謝の誠を捧げ、その氣高き志を顯彰していく事こそ、沖繩の支配を目標とする中国の脅威に毅然と対処する精神的支

柱になると思います。・・・」

今年の「殉國沖繩學徒顯彰六拾八年祭」の案内文に掲げられた学生実行委員会委員長与那嶺宏喜君（東洋大学三年生）と首都圏学生文化会議議長上野竜太郎君の言葉である。

本顯彰祭は長年、元国土館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖繩學徒顯彰會」の主催によって齋行されてきたが、その会務を取り仕切られてきた金城先生御夫妻が共に体調を崩されたため、その齋行が危ぶまれていたが、先生の御意志を受け継ぐ若い学生達の熱意と努力によって、一昨々年

ようやく齋行に漕ぎ着けることができ、一昨年からまた、全日本学生文化会議の支援を得て、学生実行委員会（委員長東洋大学三年与那嶺宏喜君）が主催して齋行することとなった。

昨年は、沖繩（琉球）の本土復帰（昭和47年5月15日）から40周年、日中国交正常化宣言（昭和47年9月29日）から40年の節目の年であった。また、天皇、皇后両陛下には、「第32回全国豊かな海づくり大会」に御臨席のため、11月17日～20日、沖繩県を御訪問になり、摩文仁の丘の沖繩平和祈念堂を御拝礼になり、元白梅學徒隊（県立第二高等女学校）の方々と懇談をされ、国立戦没者墓苑で供花をされた。大会御臨席のほか、沖繩本島各地を御訪問の後、20日には、初めて久米島を御訪問にいられた。沖繩県民は、両陛下をお迎えして、7千名の提灯パレードなどで大歓迎の意を表した。

今年はまだ、去る5月19日に、沖繩県宜野湾市民会館において、民間主催の「沖繩県祖国復帰41周年記念大会」が、約1300名の市民の参加を得て盛大に開催され、祖国復帰を祝う「日の丸パレード」も実施された。これまで長い間、左翼活動家達によって、5月15日は、米軍基地を押し付けられた「屈辱の日」と位置付けられ、反米、

## 殉國沖繩學徒顯彰六拾八年祭



ありし日の県立第一中学校（鉄血勤皇隊）の方々



野田校長を囲む第一高等女学校（ひめゆり學徒隊）の方々

反自衛隊、反基地闘争の象徴的記念日となっていたが、昨年初めて40年ぶりに本来の姿である、沖縄の祖国復帰を祝う県民大会として開催することができたことである。そして、それらの諸行事に学生達は積極的に参加し、現地学生を中心とする県民と共に活動した。

しかし、尖閣諸島の領有権を始め、海洋進出・支配権拡大の野望を図る中国への対応、普天摩基地移設問題を始め日米安保新態勢の確立等、緊急に対応すべき難問が山積し、日本は外交・防衛態勢強化の正念場に立たされている。このような内外情勢多難の中の顯彰祭行であったが、昨年から第一部と第二部に分けて実施されることとなり、今年も第一部は「殉國沖縄學徒をお偲びする集い」として、靖國神社を參集殿2階で実施され、従前の祭典は第二部として、神社拜殿で齋行された。

第一部、第二部とも、昨年よりやや少ない約70名の参加者があった。そして、その企画・運営もほとんど全部、若い学生諸君によって実施されており、大変頼もしく感じられた。

6月23日は、沖縄「慰霊の日」である。沖縄戦最後の激戦地となった本島南部糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園内にある国立沖縄戦没者墓苑では、沖縄県の主催による「沖縄全戦没者追悼

式」が、安倍首相、仲井真知事や遺族ら約5800人が参列して盛大に執り行われた。式典には、岸田外相、小野寺防衛相、米国のルース駐日大使も参列した。外務、防衛2閣僚の参列は初、駐日大使の参列は18年振りとのことである。仲井真知事は、平和宣言の中で、日米両政府に対し、普天間飛行場(宜野湾市)の早急な県外移設を求めた。安倍首相は挨拶の中で、「沖縄が忍んだ犠牲、人々が流した血や涙が、自分たちを今日あらしめていることを深く胸に刻みたい」と語り、基地負担について「少しでも軽くするよう全力を尽くす」と述べた。

平和祈念公園内の「平和の礎」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年新たに60柱が追加されて総数24万1227柱となった。この数は、沖縄本島とその周辺における陸海軍の戦死者及び沖縄作戦中の特攻戦死者、沖縄県の職員や一般住民の戦没者のほか、南洋群島等で戦没した沖縄県出身者も含めた全戦没者数ということであるが、マスコミが報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例が殆どである。

今日、沖縄戦は多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下であって、将兵

はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、生命を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顯彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

戦後68年を経た今日なお現地沖縄の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、就中、各戦没従軍學徒の碑でも行われているが、中央における沖縄戦戦没者慰霊行事が唯一、靖國神社における本顯彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスコミがこれを報道することもない。

沖縄戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精銳第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となって軍事訓練につき、20年3月には沖縄師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学校、同工業・農林・水産、市立商業学校、私立開南中学校の9校から1880余名が

開南中学校の9校から1880余名が

「鉄血勤皇隊」及び通信隊に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬首里城の急を救おうとして「學徒斬込隊」が志願編成され、50余名が一体となつて敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。

女子學徒の場合は、「ひめゆり學徒隊」として有名であるが、それは沖縄師範女学校女子部と県立第一高等女学校を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その外、県立第二高等女

学校の「白梅學徒隊」、同第三高等女学校の「名護蘭學徒隊」、同首里高等女学校の「瑞泉學徒隊」、私立昭和高等女学校の「梯梧學徒隊」、私立積徳高等女学校の「積徳學徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数約540余名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴ったが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員も解除されたので、伊原の洞窟にあつた第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替え、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が

ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が

加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあった。その他戦死した女学生の数は動員数の45%240数名に及び、男子部の44%830余名と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國学徒の慰靈顯彰祭を齎行して今年第57回目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しており、特に一昨々年、一昨年と、冒頭に述べた事情によって参列者が減少した。それが昨年来、倍増して約70名ないし100名の参列者を得るようになったことは、誠に喜ばしい。しかも、その内の約半数は学生や若者など志を継ぐ者であることは一筋の光明である。

第一部の「殉國沖繩學徒をお偲びする集い」では、御來賓の小田村四郎元拓殖大学総長が挨拶の中で、今日、沖繩慰靈の日は、毎年6月23日を沖繩戦終結の日として行われているが、その日、牛島軍司令官、長參謀長らが自決し、組織的な作戦は終わったものの、軍はその後沖繩各地で頑強な抵抗を続け、遂に8月15日の終戦に至った。米国始め連合国は、硫黄島や沖繩戦での日本軍の頑強な抵抗に遭い、余りに

も損害が大きいため、初めてポツダム宣言という講和条件を持ち出してきたものであるとして、沖繩戦が本土防衛と終戦処理に果たした意義等について強調された。同じく御來賓の板垣正元參議院議員からは、これまで本顯彰會を主催してこられた金城和彦先生の父上の金城和信先生が、二人のお嬢さんをひめゆり学徒隊で亡くされておられるが、戦後、沖繩遺族会の事務局長、会長として、米軍の厳しい規制の中、遺骨収容や戦没者の慰靈・顯彰に献身されたこと、その御意志を継いで金城和彦先生が戦没者、特に殉國學徒隊の慰靈・顯彰に尽力されたことを讃えられた。また、金城和彦先生と共に、殉國沖繩學徒の慰靈・顯彰運動を続けてこられた東方国際学院の草開省三校長は、金城先生の沖繩戦に散った学徒の慰靈顯彰に対する情熱を讃えるところに、沖繩戦では、特攻隊を始め、幾千の若者が殉國の精神に燃え、潔く国のために命を捧げられた。これこそ、大和魂の発露であり、若い人々にこの大和魂を連綿と継承していくことが我々の責務である、と力強く述べられた。

一部は非常に感銘深く傾聴した。第二部の式典は、靖國神社拜殿において齎行され、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上等の神儀、御遺文奉読、御遺詠奉誦と進み、学生代表により感銘深い祭文が奏上された。次いで、参列者から奉呈された献歌奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のうち、参列者全員、御本殿に昇殿し、玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく終了した。その後、遊就館旧正面玄関前で、全員の記念撮影を行い、再會を誓って解散した。(飯田正能記)

御遺文・御遺詠 (一部)

○渡久山朝雄命 国頭郡恩納村出身 沖繩県立第一中学校 二年生

球一八八三〇部隊電 信兵第三六聯隊、第五中隊、昭和20年6月下旬、摩文仁にて自決、当時十二歳

母上様 永らく御無沙汰致し誠に済みません。お母さんもお祖母さんも、姉さんもお元気の事と推察致します。私も大元気で本分に邁進して居ります。首里市は空襲も艦砲射撃もまだ受けません。こちらは大丈夫です。読谷方面はどうですか。敵の艦砲射撃も空襲もだんだん激しくなるはずですが、お

母さん達はなるべく国頭へ疎開した方がよいと思ひます。お祖母さんの事は呉々もよろしくお願ひ致します。私も愈々球部隊の通信兵としてお役に立ちますことの出来る事を身の光榮と存じ、深く感謝致して居ります。若しもの事があつたとしても、けつして見苦しい死には方はないつもりです。日本男児として男らしく死にます。もう時間がありませんので、くれぐれも御身をお大事に、私の事は少しも気に掛けないで下さい。では、さようなら。 三月二十五日 夜九時四〇分 二年三組 渡久山朝雄 お母様

○小渡壮一命 沖繩県立第一中学校 四年生・鉄血勤皇隊 球九七〇〇部隊野戦 重砲隊、真壁にて戦死、当時十七歳

身はたとひこの沖繩に果つるとも 七度生まれて敵亡さん

○古波津昇命 沖繩県立第一中学校 五年生・鉄血勤皇隊 球九七〇〇部隊独立 工兵第六六大隊、摩文仁にて戦死、当時十七歳

若櫻散るべき時は今なるぞ 十七の春に撃ちてし止まむ



## 第37回都城市特別攻撃隊 戦没者慰霊祭に参列して

会員 倉形 寛

平成25年4月6日(土)、宮崎県都城市都島町に所在する市立都島公園内にある「都城特攻慰霊碑」(特攻振武隊はやて慰霊碑)の前で執り行われた「第37回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭」に、当顕彰会から参列させていだきましたので、以下のとおりご報告いたします。

### 一 慰霊祭の状況

前日から宮崎、鹿児島地方は天候が悪化しつつあり、夜には雨となった。数日前から慰霊祭当日の天候が気になっており、天気予報を何度も確認してはいたが、慰霊祭当日の4月6日は本降りの雨という予報に変わりはないのであった。

さて、4月6日当日は、早朝から前夜来の雨が降り続いており、残念に思いつながりも車両によって会場へと移動した。ところが、15分ほど経ったであろうか、会場の都島公園に到着すると雨が止んでいるのである。会場には既に雨天用の天幕が張られていた。とても不思議に思いつながり、軍人墓地でも

ある公園内へと進んだ。正面に戦没将兵の慰霊堂があり、その並びに殉職自衛隊員の慰霊碑もあつたため、先ず戦没将兵に向かって、そして殉職自衛隊員に向かって最敬礼を行った。

陸上自衛隊都城駐屯地の音楽隊が、戦時歌謡「国境の町」、軍歌「飛行第六十四戦隊歌」(加藤隼戦闘隊歌)を演奏し始めたので、会場へと移動し着席した。残念ながら、天幕が祭壇まで展開されているため、正面の「都城特攻振武隊はやて」の碑は、下半分しか見えない(慰霊祭の開始直前と終了後に正面の祭壇の裏に回り、碑の全体を仰ぎながら最敬礼を行った)。

ところで、この都城の慰霊祭であるが、昭和20年4月から7月にかけて都城西及び東飛行場から出撃された特攻隊戦没者85名、直掩飛行隊戦没者64名を追悼するため、昭和52年11月15日に第1回慰霊祭が執り行われた。「はやて」の慰霊碑もこの時に建立された。

その後、第一特別振武隊(四式戦「疾風」・隊長林 弘少尉(陸士57期)以下8名)が沖繩周辺洋上の米艦隊に向けて出撃した昭和20年4月6日に合わせ、毎年この日に執り行われている。直掩隊戦没者まで慰霊対象となっている慰霊祭は、珍しいと言える。今回は御遺族、関係者、一般市民の方々を合

わせて約370名が参列された。

いよいよ慰霊祭の開始である。司会の開式の辞に続き、参列者全員が黙祷を捧げた。静寂と共に厳かな一時が流れる。黙祷が終わると、都城特別攻撃隊戦没者奉賛会・池田宣永会長(都城市長)の祭文奏上が行われた。「日本の平和と繁栄の礎となられた特攻勇士の尊い心根を絶対に忘れてはならない。戦争が二度と繰り返されぬよう、平和な日本を守るべく努力を続ける」と誓われた。

続いて福岡県借行会・菅原道之会長(陸士57期)による追悼の辞が述べられた。「自分たちは高齢となったが、できる限り慰霊の誠は捧げ続ける。戦没者奉賛会を組織し、慰霊顕彰を続けて来られた地元都城市の方々に深く感謝申し上げますと共に、今後ともご継続をお願い致します。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず、特攻隊戦没者、直掩隊戦没者及び殉職者の方々に謹んで慰霊の辞を申し上げます」。

この後、献花となった。この献花の際、地元の都城市立西中学校の教頭、教職員代表、男女生徒代表の4名の方々が白菊の花を捧げられた。学校を挙げて戦没者の慰霊顕彰行事に参列するとは、何と美しいことであろうか。参列者が次々と捧げる白菊の花で、祭

壇は美しい純白となった。この時、急に空が明るくなり、慰霊碑に陽が射したのである。何とも言えぬ神々しい雰囲気を感じ、私は深い感動を覚えた。

献詠を経て、陸士57期生の方々数名で、「陸軍士官学校校歌」と「飛行第六十四戦隊歌」を献歌された。献歌の途中で、少飛出身の方々前に出るよいう声掛けが掛かり、陸士57期生の方々は、何と自分たちの中央に2名を挟むようにして横隊を組んだのである!将校が下士官を中央に立てる、実に感動的な光景であった。

次に、都城市立西中学校生徒代表の池田真乃花さんによる「平和へのメッセージ」が捧げられた。「自分たちの住んでいる近くにこのような慰霊碑があること、ここ都城の地から六十数年前に幾多の特攻隊の方々が出撃された事実を知らなかった。しかし、今自分たちが平和な生活を送ることができているのは、特攻で戦死された方々の尊い犠牲のお陰なのだ。私たちは戦没者の方々に絶対に忘れない。戦没者の方々に感謝し、自分たちは一生懸命努力をし、平和で豊かな日本を築いていくことを誓う」という内容であった。中学生ながら、何と立派な言葉であるうか。私は感動で涙が出た。(実は、この時再び慰霊碑に陽が射したのであ

る！)

自衛隊音楽隊の慰霊演奏「燃ゆる大空」の後、最後に御遺族代表・宮田信之氏から挨拶が述べられた。「自分は写真の父しか知らない。戦争は深い悲しみしかもたらさない。戦争のない、平和な世界を望む」。

閉会の辞が述べられ、大雨が予想されていた日ではあったが、結局雨模様ながら、途中陽が射すなど、厳肅な雰囲気の中、第37回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭は無事に終了した。

これまで各地の慰霊祭に参列したが、今回の都城市の慰霊祭は何かが違うと感じた。私は暫くその感動の余韻に浸っていたのである。

## 二 所見

今回、第37回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列しての所感である。

先ず、御遺族の参列者に、明らかに「お孫さん」と思われる世代の方々もご一緒に多く参列されていたことである。これは正しく新たな世代に交代、継承されていくことを示すものではないだろうか。

次に、地元の方々、特に公立中学校の教職員、生徒が参列していたことである。これは戦争の悲惨な面のみを教え、自国の防衛戦力の保持をも否定し

た教育をしている多くの学校とは全く違い、むしろ自分たちが平和を享受するための礎となった、幾多の特攻戦没者に感謝しなければならぬ、それは自分たちが平和で豊かな日本にするため努力を続けていくことで報われる、といった教育であり、将来必ずや立派な若者が育っていくことであろうと信ずる。

昨今、戦没者の慰霊顕彰にかこつけて十分な調査や検証もせずに書籍等を著そうとしたり、映像や演劇などを制作したりというような「慰霊ビジネス」が流行っている。慰霊祭や慰霊顕彰行事について、「営業活動」や「ロビー活動」に実に熱心な私利私欲に塗られた輩が見られる。

都城市の慰霊祭においては、そのような人物は一切認められなかった。参列者の個々の誠意が、思いが一つになっていると感じたのである。この一体感、一体全体何なのであろうか。この事実は、今後の我々の慰霊顕彰活動の在り方を示唆しているように思えてならない。私は、またこの地に戻ろうと思っているのである。

都城と特別攻撃隊に関連した事項を申し述べる。

都城は、宮崎県南部の都市であり、また鳥津家の発祥の地でもあり、歴史

的にも由緒ある町である。

ここ都城には、終戦まで西、東、北の三つの飛行場があった。最も整備された飛行場は西飛行場であり、当初、滑走路は1200m以上の長さがあつたと言われている。この西飛行場は、この地に駐屯した陸軍歩兵第23聯隊及び第64聯隊の宿営地に隣接した軍用地に、昭和8年、第23聯隊の満洲事変凱旋を記念し、翌昭和9年に一般市民等の協力を得て建設された。

また、昭和15年に拡張され、昭和17年からは、通信省航空乗員養成所が置かれ、教育訓練が開始されると共に、明野教導飛行師団から教導飛行隊(四式戦闘機(以下「四式戦」という))

装備)が展開する等、大飛行場となった。昭和20年4月6日、飛行第百一及び百二兩戦隊からの志願者10名の内8名が第一特別振武隊として出撃、また4月12日に残りの2名が出撃して、いずれも沖繩周辺洋上で散華された。

しかしながら、同月27、28の両日に米軍の空襲を受け、多数の航空機と施設が直撃により損害を被り、戦死者18名を出してしまった。この空襲では時限信管付きの爆弾が使用されており、飛行場の復旧作業も不可能となった。このため以後の特攻隊と直掩隊の出撃は、東飛行場からとなるのである。

東飛行場は、元々水田であった場所を海軍が埋め立てにより急造した飛行場であり、零式艦載機が訓練に使用していたが、昭和20年3月からは陸軍が使用することとなった。これは、沖繩戦に備えるために第百飛行団の飛行第百一戦隊(四式戦装備)が移動してきたためである。(後日、西及び東飛行場に第百二、百三戦隊も展開した。)西飛行場が連日の爆撃により使用不能となったのに対し、東飛行場は、ほとんど自然の草原のような様相であったため、大した攻撃も受けることなく終戦まで多くの特攻隊と直掩隊が出撃していったのである。

北飛行場は、都城の北方に位置し、畑の中の村道を拡張して作られた偽装滑走路であったため、攻撃を受けることもなかった。九五式中等練習機を装備した第九十五、九十六振武隊の特攻2個隊が出撃の時を待ったが、上空には米軍機が常に飛び回っている状況のため、遂に出撃することなく終戦を迎えることとなったのである。

ここで、南九州を訪れた方、あるいは地図(地形図)を眺めるのが趣味の方はお気付きになれるかも知れないが、宮崎、鹿児島は、意外と山がちであり、低い山が海岸線に迫っている場所も少なくない。また、丘陵状、台地

状の地形が連続しているため広大な飛行場を建設することを考えると、決して容易なことではなかったのではないかと思われる。(実際、宮崎で現存する大きな飛行場は、旧海軍の宮崎・赤江飛行場(現宮崎空港)と旧陸軍の新田原飛行場(現航空自衛隊新田原基地)である。川南町の旧陸軍唐瀬原飛行場は、農耕地、住宅地となつてしまい、現在その面影は全くない。)

### 三 参考資料について

さて、都城であるが、北西に名峰霧島・高千穂連山を望む盆地であり、比較的平坦な地形が連続している。飛行場を建設するには、多くの面で適していたのではないかと思われる。また、都城は日豊本線と吉都線が三方向から合流する鉄道交通の要衝でもあり、軍需品、航空機整備用部品、航空燃料等の輸送、いわゆる兵站上も有利だったのではなからうか。

都城東、西飛行場から出撃した機材について、既に多くの方々がご存じのとおり、ここから出撃した振武特攻隊及び直掩隊は、四式戦が装備されていた。中島航空機(現富士重工)が開発した高性能傑作機であり、当時米国のノースアメリカンP51と並び世界最高水準にあった戦闘機である。中島航空

機の群馬県太田工場は、昭和19年に四式戦が制式化されると、17箇月間で、実に3880機を生産した。

参考までに、三菱航空機は、零式艦戦(零戦)を開戦直前の昭和15年に制式化されてから終戦までの5年間で約3500機しか生産できず、不足分は中島航空機太田工場で生産した。これは、中島航空機の驚異的な大量生産能力(マスプロ)を示す。一方、四式戦の機体自体も大量生産に適した構造に設計されていた。そして、太田工場で生産された四式戦は、「最優先」で特攻隊に送られていったのである。(特攻機とされる機体は、最初からこの太田工場において固定武装の一部(翼内機関砲)を取り外した状態でロールアウトした。)

航空機の性能を決定付ける重要な要素の一つに、発動機(エンジン)がある。四式戦は、中島航空機製の「ハ45/21(海軍呼称「誉」)を装備したが、これは高出力の割には軽量・小型であり、空気抵抗を減少させる機首の形状(整形)及び機体重量軽減にも貢献しているのである。

日本の当時の航空燃料事情は、意外と知られていない。満洲事变から大東亜戦争開戦後、大

オクタン価は85〜87程度であった。航空機用発動機の出力向上に伴い、昭和19年頃からオクタン価は91〜95程度に上げられ、比較的高出力が得られるようになった。三式戦「飛燕」の液冷発動機ハ40も92オクタン価以上の航空燃料を使用するように設計されていた。更に、発動機の運転中に、シリンダー内に水アルコールを噴射すると緊急出力を得ることができた。鹿児島県知覧飛行場から一番多く出撃している一式戦「隼」三型甲は、このアルコールを噴射するように改修された機材である。(このアルコールは芋由来のアルコールであった。)

四式戦「疾風」の発動機ハ45は百オクタン価の航空燃料を使用するように設計されていた。よく書籍、映画、TVドラマ、あるいは演劇等において、当時の航空燃料について「松根油」を使用したとされる記述やセリフが出てくるが、これは誤りである。少なくとも85オクタン価以上でなければ作戦機即ち第一線で使用する航空機は、その発動機の運転が不可能であり、使用できなかつた。三式戦にあつては、発動機のシリンダーに点火さえもできないのである。ごく一部の練習機に使用された例がある、という書籍もあるが、かなり怪しいと思う。

そもそも「松根油」は、松の枝や根から抽出された物質(松ヤニとは違う)を2度精製した一種のテレピン油で、本来は塗料などの原料である。これに水素等の物質を添加すると90オクタン価以上にはなるのだが、粘性が高いため粘度管理が極めて困難であり、航空機用発動機には不適、というよりは使用不可能であった。(陸軍の燃料廠では、研究によりこれを掌握していた。)

昭和19年に「ドイツでは松から精製された油で航空機を飛ばしているらしい」との断片的な「噂」が海軍に入り、航空燃料の不足に悩む軍上層部としては、「松根油」に依存する方向性で動かざるを得なかつたのである。昭和20年3月の閣議決定により、国民に対して無償勤労奉仕で松の枝や根の供出が指示された。元々塗料等の原料であるため、既に日本国内各地に「松根油」の工場は、その規模こそ小さいが存在しており、増産態勢に入つたのである。しかしながら、この「松根油」さえも生産・供給が困難となつた。それと、この主要生産プラントは四日市と徳山にあつたのだが、米軍の空襲により四日市のプラントは被爆、破壊され、生産が不可能となつたのである。また、鉄道輸送にも空襲による影響が及び、結局終戦時には、輸送待ちの「松

根油」は1万7千トンもあった。戦後、進駐軍がジープに使用してみたところ、数日でエンジンが駄目になったという。

さて、特攻隊には「ポロ飛行機」が渡された。あるいは前述のように燃料も松の根から採った油を使わされた・・・などなどよく言われているが、これは情緒的なもので（あるいは何らかの悪意があつたのかも知れないが）ほとんどの場合、誤りである。

一式戦「隼」は、航空機史でいう「世代」としては、昭和20年頃においては確かに旧式ではあつたが、陸軍特攻隊で最も多用されたのは、そのⅢ型甲である。そもそもこの機材は、軽戦闘機とも言われただけに操縦性が良く、操縦が簡単で飛行時間が少ない操縦者でも十分乗りこなせた。また、稼働率に直接影響する整備性に優れた、即ち整備が容易な機材でもあつた。

高等小学校以上の学校の生徒が動員により工場や田畑で作業に従事した事実は、既知のことと思う。実は、この「事」が優秀な四式戦を始め多くの航空機の稼働率を低下させる要因の一つになつてしまふのである。

歴史的に家内工業、徒弟制度で脈々と続いてきた日本の工業には、欧米のような統一規格及び品質管理という概

念が存在せず、正に職人芸の延長線で発達を遂げてきた。しかし、これは近代的工業生産、即ち大量生産（マスプロ）には絶対合わない方式であつた。

一例を挙げる。今ここに2機の四式戦がある。1号機と2号機である。1号機と2号機の主脚緩衝機をそれぞれ取り外して交換取り付けしようとする。全く信じられないようだが、これが取り付けられない場合があるのである。微妙に寸法が違つていたり、形状が違つていたりするのである。熟練工が操作する工作機械での材料の切削、穴開け、ヤスリ仕上げなど、どの工程にしても百分の一から千分の一ミリまで要求される作業である。それらを経験のない学生や女学生にやらせ、精度や品質を要求するのは元々無理というものである。

また、物資の欠乏や流通事情の悪化により、航空機等の生産、工場や部隊における整備及び修理に必要な補用品等の供給もままならない実態を考えれば、確かに故障が多く、修理も不完全な「ポロ飛行機」と言われても致し方ないであらう。

しかしながら、この航空機生産、修理、整備補用品、そして燃料などの事情を総合的に考えれば、決して故意にそうした航空機が特攻隊に渡された

わけではなく当時、その時々々の「状況」が有機的に絡み合い、そのような結果を招いてしまったという事実を、我々は冷静に、正しく認識しなければならぬのである。まして、航空機生産工場も、米軍機からの銃爆撃を受けながらの生産であり、実際多くの学生、女学生が空襲で亡くなられている事実も決して忘れてはならないのである。

さて、都城では四式戦が特攻隊及び直掩隊に装備されていたが、その稼働率は7割程度（時として3割程度）であつたと言われている。

飛行第百一、百二、百三戦隊の損耗のため、東京・成増飛行場から「震天制空隊」で有名な、最精強部隊の一つである飛行第四十七戦隊が都城東飛行場に展開した。当戦隊の四式戦の稼働率は、実に百パーセントであつたという。

都城西及び東飛行場に展開した第百飛行団麾下の飛行第百一、百二、百三の各戦隊は、特攻機の直掩隊として出撃したが損害も大きく、特に第百二戦隊は間もなく残りの四式戦と人員・機材を第百一及び百三戦隊に引き渡し、解散することとなる。都城の3個戦隊は、特攻機の直接掩護任務のみならず、米軍の沖繩上陸後、4月15日に爆装（タ弾）…一種の収束黄燐焼夷爆弾で、敵飛行場・戦車部隊攻撃用の新兵器）し

た四式戦で北（読谷）及び中（嘉手納）飛行場を攻撃し、「夕弾」投下後は翼内の20ミリ機関砲で掃射、戦果を上げている。

夜間、米軍のレーダーを避けるために超低空かつ高速で攻撃をかけてくる四式戦に米軍は成す術がなかったと言われている。米軍のコードネームで四式戦は「フランク」と呼称されているが、この攻撃を受けた米軍は、四式戦を「テリブル・フランク（恐ろしいフランク）」と呼んだ。5月11日にも沖繩の飛行場を攻撃しているが、さすがに損失も大きく、この後、飛行第百一戦隊は東京・成増飛行場へ移動する。

特筆すべきは、飛行第百三戦隊が5月25日に敢行した沖繩・北飛行場（読谷）夜間挺進攻撃である。義号作戦支援のための攻撃であり、北飛行場の敵を撃破、掃討するもので、前日の義烈空挺隊による挺進特攻に呼応するものである。戦隊の編制当時は、ほとんどの操縦者は、飛行時間平均2000時間程度であつたが、これだけの偉勲を成し遂げたのである。しかし、航空機搭載夜間用レーダーを持つ米軍の反撃で、11機のうち10機が撃墜され、飛行隊長小川大尉の四式戦1機のみが帰還した。

この挺進攻撃は、海軍の第一御楯隊

による硫黄島からのサイパン・アスリート飛行場攻撃、海軍三航艦木更津空の一式陸攻による硫黄島夜間爆撃（この時、硫黄島では既に摺鉢山は陥落し、我が陸海軍部隊は兵力の主力を島の北部へと移動させ始めていた。）を彷彿とさせる。

なお、沖繩の敵上陸部隊に対する攻撃は、知覧飛行場に展開した飛行第六十五戦隊も一式戦「隼」Ⅲ型甲を爆装し、超低空飛行により実施している。

都城西飛行場跡地は、現在の陸上自衛隊都城駐屯地訓練場の近くにあり、現在は住宅地になっているが、そこにポツリと通信省航空乗員養成所の碑が建っている。案内してくださった都城駐屯地広報班の方によると、特に碑前祭等は行われていないとのことである。また、この航空乗員養成制度のことを詳しくご存じの方は余りいないと思われるが、当時、仙台、米子にも規模の大きな養成所があり、少年飛行兵の制度よりも早く空を飛べるので、大空に憧れた少年たちは航空乗員養成所を志願した。養成所の課程を履修してから陸軍に入った場合、下士官扱いであった。養成所出身者からも特攻隊として出撃された方々がいらっしやる。

陸軍航空本部が監修した映画「翼の凱歌」の中で、仙台の乗員養成所にお

ける教育訓練風景が映っている。まだ十四、五歳くらいであろうか、余りにもあどけない少年たち（と言っても我々の大先輩方であるが）が、真剣に訓練に励んでいる姿に、何とも言えぬ複雑な感情を抱いてしまった。

今回は、慰霊祭の時程の関係で、前に宮崎に前進したわけであるが、空挺落下傘部隊発祥の地である川南まで足を伸ばした。日豊本線高鍋駅から川南まで自転車で行った。往復6時間の行程である。驚いた、いや、感動したのは、移動途中に出会う老若男女の方々、特に小中高校の生徒たちが皆必ず丁寧に挨拶をしてくださるのである。私が航空自衛隊の制服を着用していたので、そのためだとは思いますが、この地の方々の自衛官に対する思いと、この地の方々の旧軍時代の軍人に対してどうであったのと同様に、この地においては定着しており、至極自然なことなのかも知れない。

そう言えば、往路は日本航空の乗務員から、帰路は宮崎空港において全日空のクルーから丁寧に挨拶をされた。

川南では、挺進第三聯隊の宿舎のあった場所や、専用飛行場の位置にあった唐瀬原飛行場跡に行ったが、住宅地、農耕地となっており、最早何の面影も残っていない。ただ、挺進第

三聯隊の兵舎跡は現在国立病院機構宮崎病院となっており、その宿舎も宮崎病院が転用している。義烈空挺隊は、出撃の地、健軍に移動するまでこの宿舎で暫くの間、起居されていたのである。その宿舎が今、目の前に立っている。隊員の方々の心中は、果たして如何ばかりであったか。ただ、涙を流すしかできない自分自身に憤りを感じるのである。

コンクリート製の給水塔も、当時のまま立っていた。義烈空挺隊の隊員もこの給水塔を目にされたであろうし、また、給水塔も隊員の方々を見下ろしていたのだろう。

視線を上げれば、記録映画「空の神兵」にも映っていた山々が広がり、深い感慨を覚えた。「この大空、この山川も当時と同じなのだ」と。

当時の降下訓練は、川南から鉄道で新富（現在の「日向新富駅」）まで移動、新田原飛行場（現航空自衛隊新田原基地）から九七式輸送機に搭乗し、川南上空で降下する、という流れであった。

私は出張で、米軍下士官を連れて何度か新田原基地には行ったことがあるので、的確にその流れのイメージが湧く。この地で最後の訓練を行った義烈空挺隊、間接支援のため、都城東飛行場から出撃した飛行第三百三戦隊、その

ゆかりの地に佇み、空を見上げ、眼前に広がる山々、そして足元に咲く草花などを見ると、様々な感情が頭の中で渦を巻くのである。

是非、またこの地に戻る。

今回、この極めて貴重な機会を与えてくださった当顕彰会、様々なご支援をしてくださった地元、都城、川南、高鍋の方々、そして陸上自衛隊都城駐屯地広報班の方々に、心から深く感謝申し上げます。

これらのご支援がなければ、今回の慰霊顕彰活動は不可能でありました。

最後に「疾風戦闘隊」の歌詞の四番を紹介させていただきます。

勇みぞ鍛え来りなば

花の蕾も潔く

男 二十歳の 晴れの陣

機動部隊を 冥土の連れに

散らん 我らが特攻隊

荒鷲 疾風戦闘隊



都城特攻隊碑・都城西飛行場跡付近



「はやて」碑・都城



都城飛行場建設記念碑・都城駐屯地訓練場正門横



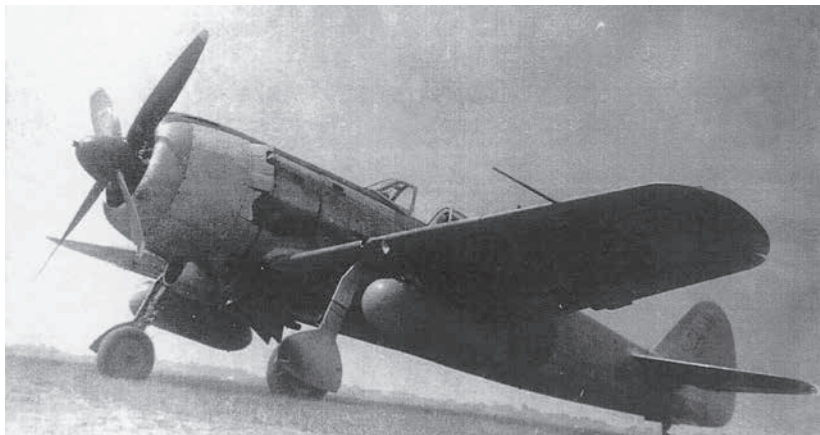
「はやて」碑・都城



空挺落下傘部隊発祥の地碑・川南



「はやて」碑前献花台・都城



四式戦「疾風」(キ84)

## 旧海軍鹿屋航空基地 特別攻撃隊戦没者追悼式 に参列して

理事 小倉 利之

平成25年4月6日(土)の追悼式当

日は、数日前からの天気予報で、春の嵐が九州北部に発生し、その前線の影響で風雨が強まり、荒天が予想されるとのことであった。鹿屋市はこの情報から、追悼式の前日に、場所を屋内に変更する決定をした。例年鹿屋市では、大東亜戦争中特攻攻撃のためこの地を飛び立ち、国難に殉ぜられた英霊を慰め、併せて恒久平和の実現を祈念するため、旧海軍鹿屋航空基地(現海上自衛隊鹿屋航空基地)を一望する慰霊塔前で、追悼式を挙行してきたが、当日はやはり、風雨が強く、昨日の変更の判断は的確であったと思った。

全国から参拝に見えた多くの御遺族の方々は、青空の下で、新緑を眺めながら英霊と語り合えることを楽しみにされていたと思うが、この状況下では屋内でも仕方がないと諦めざるを得なかったことは残念であった。

式場となった鹿屋市文化会館は、緑に覆われた小高い丘の上にある。例年追悼式が実施される小塚公園には、高

台の上に高さ10メートルの慰霊塔があり、その塔の上に南海の空に向かって飛び立とうとしている翼を広げた平和のシンボル「白鳩」が載っている。昨日から変更になった後に準備された式場には、それに劣らない素晴らしい祭壇が作られていた。

式次第にあった追悼飛行(第一航空群及び第211教育航空隊)及び儀仗隊用銃発射の中止等、屋内故の一部変更があったが、式典は、鹿屋市の市長を始め職員総員が参加しているのではないかと思うくらい、心の籠もった素晴らしいものであった。

式次第は、開式の言葉、一同拝礼、国歌斉唱、式辞、追悼の言葉、献花、式電披露、遺書朗読、生存者合唱(同期の桜)、主催者挨拶、遺族代表謝辞、一同拝礼、閉式の言葉の順で実施された。追悼の言葉では、市議会議長が一般市民代表として、また遺族代表者は、遺族として68年間の人生や子供のころ、兄弟のことを、更に生存者代表者は、同期生のこと、先輩のこと、後輩のことをそれぞれ述べられた。立場は違っても、その日々を辿る想いに変わりはないと感じた。

現役の海上自衛隊鹿屋基地航空群司令は、日本の平和を守ることの大切さを真摯に受け止め、日々精励しており

ますと述べられた。遺書朗読は、神風特別攻撃隊第五筑波隊・町田道教海軍少尉(鹿児島県出身・14期予備学生)が遺されたものであった。町田少尉の第五筑波隊は、零戦五二型に500キロ爆弾を装着した9機で編成、沖縄周辺敵機動部隊攻撃のため、昭和20年5月11日午前6時58分、第十建武隊及び第七昭和隊と共に出撃、午前10時13分に「敵艦見ゆ」の打電後突入、散華された。

### 遺書

母上に送る

新緑したたる晩春の、鹿屋基地は今春雨にそぼぬれて、ほんやりとかすんでいる。さすが第一線基地として、全てが騒然としている中、活気がある。敵機は、毎日のように来襲し、爆弾を投下して行く。時折り、時限爆弾が破裂している。

九州南端、この基地の春はたけて、つばめがかすみの中を、飛び廻っている。遠くのレンゲ草畑は、紫色にかすみ、咲きのこりの菜の花がわびしげに、あせた色をみせている。吾が命も、明日か、明後日でおわりである。しかし、ちっとも、切迫した気持ちは無い、日常のとおり、本をよんだり、わらったり、ふざけたりしている。

しみじみと、詩を吟ずれば、幼き頃

の故郷の面影、なつかしくおもいだされ、一人母様のことが考えられる。ただただ我々子等のために、その一生を送ってこられた父母のことを考えれば、今更ながら、ありがたさに涙がながれる。

父は、遂に私の軍服姿を見ることななく亡くなられた。苦勞して苦勞し切った父上を御安心させる事も出来ず、散って往くは深く心残りであるが、皇国のため男らしく、散った事に対して、ゆるしてくださるであろう。未だ今日も五月雨めいた小ぬか雨が降りつづいている。

古い小学校の校庭の、紅葉の若葉がためにぬれて、鮮やかなみどりをみせている。戦友達先程まで賑やかにやっていたが、皆語りつかれたのか、毛布をかけてねている。二つ、三つ先の教室から、わびしく「オルガン」のおとが流れてくる。兵舎に充てられた古い校舎の屋根から時々ぼたぼたと雨漏りがしている。

全く故郷の五月を思い出す。雨戸が締め切られ、明かりとりには、一枚開けられその近くで、良く母上は縫物をさっていた。私達は、その横でねころんで本を読んでいたものだ。ああ幼き頃の想い出は、実に遠いものになってしまった。もう一度母上と一緒に肩を並

べて歩いてみたいと思う。母上をあんしんさせてみたいという望みはもう全くなくなってしまう。私たちのために苦勞された母上に、その報いもせず楽しみも見せず散り往くは、残念である。私のこの望みを達成してくれるのは、弟正教である。素直に、元気で大きくなってくれる事を只管望む。お母さん、私が散った後、正教によく頼んで、平和な楽しい家庭を築いてくださるよう、私も靖國神社から祈っています。

この戦いにおいて、必ず敵を撃滅させるのですから、私が散っても、決してお悲しみにならないように、私は母上がたが、喜ばれるのが、嬉しいのですから、大いに褒めて下さい。では、くれぐれもお体を大切に、皆様のお幸せを祈ります。

母上様 さようなら  
道教 拜

**平成25年度  
義烈空挺隊慰霊祭に参列して**

事務局員 金子 敬志

平成25年6月15日(土)に、沖縄の現地で執り行われた平成25年度義烈空挺隊慰霊祭に参列させていただきました



生存者の方々による合唱「同期の桜」は、3年前に参列した時の参加者数は約50名位であったが、今回は15名であった。声量は十分であったが、参加者数の減少は否めず、これも時代の流れて致し方ないこととはいえ、寂しく感じたのは、生存者の方々のみではなかったのではないかと。

当日午後から、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館において、遺族の2家族及び生存者1名による、遺品等の贈呈式が行われた。

まず初めに、名和まさえ様から、お兄様が特攻に行かれるまでの戦中日記が寄贈された。名和様のお兄様は、第5七生隊の森丘哲四郎海軍少尉(予備学生14期)で、第5七生隊は、昭和20年4月29日に鹿屋から出撃した。日記は、大学ノート数冊にわたり、事細かに書かれていた。きつと親族に読んで

欲しかったのだろう。しかし親族の方も、史料館に寄贈し、「多くの方に読んで欲しい、それで御霊も浮かばれることでしょうか」と仰っていた。続いて、

茂木尚様から、昭和20年7月に鹿屋基地から出撃された特攻隊員240名程の名前が載った北海道新聞の記事が寄贈された。昭和20年5月11日に鹿屋から出撃した第7昭和隊の茂木忠海軍少尉(予備学生14期)の姉で旭川市在住の佐原トシ様(93歳)から保管を託された新聞で、東京で開かれた茂木忠少尉の同期生や遺族等100名程が集まった会合でこの新聞を披露したところ、複数の遺族等が「○○の名前がある」と言いながら食い入るように読んでいたという。茂木尚様は、個人で保有してはいけなないと思い、史料館に寄贈することに踏み切ったということである。「遺族は紙面に、顔写真や名前等、戦死した人の痕跡が残る

ものを求め続けていた。たった一行でも、名前を見ただけで魂に触れた気持ちになる」という。

史料館には同基地から出撃した特攻隊員の遺影や遺書など約2500点を展示している。当時の新聞もあるが、館長は「終戦直前に特攻で多くの人が亡くなった事実を示す史料として紹介できれば」と話していた。

江名武彦様からは、軍艦旗が寄贈された。軍艦旗は6種類あり、これは四幅というもので、巡洋艦用、通常の航海用又は戦闘旗として艦船に使用されていたものである。英国で入手したもので、「英国から帰還した軍艦旗」として、今後展示される予定である。

たので、その概要を報告いたします。

慰霊祭に先立ち、同日8時より読谷村にある「義烈空挺隊玉砕之地」の碑前において献花式が行われた。場所は読谷村役場の近くにある旧軍の掩体壕

の脇に標柱が建てられており、以前に在った場所は、米軍の軍用地返還に伴い、中学校が建設されることとなり、

一時は撤去されるおそれもあったが、地元有志のご努力により、平成23年6月に現在の地に移設されたとのことである。

参列者全員、碑前において黙祷を捧げ、代表者による献花、参列者全員による焼香が行われた。

その後、摩文仁の丘に移動し、11時

より「義烈空挺隊慰霊塔」前において慰霊祭が執り行われた。この慰霊塔は昭和51年に建立され、義烈空挺隊が読谷飛行場に突入した5月24日(昭和20年)を期して除幕式が執り行われたものである。

慰霊祭は国歌斉唱に始まり、黙祷・修祓の儀・御霊鎮めの儀・献饌の儀・



祭司祝詞奏上と続き、祭主である全日本空挺同志会沖繩支部長桃原浩太郎第15旅団一等陸尉が祭文(後掲)を奏上された。その後、全日本空挺同志会の衣笠陽雄会長と陸上自衛隊第一空挺団長前田忠男陸将補がそれぞれ追悼の辞を述べられた。

続いて、献楽として参列者全員により「空の神兵」を斉唱し、玉串奉奠・撤饌の儀・御霊送りの儀が行われ、滞りなく、慰霊祭は終了した。

**祭文**

本日ここに、平成二十五年度義烈空挺隊慰霊祭を挙行するにあたり、全日本空挺同志会沖繩支部を代表して、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

昭和二十年五月二十四日夕、熊本・健軍飛行場を飛び立ち、沖繩義号作戦に挺進し、祖国のため、そして沖繩のために御楯となり、この地に散華された奥山大尉が率いる義烈空挺隊と諏訪部大尉が率いる第三独立飛行隊以下百十余柱の英霊のことを思うとき、北

飛行場・中飛行場での激戦の様子が彷彿として脳裏に浮かんで参ります。米軍の記録によれば、読谷(北)飛行場は大混乱となり、航空機の損害は三十機以上、燃料は七万ガロンを焼き尽くし、飛行場は完全に機能不全に陥ったとあります。

そして、空挺隊員は、最後の一兵になるまで戦って玉砕されました。

この義烈空挺隊に対し「勇敢な戦士が、たとえ少数であっても、偉大な事が出来ることを示した。」と敵国の米軍人からも賞賛と畏敬の念を持たれるほどであります。

その義号作戦から、すでに六十有余年の歳月が流れ、我が国は、英霊の皆様の礎の上に、目覚ましい発展を遂げています。

しかしながら、豊かで平和な社会環境はともすれば精神的な退廃を生み、自己犠牲により国のために尽くすことの軽んじられる風潮を生み出しております。

このような状況にあつてこそ私たちは、英霊の御意志を受け継ぎ、国家の有事に際して、あるいは与えられた任務には、命を賭けて国に殉ずる気概を新たにするものであります。

義烈空挺隊慰霊祭も、去る五月十九日に皆様の発進基地であります健軍において、多数の来賓・旧挺進隊・空挺同志会他多数の参列を得て、盛大に挙行されましたのに引き続き、本日、この沖繩の地での慰霊祭も、全日本空挺同志会会長・第一空挺団団長・各会他

心(挺身殉国)を継承する新たな機会となればと思います。また、この慰霊祭を支える義烈空挺隊ゆかりの方々も高齢となつてきていますが、皆様の自己犠牲の精神と勇敢な行動は、戦後生まれの若き空挺隊員に脈々と受け継がれています。

私たちは、義烈空挺隊の末裔としてその御遺徳を継承し、我が国の平和と安全を守るために、なお一層の精進に励むことをお誓いし、追悼の言葉といたします。

平成二十五年六月十五日  
全日本空挺同志会沖繩支部  
支部長 桃原 浩太郎

**平成25年度  
義烈空挺隊慰霊祭に参列して  
会員(空挺同志会) 長瀬 彰孝**

平成25年度義烈空挺隊慰霊祭に参列させていただきました。

この慰霊祭は全日本空挺同志会沖繩支部が主催し、摩文仁の丘の東シナ海を望む最南西端地に建立された碑の前で、昭和51年から行われている。義烈空挺作戦が、昭和20年5月24日に決行されたことから、この日に近い日に慰霊祭が執り行われている。

空挺同志会は、落下傘の絆で結ばれた、旧軍及び自衛隊出身の元空挺隊員並びに賛助会員として現職隊員で構成された組織で、沖繩支部長は現職自衛官の桃原氏である。なお、全日本空挺同志会(以下「空挺同志会」と略称)の会長は、当特攻隊戦没者慰霊顕彰会専務理事の衣笠陽雄氏である。

今年の慰霊祭は、沖繩支部の主要構成員である第15旅団の部隊勤務状況から6月15日に実施された。前日の14日に沖繩は梅雨明けで、南国の強い日差しが照り付けていた。羽田を出発する時の、梅雨冷えの東京と比較して10度近くも温度差があった。

慰霊祭に先立ち、読谷村の旧北飛行場、即ち義烈空挺隊の玉砕地を、空挺同志会沖繩支部の有志の方の案内で訪れた。米軍からの返還後、総合開発が進み、かつての墓碑の地は読谷中学校が建設され、当日は中学生の野球大会が開催されており、元気な声が辺りを覆っていた。平成23年に村から提供された新たな場所は、隣の村役場の脇を通り抜けた人目には分かりにくい未整備地で、旧軍航空機の掩体壕脇に「義烈空挺隊玉砕之地」と書かれた墓碑が建っていた。既に先行された支部の方々と共に全員で黙祷を行い、その後、空挺同志会沖繩支部長、空挺同志会長、

第一空挺団長に続き、当顕彰会の金子事務局長が献花を行った。

空挺同志会沖繩支部顧問の山縣氏の話では、移設のために優柔不断な村役場と数年にわたり困難な交渉を行い、2年前によりやく現在の地に決定したとのことであった。また、当日は不参加であったが、地元の石嶺氏が、この交渉に尽力されたこと、更にこの日のために数日前から草刈りを行って周囲の整備を実施されたことなど、沖繩支部関係者の不断のご努力に頭の下がる思いで拝聴した。

読谷飛行場跡地の開発は、その緒に就いたばかりで、現在も道路の取り付けや整地作業が行われており、掩体壕と共に碑の場所のみが昔の儘の未整備地で、開発が進めば、この場所を史跡として保存しない限り、数年後には、かつての面影は恐らく全く無くなってしまふのではないかと危惧される。

その後摩文仁に移動することになったが、時間の余裕があるとのことと、空挺団の尉官代表織部二尉が参加されていたことから、急遽、衣笠空挺同志会会長と前田第一空挺団長の発案で、「嘉数高地」に立ち寄り、現地教育が実施されることになった。嘉数高地は沖繩に侵攻した米軍に対し、事前に周到に準備した縦横の陣地で対戦車戦闘

を行い、米軍の予想を遙かに超える持久戦を行った事で有名な戦跡である。織部二尉の説明を受けつつ、公園の展望台から普天間基地を一望し、話題のオスプレイを見ることができた。

嘉数は、かつて筆者が40年以上前、沖繩返還前に訪れた当時は、まだ戦跡は荒地のままであったが、今、周辺はすっかり住宅街となり、公園と化し、その中に壕跡やトーチカ跡が史跡として綺麗に整備されていた。

階段を上っていく途中に、広場が数箇所あった。土曜日とあって、中学生らしい10名程度の男女それぞれのグループが遊んでいたが、恐らく制服の自衛官を認めたのか、期せずして「今日日は」「お早うございます」との明るい挨拶があった。返還前に訪れたときは、赤旗を持った労働組合員、学生に罵声を浴びせられた筆者の記憶からは隔絶の感があり、時代の流れを感じるとともに、中学生たちの挨拶と澄んだ眼を見て非常に嬉しく感じた。

摩文仁での慰霊祭は、奥山大尉が書かれた遺書の中の文字から選ばれた「義烈」と刻まれた立派な石碑の前で予定どおり11時に開始された。

事前に空挺同志会沖繩支部及び第15旅団の現役隊員たちの手によって、碑の前には祭壇を設置し、参列者のため

にテントが展開してあった。祭壇には供え物が所狭しと並べられ、供花が飾られていた。読谷の玉碎碑と同様、当顕彰会からの供花も供えられていた。

供花は義烈空挺隊員として散華された沖繩出身者2名の御遺族からも供えられていたが、ご参列はないとのことであった。年々御遺族を含め関係者の減少という現実を垣間見た感があった。50名弱の参列者は、強烈な南国の日差しを遮るテントの下で、程よい海風を受けながら開始を待った。

ラッパ隊が奏でる前奏の後、国歌斉唱、黙祷、修祓の儀、御霊鎮めの儀、献饌の儀、祭司祝詞奏上と続き、祭主である桃原浩太郎空挺同志会沖繩支部長の祭文奏上、衣笠空挺同志会会長、前田第一空挺団長の各追悼の辞の後、献楽として全員で「空の神兵」を声高らかに斉唱した。その後、玉串奉奠、撤饌の儀、御霊送りの儀と滞りなく進み、1時間弱で慰霊祭は終了した。

最後に桃原沖繩支部長が参列者に謝辞を述べられたが、「後に続く者を信じ、敢然と任務に立ち向かった義烈空挺隊員の精神を継承し、この慰霊碑をしつかりとお守りしていく」との真に頼もしい御挨拶で締め括られた。

當日、摩文仁の丘の平和記念公園に駐屯する自衛官の下士官で組織された「曹友会」の幟が地域ごとに立っていたが、よく見ると、ボランティアで家族を伴い、公園の清掃作業が行われていた。駐車場に入る際、「今日は駐車場が一杯です」と、義烈の碑から離れた場所に駐車させられ、現地までの歩行で汗を流し、やや不愉快な思いがしたのだが、慰霊祭が終わって帰る際には、ボランティアを終えた曹友会の人たちが帰つたらしく駐車場が空いており、参加者が如何に多く、また清掃が見事に行われていることに気が付き、自分の気持ち

が恥ずかしくなった。こうした不断の地味な努力、恐らく家族を帯同することで無言のうちに子弟の精神教育がなされていることを考へるとき、そのお陰で平和公園や顕彰碑が護られ、先の大戦で犠牲となった多くの人々の鎮魂に役立っているのではないかと改めて感じた次第である。私も、遅時きながら出来ることから始めることとし、日本の真実の歴史を学び、後世に伝えるべく努力をしなければと思ひ直し、心洗われる清々しい気持ちで同地を後にした。

# 平成25年度 豫科練雄飛会戦没者靖國 神社慰霊祭に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

平成25年4月4日(木) 正午より、

豫科練雄飛会(会長・小林和夫氏)主催の「平成25年度豫科練雄飛会戦没者靖國神社慰霊祭・招魂観桜会」が、同神社拝殿及び本殿、並びに靖國會館において執り行われ、当顕彰会代表として参列しましたので、以下に報告いたします。

## 一 慰霊祭の概要

靖國神社での春の慰霊祭の象徴でもある桜(ソメイヨシノザクラ)は既に盛りを過ぎたが、境内の八重桜は丁度満開で、御英霊との年に一度の再会のための慰霊祭としては打って付けの舞台であった。

豫科練関係団体には、かつて甲飛会全国連合会、豫科練雄飛会、丙飛会、特飛会等があり、それぞれが慰霊祭を実施していたが、会員の高齢化のため現在では、雄飛会のみが慰霊祭を続けているとのことであった。

慰霊祭典は、拝殿において国歌斉唱



から始まり、修祓、献饌、祝詞奏上と続き、小林会長が祭文を奏上された。会長は祭文の中で概要次のとおり述べられた。

「・・・顧みますと、豫科練雄飛会は昭和33年3月、生存在京の同窓有志が相集い、先の大戦においてひたすら

祖国と民族の安泰と繁栄を願いつつ、花よりも更に深く散華されました。一万八五六柱の同期の御霊に對し慰霊の誠を捧げるとともに、その戦績を正しく後世に継承すべく支え抜いていただいで、本年55回目を迎えることになりました。本日ここ靖國の社に多くの御遺族の皆様と共にかつて同じ職場において起居を共にされた諸先輩も大勢参列されておられます。どうぞ一時社殿にお降り下さいまして、忘れることのできない懐かしい当時の数々の思い出を胸に、声なき声を以て語り合せて頂ければと心から願っております。

豫科練の歴史は、第一次世界大戦の

戦訓から、昭和5年海軍省の要請を受け、飛行豫科練習生制度としてスタートし、海軍軍人としての人作りに始まり、航空機搭乗員としての必修の高度な知識と基本的技術の習得をすべく日夜厳しい訓練に入り、豫科練習生の課程を終え、飛行練習生へと進み、実習部隊を経て多くの先輩が大陸での戦いに始まり、今次大東亜戦争においては、海軍航空戦力の中核として、数々の戦績を残されたのであります。

そして、無限の未来を秘めながら、祖国を救うため何のためらいもなく散華された豫科練習生同窓の貴い遺績を正しく後世への願いから、多くの先輩が学ばれた豫科練の聖地、旧土浦海軍航空隊の一角に、昭和41年5月、その慰霊碑の建設に続き、2年後には同窓戦没者の遺徳を継承するための遺品・遺書等を一同に展示された記念館も建設され、御遺族を始めここを訪れる多くの方々に感銘を与えております。

戦後はや68年、時の経過と共に記念館を訪れる方々も親から子、孫たちへと年齢構成等も大きく変化しつつあるという時代に応じた対策が必要との考えから、現状を再点検し、貴重な遺書・遺品・慰霊等の展示に、パネル化と展示化を全面的に採用、重ねて陸上自衛隊武器学校当局の御理解と御協力

の下、この学校のOBである海原会役員の方々の格別なる御尽力により改善がなされ、現在これが完成しつつあることは、必ずや未来を担う皆様が平和を考える糧になることと確信し、関係された皆様に深甚なる感謝の念を込め、在天窓の英霊に御報告を申し上げます。昭和の時代を生き抜いた豫科練雄飛会会員も今日全員が超高齢化集団となりましたが、あの戦後間もない苦難の時代、多くの諸先輩があらゆる困難を乗り越えて立ち上げていただいた輝かしい伝統を誇る豫科練雄飛会の設立の、純粹にして崇高なる精神は全員しつかり心に留め、会員の力を合わせ、生ある限り精進することを、心新たにしてお誓い申し上げ、願わくば悠久の大義に殉ぜられた同窓の御霊とこしえに安らかにと御祈念申し上げます。」

会長の祭文は、同窓の英霊に対し、

## 平成25年度(第59回) 知覧特攻基地戦没者慰霊 祭に参列して

理事 水町 博勝

心からの慰霊と現在の顕彰についての熱意の籠った、分かりやすい内容であり、豫科練や雄飛会の歴史や現在の状況についても良く理解できた。

次いで、「海行かば」を全員で斉唱、献歌した後、本殿に昇殿して玉串奉奠、黙祷をして退下し、慰霊祭典は滞りなく終了した。その後靖國會館前にいて参列者全員の写真撮影が実施された。

直会(招魂観桜会)は、靖國會館2階の間において、早川事務局長の司会で開始され、北崎副会長の挨拶、遺族・来賓の紹介、来賓挨拶と続き、丙飛会会長の献杯の音頭で招魂観桜会が開始された。軍歌演習の後、最後に会長のお礼の言葉で閉会となった。参加者の皆さん高齢とは言え、本当にお元気で素晴らしい祭典・直会であり、印象に残る慰霊祭であった。

### 二 参加所見

当日は150名という多くの参列者

平成25年5月3日(金)、知覧特攻

慰霊顕彰会(会長・南九州市霜出勘平市長)主催の知覧特攻基地戦没者慰霊祭が、知覧特攻平和観音堂前において執り行われ、当顕彰会を代表して、事務局の金子敬志氏と共に参列しましたので、報告致します。

のうち、来賓・遺族の数は比較的少なく、大部分は豫科練出身の方達であった。受付業務も高齢の会員が当たるなど、他の慰霊祭とは少し違った雰囲気であったが、それにしてもお元氣な会員が多いのには驚かされた。

私と共に参加された世田谷山観音寺の恵順住職が後に、「旧軍の方々が久し振りに顔を合わせた途端に顔が明るく力が漲り、思い出話をされる姿に私も元氣を貰いました」と話しておられたとおり、快活な感じの慰霊祭であった。

問題は、この慰霊祭の将来でありましょう。当日は体調不良な方も見受けられたが、お元氣な方が多く、他の慰霊祭に比べまだまだ継続できると思われるが、甲飛、丙飛、特飛の慰霊祭は既に中止されており、乙飛についても時間の問題である。昭和から多くの各種慰霊団体が慰霊祭を実施してきたが、最近では中止する団体が激増して

### 一 慰霊祭

当日は新緑のまぶしい好天の下に、慰霊祭が執り行われたが、開始に先立って、海上自衛隊鹿屋基地からP3Cの慰霊飛行が行われた。式場は千人近くの老若男女の参列者で、溢れんば

いる感がある。色々な慰霊祭に参加して将来のことを尋ねると、「我々(当事者)が参加できなくなれば終わり」とする会と、御遺族や会の趣旨に賛同する人達に後を任せ、慰霊祭を永遠に継続する」会とに大きく分かれる。前者にしても、英霊の慰霊顕彰は、残っているどこかの団体にまとめて慰霊祭をお願いするなどして、その灯は消さないであろうが、実質的には消滅ということになる。雄飛会については、どのようなお考えなのか聞きそびれたが、いづれにしても当事者の考えに改めて部外者が云々する問題ではない。

我が顕彰会も旧軍関係者は殆ど高齢化により若い世代と「世代交代中」の終期であるが、特攻隊戦没者の永遠の慰霊顕彰活動のための基礎をしっかりと固めて次世代へと申し送り、慰霊の灯を消さないようにしなければならぬと思う。

かりの盛況であった。式典は、知覧名産の献茶、全員の拝礼・黙祷の後、読経の流れの中、焼香が行われ、会長を始め、名誉市民の元市長、多数の御遺族、鳥濱トメさんの御遺族、各界の代表、関係者一同へと続いた。会長は追悼の言葉の中で、戦後68年を迎えて、



知覧特攻平和観音堂



知覧特攻平和会館



三角兵舎

戦争を知らない国民は8割にも達している。史実を正しく伝えることが市の務めであり、1038柱の英霊に應えることである、と述べられた。続いて慰霊の言葉は、市議会議長、地元県議、特攻隊員の御遺族、少飛会、特操会、偕行会各代表者からも述べられたが、第8飛行師団（台湾）所属特攻隊・第20戦隊高田豊志伍長（戦死後少尉・少飛13期・昭和20年5月13日台湾から出撃、沖縄・那覇南西海上にて戦死）の御遺族・弟高田タカシ氏（富山県南砺市）は「兄は父母・弟妹・祖父母・叔父叔母各々に宛てた思いを込めた辞世

の言葉が語られ、その宛て先の者も今は二人だけになってしまった、とその想いを述べられた。また、戦友からは、日本の危機に臨んだ仲間の戦死を悼み、戦後は友の分もと努めた。そして、戦後日本を抱える北方四島・竹島・北朝鮮・尖閣の問題の解決もなされず、将来を憂う言葉も述べられた。献詠では「夢にだに忘れぬ母の涙おぼいだきて三途の河を渡らむ」第20戦隊高田豊志少尉の辞世の句のほか2首が詠じられた。慰霊電報披露、参列者全員による献花の後、第十二普通科連隊（国分駐屯地）音楽隊による献奏「海行か

ば」が演奏された。南九州市長は挨拶の中で、特攻隊の史実を記憶世界遺産としての登録を目指していると述べられた。その後全員による「加藤隼戦闘隊」と「同期の桜」の慰霊斉唱と拝礼により、2時間にわたる厳粛にして心を込めた慰霊祭は終了した。なお、御遺族の白田理事他当顕彰会の方々も参列された。

## 二 特攻平和観音

必勝を信じ、国家興隆の礎石たらんと征途に就かれた特攻隊員を顕現した特攻平和観音である。特攻平和観音像立趣旨にも、菅原道大元中将（第六航空軍司令官）は次のように書いておられる。即ち、「一瞬名目合掌して静かに特攻勇士の在りし日の面影を思浮かべ、転じてその純真無垢な慈顔が大慈大悲の平和観世音と化して永く後世に光被するの因縁を思ひ」と。

世田谷山観音寺での特攻平和観音の遷座供養は、昭和28年7月12日に行われた。顕彰会の特攻平和観音と世田谷山観音寺の冊子に知覧への分体について、次のように記されている。

「陸軍関係者は、遅れて出来上がった二体の内の一体は、陸軍沖縄特攻作

戦の主要基地であった知覧飛行場跡にお祀りするのが望ましいと、菅原元中將が、鳥濱トメさんに地元の意向を打診したのである。トメさんが観音寺に来て奉賛会の意向を確認し、町に戻って役場以下関係方面に根回しをして、町を挙げて観音像を引き受けることになった。知覧町で初めての慰霊法要が行われたのは、昭和30年9月28日であることから、トメさんが上京したのは、早ければ、昭和28年中と思われる。遅れて完成した二体は世田谷山観音寺で開眼供養が行われた。」

今の慰霊祭、知覧特攻平和会館、石

灯籠の並ぶ道を思う時、戦中戦後の鳥濱トメさんと南九州市知覧町始め関係者、そして戦後の世田谷観音との強い糸で結ばれた絆を感じた。

**三 特攻平和会館**

特攻隊の史実を正しく伝えるために、その時の装備・隊員・基地・知覧町の様子を克明に見ることができるよう膨大な資料が展示されている。また、語り部の方によって見る物の真実を教えていただき、正しく特攻の歴史教育の現場を見せていただいた。話し終った

とを教えてもらった、心の琴線に触れさせていただいたことへのお礼の音に聞こえた。そのお一人、川床参事は、小生が防大一年生の時の四年生で、先輩であるが、この記念館には多くの方が来場するが、その中には、久留米にある陸上自衛隊幹部候補生学校の各課程の学生も当会館を訪れていると伺い、正に戦史や精神教育の場にもなっているのかと感心した次第である。

特攻戦史を専門に調査研究されている八巻専門員にもお会いしたが、当顕彰会会報『特攻』第94号に、第六航空軍参謀であった父の事を記したとこ

ろ、防衛研修所戦史室に残された父の作戦日誌を入手され、今回小生も初めて目にするのができたのであるが、それを複写し、整理された資料を頂き、特攻作戦の一部ではあるが、史実を知ることのできる貴重な資料である。当顕彰会の資料にもさせていただきました。有り難うございました。



平和観音堂内祭壇



特攻平和観音像



慰霊祭式場



参列者献花の列

### 第42回萬世特攻慰靈碑慰靈祭に参列して

評議員 新垣 敬輝

平成25年4月14日(日)、鹿児島県南さつま市加世田の、旧陸軍萬世飛行基地跡の一角に建つ、萬世特攻慰靈碑「よろずよに」の前において第42回萬世特攻慰靈碑慰靈祭が執り行われた。私は当顕彰会を代表して参列するとい

う非常に名譽な職務を与えて頂き、同地を訪れた。

加世田並びに万世は、私個人としては10年振り2度目の訪問となる。萬世飛行場は、周辺住民の全面協力の下に昭和18年から極秘に建設が始まり、翌19年末から昭和20年初頭に完成した急造の飛行場だった。滑走路は東西800メートル、南北400メートルの砂地の露地で、小さな木造格納庫が1棟あるだけの簡素なもので、飛行場として使われたのは、昭和20年3月28



出撃を二時間後に控えながらも十七歳の少年飛行兵はあどけない笑顔を浮かべた

日から6月19日までの間で、その全てが、沖縄周辺海域に展開する米機動部隊に対する特攻攻撃だった。当時萬世飛行場は、陸軍最前線の特攻基地と呼ばれていた。

ここを飛び立った122名の特攻隊員と直掩隊、通信隊の戦死者79名、合わせて201柱の基地関係特攻等戦死者の慰靈祭が毎年、慰靈碑奉賛会主催により、地元自治体の全面的協力を得て執り行われているものである。

(編注・昭和20年3月25日、米軍の慶良間列島への上陸開始を受けて、陸海軍は翌26日、「天一号作戦」を發動。陸軍の第六航空軍・軍司令官菅原道大中将は、第一次航空総攻撃を4月6日と決定した。開設後間もない萬世特攻基地には、国内外各基地で編成された陸軍特攻隊とその直掩隊、整備隊及び防空隊が続々と集結した。その第一陣として、4月6日、第62振武隊(下志津)、第73振武隊(朝鮮・平壤)、及びこれを援護する飛行第66戦隊(いずれも九九式襲撃機)が出撃し、第62振武隊の4機、富澤健児少尉以下5名、第73振武隊の11機、高田鉦三少尉以下12名が沖縄本島付近の米軍艦船に突入し、散華された。引き続き翌7日以降6月11日頃まで、数次にわたる沖縄航空作戦において、第74振武隊(平壤)、

第75振武隊(平壤)、第102振武隊(満洲・平台)、第104振武隊(平台)、第72振武隊(平壤)、第432振武隊(満洲・四平)、第433振武隊(四平)、第141振武隊(明野)、第144振武隊(明野)などが相次いで出撃し、特攻戦死者122名、その他、直掩隊飛行第66戦隊(九九式襲撃機)72名、飛行第55戦隊(三式戦)6名、第19航空通信隊1名、合計201名の方々が特攻あるいは特攻に準ずる戦死をされている。このうち、以下に出でくる第72振武隊は、第23練成飛行隊(朝鮮・平壤)所属の教官及び隊員で構成され、隊長佐藤陸男中尉(陸士56期)以下12名、九九式襲撃機12機で編成された。昭和20年第五航空軍の指揮下に入り、平壤から北京、濟南、南京へと向かう途中、米軍機の襲撃を受けて2機(1名戦死、1名重傷)を失い、5月5日には第六航空軍の指揮下に入り、同月17日に佐賀県・自達原飛行基地に進出、待機した。隊員達は同基地の北西2、3kmにある東背振村横田の西往寺を宿舎として出撃までの僅かな日々を過ごし、家族や近所の婦人達の話として伝えられるところによると、隊員達は、自らを「ほがらか隊」と名付けるほど、底抜けに明るかったという。命が尽きる

日待つ毎日だというのに、常に朗らかに振る舞うその姿に土地の人々は皆驚いていたという。隊長の佐藤陸男中尉は温厚で、若い隊員達の中に溶け込んでいたし、早川勉伍長は、「自分が隊長より先に一番機となつて突つ込むんだ」と話していたという。また、荒木幸雄伍長（写真の中央で子犬を抱いている）は、出撃と決まった日に私物を整理しながら、「これ、しーちゃんに上げるよ」と言つてハーモニカを静枝さん（住職の次女）に贈つたという。

5月25日に萬世特攻基地に進出した第72振武隊は、5月26日午後4時を期して出撃する予定であったが、悪天候のため延期となり、翌27日の夜明けに萬世飛行場を出撃し、隊長佐藤陸男中尉、小隊長新井一夫軍曹、及び荒木幸雄伍長、千田孝正伍長、高橋要伍長、高橋峯好伍長、知崎利夫伍長、早川勉伍長、久永正人伍長（いずれも少飛15期）の9名（金本海竜伍長機はエンジン不調のため基地に引き返した）が沖縄南部海上で、他の陸軍1隊5機、海軍1隊20機と共に敵艦船に突入、27日から28日にかけて、駆逐艦1隻撃沈、高速輸送艦・兵員揚陸艦各1隻を戦列復帰不能、駆逐艦2隻大破、護衛駆逐艦1隻・駆逐艦1隻・掃海駆逐艦1隻・高速輸送艦2隻・商船3隻・掃海艇1隻小破の戦果を挙げた。）

この201柱の英霊の遺影、遺筆、遺書、遺品等が萬世特攻平和祈念館に展示されている。ここに展示されている写真の中に、所謂「特攻写真」の中でも最も我々に馴染みのある一枚の写真がある。仔犬を抱いた一人を中心にする5人の特攻隊員が写っている写真で、当頭彰会のホームページの表紙絵にもなっており、特攻に少しでも関心のある者ならば一度は目にしたことのある写真である。

識しているのも彼ら自身なのである。仔犬と戯れている17歳から19歳のこの5人の若者は、5時間後には自分自身がこの世から居なくなっていることを承知している者達なのである。萬世に限らず当時の特攻基地には、何故か仔犬がよく見かけられ、その仔犬と戯れる若き特攻隊員の姿は、どの基地においても見られたさうである。そんな中で従軍カメラマンによって撮られた写真が唯一残つたということである。

では彼らは実際の出撃の時、どのような表情で、どのような言葉を残して飛び立つて征つたのであろうか。

そのことを私達に伝えてくれる貴重な資料が残っている。写真の中で前列右側に写っている千田孝正伍長（少飛15期・19歳）の搭乗機整備員だった、宮本誠也軍曹が、終戦の年の昭和20年12月に、千田伍長の実家に出した手紙がある。この中に特攻隊員達の日頃の様子や出撃の表情が克明に綴られている。少々長いが原文のまま引用する。

「千田梧市 様

拜啓 突然の乱筆で失礼申し上げます。私は御息、千田孝正伍長と最後まで一緒にいました少飛十一期の宮本軍曹であります。千田伍長は昭和20年5月27日早朝、鹿児島県萬世飛行場

第72振武隊（ほがらか隊）の少年飛行兵（少飛15期）右より  
久永正人伍長（大14生）  
早川 勉伍長（昭2生）  
知崎利夫伍長（大15生）  
高橋峯好伍長（昭3生）





より陸軍特別攻撃隊第七十二振武隊員として出撃、敵の空母を海底深く葬り去り、見事護國の華と散られました。私は千田君の愛機の機付長と言ひまして、飛行機の行く所常に操縦員千田君の後部座席に同乗し飛行機の整備に当っております者です。

千田君が、大きな爆弾を抱えた愛機に搭乗し最後の離陸をする直前、私に「特攻出撃のこと、家の者に宜しく便り願ひます」と申され発つて征きました。で、とるに足らぬ私ではあります。が、拙い筆にて千田君と過ごした日々を偲びつつ、お便りを申し上げる次第であります。この第七十二振武隊といふのは、隊長殿の佐藤中尉が温厚な人柄で、和氣藹々の部隊でありました。隊員達も自分達から「特攻朗らか部隊」と名付けたくらい陽気で、愉快な連中の集まりでありました。少しでも酒が入れば・・・いやそんなもの無い時でも隊員達の周辺から歌の聞えないことは珍しいといふ、軍隊特有のいかめしさもこだはりもない、澁刺とした若さ溢れる隊でありました。その頃の隊員達の間には何の恐れも無かつたのです。上官の顔色を見るとか、形だけの軍規軍律に縛られるとか、そんなけちな考えは悠久の大義に生きんといふ隊員達の大理想の前に全く掻き消えてし

まってるたのです。全ての行動が自信に満ち、純で神を観る如き若者達でした。ですから佐賀の村人達は毎日朝から何十人といふ老若男女がやって来ました。リヤカーに酒や卵、鮎、煮染、おすし等を乗せて。「この度は御苦労様です・・・これをどうぞ召し上がって下さい」と涙をこぼし、拝みながら言ひます。夜になると村人の中で芸自慢が歌や踊りで慰問をしてくれました。が、特攻朗らか部隊の隊員達のはち切れるばかりの元気な余興は、かへって逆に村の人々を慰問するほどでありました。なかでも人気者の千田伍長の陽気な、鉄砲玉とはおいらのことよ待ちに待つてた首途ださならば、友よ笑つて今夜の飯をおいらの分まで喰つてくれ・・・と歌ひながら剽軽な身振り手振りで踊る「特攻唄」には、村の人々を爆笑させ、そして、涙ぐませるのでした。

佐賀の村人達の厚意はこのように非常なものでしたが、二十歳前後の前途有為な隊員達の、将に散らんとするを、これを見送る餞として、決して多過ぎはしなかつたと思ひます。でも隊員の方々は恐縮して申し訳ないような顔をして居られました。勿論「もうすぐ特攻で死ぬんだぞ」などといふ昂ぶつたところ等、全く見られませんでした。

和やかで若者らしい元氣良さが溢れてゐました。最後の基地、加世田の万世飛行場では我々は整備に追われて、あまり千田君達と話をする機会はありませんでした。ちょっと会つた時千田君は、「先輩、お金はありますか」と言ひます。金ならあるよ、どうしてと訊くと、「いや、自分は明日でおしまひですから、金など持つてゐても仕様がありませんので、使つて貰ほうと思つて」と言ふので、それなら御両親のところへ送つておけよ、と申しますと、今度は「これを形見に貰つて下さい」

氣のいい千田君はパイプ、搭乗員の遮光眼鏡、風呂敷からマスコット人形まで・・・その他色々なものを私の手に押し付けてゆきました。今私はそのパイプをハンカチで磨きながら淋しく部屋の机に向かつて千田君の佛を偲んでいます。マスコットの特攻人形は私のズボンのポケットに下がっています。この人形もきつと千田君と共に沖繩に行けなかつたことを残念に思つて居るのでせう。

いよいよ二十七日が来てしまひました。我々にとつては恐ろしい二十七日でした。こんなに心の通じ合つた若い友達を沖繩の海に散らさねばならないのですから。その前夜、二十六日から愛機の翼の下でうたた寝をして一夜を



右より  
高橋 要伍長 (昭2生)  
千田 孝正伍長 (大15生)  
荒木 幸雄伍長 (昭3生)  
「只一筋に征く」は荒木伍長の遺筆より

國語専攻  
求められ、書き直したハンカチ。  
は荒木伍長の遺筆を引用  
※(横断線) (原注)

明かした整備班の我々は、午前四時少し過ぎに千田君らの引き締まった顔を迎へました。たしか、いつもとは違った何かを感じました。神々しいと言ふか、力強いと言ふか、そんなものを。朝の霞が遠く山のや森を裾のほうだけを隠して、南国とは云へ飛行服を通す風が背中にしみ通って何か薄ら寒さをおぼえます。千田君は飛行機の所へ来ました。命令を受けて既に空母に体当たりだと言ふ自信満々の様子でした。

千田君は私の前に、「先輩、千田の弁当を食つて下さい」と風呂敷包みを差し出します。それは千田君の朝食でした。俺はいいよ、千田こそ食べておかぬと戦が出来ぬぞ、と言ふと、「あと三時間もすれば突つ込むのですから、無駄ですよ」と。私はとうとう風呂敷包みを持たされました。

五時五分前に私の「始動！」の号令で爆音があがりました。全機快調。私は千田君の手に操縦桿を渡しました。これは死んでも離すことのない操縦桿なのです。車輪止めも外しました。二度と必要のない車輪止め。

第七十二振武隊は一機また一機と出発線に進んで行きます。千田君は、にっこりと笑つて私に敬礼しました。轟音をあげて滑り出す愛機。残念です。いつもなら必ず千田君と共に機上の人と

なるのに、今度ばかりは一番大切な最後の飛行に取り残されるとは。敬礼をする私の手は震えました。しっかりと頼むぞ千田、いや、千田少尉殿。いよいよ離陸です。隊長佐藤中尉機がまず大地を蹴れば、二番機、三番機と、二百五十キロ爆弾を抱いて、二度と踏むことのないこの本土を離れて征きま

す。六番機、千田機です。笑つています。手を振つてみます。目の前を矢の様に通り過ぎると、もう松林の上にはボソンと後ろ姿を見せておりました。全機頭上を一回大きくまはると、もう堂々たる編隊を組んでいます。右から二番目が千田機です。一路沖繩をさして、この世に未練無し、思ひ残すこと無し、ただ悠久の大義に生きることのみ。私達は愛機が南の空に見えなくなるまで力の限り飛行帽を振りました。

見えなくなつた。見ようとしても二度と見得ないのだ。私は笑つて征つた千田君、千田少尉殿の幻を追ひました。「何も言ふ事なし。我幸福なり。大空の華と散り、父母に孝をいたさん。ただお元気で宜しくと故郷の父母に便りされたし」その千田少尉殿の声は、今も私の耳元にあります。

東の空に陽が昇り始め、時に五時十五分。もはやなんの音もしない飛行場。気がつくとい私は千田君から貰つた

弁当入りの風呂敷をぶら下げてつくねんと突つ立って居ました。」

以上が千田伍長達を見送つた整備兵が千田伍長の父親宛に出した手紙である。この手紙を通して彼ら特攻隊員達が出撃するまでの数日間をどのようにに過ぎ、そして最後にどのようにに出撃して征つたのかのほんの一端を後世の私達も知ることが出来る。基地周辺の人々は彼らが考え得る全ての方法で若き特攻隊員達に接してくれた。その姿は当時の銃後の日本国民の総意を結集したものであった。それに対して特攻隊員達は謙虚にそれを全身で受け止めていた。あの写真の中でひとり仔犬だけが何故か淋しげな表情をしている。それは特攻隊員達を見送る立場の者達、家族や友人、基地周辺の人々、整備兵達、彼ら見送る人達の気持ちがある仔犬の表情に偶然にも凝縮されて表れているように私には観える。自身の特攻出撃を家族にさえ知らせていなかった特攻隊員がいたことを、この手紙は私達に教えてくれる。

5人のあの少年飛行兵の特攻隊員達は、やはりあの写真の表情のままに、淡々と、飄々と、そして凜として沖繩を目指して、二度と還ることのない祖国日本を飛び立って征つたのだった。

慰靈祭の前日、万世特攻平和祈念館

において、私は一人の若い女性に声を掛けた。彼女は、館内に展示してある特攻隊員達の遺筆や遺書を持参のノートに黙々と書き写していたのだった。昨年高校3年生の時にこの祈念館に来て特攻隊員達の遺影と対面した時、彼ら特攻隊員達のことを後世に伝えるのが自分の使命と決めた。今春大学にも合格できたので、4年生になった時の卒業論文は、「特攻」について書くつもりであるということなどを静かに語ってくれた。最近彼女のような若い世代が着実に増えていることを私は実感している。「特攻隊のことを後世に伝える」、このことにこそ、当公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会の存在意義がある。と同時に、当会の活動に関わらせていただいている私達の責務は重く、そして大きい。このことを再確認させていただいた有意義な二日間であった。

### 鹿兒島県出水市特攻慰霊碑 慰霊祭に参列して

副理事長 藤田 幸生

人にはそれぞれに、慰霊祭に出席する思いがあります。それは、御遺族、戦友は勿論のこと、当時の上司や部下、今の自衛官やそのOB、あるいは知人、基地やその地域との繋がり、更には一般個人の信念などが浮かんできます。「自分にとって、一番強いのは何だろうか、それは心からのものか」と、いつも考えさせられます。

(株) さくらツアー(鹿兒島市)が、4月15日・16日の間で募集した「特攻出撃基地巡礼の旅」に応募して、例年出水市が実施している第54回特攻碑慰霊祭に参列する機会を得ました。当地へのツアーは初めて公募されたもので、知覧、万世両特攻記念施設を回って、出水の慰霊行事に参加するものでした。公益財団法人特攻戦隊没者慰霊顕彰会(以下「顕彰会」という)の代表として参加しました。

念願の参列でした。我が顕彰会からは、及川評議員と二人で参列しました。及川評議員は、昨年も訪れており、現地顔見知りもできていて、沢山の関係者から声を掛けられていました。

状況を報告します。鹿兒島空港到着後、ツアー一行8人は、専用貸切ワゴン車で行動しました。知覧、万世を巡拝し、既知の関係者にご挨拶した後、夕刻、出水市のホテル「キング」にチェックインしました。

その夜は、同ホテルのホールで、出水市の渋谷俊彦市長主催の「交流会」が行われました。市長は、特攻慰霊碑顕彰会の会長でもあります。この「交流会」には、全国から集まって来られた御遺族、戦友を始め、出水市の市議会議員長、商工会議所会頭など各界代表、幹部職員、特攻慰霊碑顕彰会の皆さん、及び賛同者、現地陸海自衛隊代表、それに私達ツアー参加者を含めて総勢60名程でした。ホールには舞台もあり、フロアにある円テーブルには10名位ずつ着席し、落ち着いた雰囲気でした。市長の挨拶から始まり、自衛隊鹿兒島地方協力本部長内野 誠一等海佐と、突然の指名により私も挨拶をしました。

とのことでした。しかしながら、「交流会」は、地元の皆さんによる歓迎慰霊舞踊など、和気藹々とした雰囲気の中で進められ、私もそれに誘われて、「我が戦友よ」の歌を、歌詞を説明しながらアカペラで紹介しました。この

歌は、今年の春の靖國神社での特攻隊戦没者合同慰霊祭で初めて献歌した特攻予備学生の歌です。少し勇気が要りました。すると会場から「もう一度通して!」との声が上がりました。楽譜と歌詞のコピーを会場に配り、及川評議員と二人で歌おうとしたところ、会場からも初めての人が飛び入りで加わり、大勢で合唱してしまいました。この時、会場の気持が一つになったように感じました。「歌の力は大きい」と実感した次第です。このことが伝わったのか、後に陸上自衛隊国分基地音楽隊が部隊で練習を始めたそうです。

終了後、クラスの橋元君と、旧交を温めることができました。これも英霊のお引き合わせでしょう。感謝でした。翌16日の慰霊祭は、11時からでしたので、その前に、出水市内の武家屋敷など街の佇いを見学しました。熊本との県境に位置する出水は、昔の薩摩と肥後の国境です。武士の屋敷にも、その備えが感じられ、独特の雰囲気が残っていました。特に説明を受けた

「出水兵児修養掟」は、この地に住んだ武士の矜持を表したものでした。現在の日本人にとっても大切なことが表現されており、印象深いものでした。会場に着くと、地元の特攻慰霊碑顕彰会の方、消防団、更に加えて、陸上自衛隊国分基地から派遣されてきた儀仗隊、音楽隊の皆さん等が、立て付けや準備に追われていました。そのような中、御遺族や戦友の方達も次々と到着されて、あちこちで談笑の輪が広がる等やかな雰囲気、昨夜の「交流会」が再現されたように感じました。

木々に蔽われて花々が咲く小高い丘の上に、特攻慰霊碑「雲の墓標」と国旗掲揚塔が建っていました。その丘には、地下に昔の司令部壕があり、多くの慰霊塔が肩を寄せ合うように並んでいました。その丘を見上げるように、会場は設営されていました。

テントが張られ、その下に並べられた椅子・何となく心の温かさを感じました。定刻の直前に、海上自衛隊鹿屋基地からP3C1機が飛来しました。この慰霊飛行を、総員がテントから出て仰ぎました。皆、飛び去って行った空の彼方を見詰め、その余韻に浸っていました。それぞれに万感の想いがあったことと思います。印象に残る慰霊飛行でした。休日返上の現役の皆さん

んに感謝です。部隊代表で参列していた首席幕僚石橋1等海佐と地方協力本部長内野1等海佐に、気持ちをお伝えしました。慰霊祭は、式次第に従い整斉と執り行われました。顕彰会からは、私と及川評議員の二人が指名献花を行いました。



慰霊祭式場

慰霊祭終了後、ツアー一行は、出水の慰霊祭を作り上げてこられた功労者である、竹添二雄氏のご自宅に招かれました。落ち着いた旧家のご自宅には、毎年お接待で関係者が招かれてきているそうです。土地の料理と酒を頂き、様々な貴重なお話を伺いました。竹添氏は、

永年にわたりこの慰霊祭のために尽くされて来た方で、今回、出水市から感謝状が贈呈されました。心の籠もった最高のお接待に感激させられました。帰りの飛行機便の時間もあり、早々にお暇した次第です。心残りでした。

鹿児島空港近くに、旧海軍第二国分基地跡があり、慰霊碑があるとの情報で、そこに短時間立ち寄りしました。今は、民間の酒造会社の敷地になっており、社長から直々に丁寧な案内をいただきました。敷地の中にある慰霊碑に参拝し、地下壕の入口まで歩きましたが、そこは竹藪の中に埋もれていました。心の中で合掌してその地を離れました。

今回は、知覧、万世、出水と巡りました。出水の慰霊祭における、心の籠もった式典とお接待が、極めて印象深いものでした。規模の大きさや実績を問わず、観光的な気配を感じさせない慰霊祭に、関係されて来た方々の心を感しました。戦没者慰霊祭の原点です。是非、再訪したいと思いました。

最後に、いつも考えていることです。春の薩摩路は魅力的です。到る所に花々が咲き、温泉があり、美味しい食べ物があります。日は日一日と長くなっていきます。この時期に、各地の特攻慰霊祭が続きます。四国八十八箇

所巡りのように、この地を巡拝するツアーを、毎春、計画してくれるところはないものでしょうか・・・と。できる限り多くの方々に訪ねてほしいと思うからです。



出水市特攻慰霊碑慰霊祭に参列された安田郁子様（宮崎特攻語り部）と福田文治様から次の和歌を添えたお便りを頂戴しました（及川昌彦）。

安田 郁子

○学徒兵自由と平和願いつつ  
ゆかねばならぬ特攻志願

福田 文治

○若人らが生命捧けて飛び立ちし  
知覧詣でて我が戦後終わる

○ガラス越し喰い入ることく  
遺書を読む

若者に託す日本の未来  
黙押し無線の途切れを再現し  
黙祷始む出水の慰霊



慰霊祭式典後  
前列右から2番目安田郁子様

## 大空の女神の鎮魂式

副理事長 藤田 幸生

人には、その人生において、忘れられない出逢いがあります。私にとってのそれは、「藤田多美子女史」との、出逢いであり、時を超えて大きな意味を持つものでした。

平成25年4月13日土曜日の午後、土浦市の「ホテルマロウド筑波」において、ある鎮魂式が行われました。私は、家内と共にこの式に参列しました。この鎮魂式は、昭和15年11月、開校間もない水戸陸軍通信学校の井戸に身を投じた藤田多美子女史のためのものでした。彼女は、22歳の若い女性で、相次ぐ航空事故を防ぎたいとの一心から、自ら人柱となったのです。

彼女のことに、もう少し詳しく述べておきたいと思えます。

当時は、日中戦争が盛んなときで、大東亜戦争も間近に迫る緊迫した時勢であり、軍は陸海軍とも厳しい飛行訓練に明け暮れていました。このため、毎日のように悲惨な航空機事故が起きており、彼女はそれらを直接見聞きする機会も多かったのです。それらを何とか防ぎたいとの思いからの入水で

あったのです。残された数通の遺書には、そのひたむきな想いが綴られております。

その中の、学校宛の遺書には、「大君の御盾となれる益荒男の」

空の勇士にこの身捧げん」

という句が添えられ、航空事故防止の願い、陸海軍の空軍の発展、活躍を期待する強い想いが、切々と述べられております。そして、最後の願いとして、その身をどこでも良いので、飛行場の見えるところに埋めてほしい。朝夕、日本空軍の勇ましい活躍ぶりを見守りつつ、益々栄えまさんことを祈りおります、との意味の言葉がありました。時節柄、このことは、広く国民に知られることとなり、皇族の方からも、ご親族にお声が掛けられました。そして、学校の敷地内に、彼女の胸像と歌碑が建てられたのです。

しかしながら終戦後、そのご廟は破壊されました。ご遺族はその後、何とか胸像を探し当て、これを保管しておられました。「せめて遺品を、飛行場の見える場所に置いてやりたい」と願っておられたそうです。これを知った当時を知る関係者が、近年、力を合わせて有志の会を創り、再建に取り掛かったのです。その中でも特筆すべきことは、当時、陸軍航空通信学校に

学んでいた元大韓民国空軍大佐崔三然氏の日本人に対する働き掛け、ご尽力でした。

このようにして、この度、霞ヶ浦の地に、約70年の歳月を経て、胸像と歌碑が再建されたのであります。その除幕、鎮魂式でした。

私が、この藤田多美子女史のことを知ったのは、若い20歳過ぎのことです。その頃私は、飛行学生でした。何か新聞の記事であったように思います。昭和42年の春でした。私は航空自衛隊防府北基地のT34メンターの課程で、日々首になるかならないかという瀬戸際の厳しい訓練を受けていました。結婚したばかりで、精神的にもきつく、背水の陣で過ごしていたのです。

そのとき、たまたま手にしたその記事には、戦前、航空事故絶無を願って人柱になった女性がいること、水戸の女性で名前が「藤田」、入水した日が「11月28日」であることが書いてありました。私は、「藤田」という名前は、自分と同じ名字であり、しかも、入水された11月28日は、私の誕生日ではないか、私は、彼女の生まれ変わりかも知れない」との想いが、瞬時に頭に浮かんだことを覚えております。鮮烈な印象でした。

その記事を繰り返し読んでいるうち

に、この想いは確信に変わりました。飛行機乗りは、迷信深いのです。「自分分は、飛行機事故の絶無を願って人柱になった人の生まれ変わりである。だから、絶対、学生罷免にならないし、事故にも遭わない」と、そのように自分に言い聞かせたのでした。

事実、以後35年間、海上自衛隊ヘリコプターの操縦士となり、無事に任務を全うすることができました。この間、悪天候の下、暗い洋上での発着艦も体験し、また3度程、緊急事態にも遭遇しましたが、無事に切り抜けることができたのです。

今振り返ってみて、更にもっと大切なことだったと思えることがあります。それは、「自分が、この人の生まれ変わりなら、自分もこの人のように、自分の命を他の人のために使うべきなのだ」との気持ち、無意識のうちに心の中に芽生えたことではないかと思えます。

私が、時間空間を超えて、この「藤田多美子女史」に出逢えたことは、我が人生にとってこれほどの幸運はなかったと思います。更に、今回お会いした実妹の増田芳江様のお人柄に接し、その方の御著『山桜の花影に』を読ませて頂いての感激を通じ、更に、更にその気持ちを強くした次第です。

90歳を過ぎて、歌を吟じ、お礼の辞をしっかりと述べられたお姿に、亡き姉「多美子女史」の面影を偲ぶことができました。

家内と二人で鎮魂式に参列することができて、何かしら人生の一つの区切りが付いたような気がしました。このような機会を与えて頂いた日本郷友連、隊友会始め関係者の皆様、きっかけを作ってくださいました村田春樹氏に心から感謝申し上げる次第であります。

## 出水市特攻慰霊碑慰霊祭に参列して

自衛隊鹿児島地方協力本部長  
1等海佐 内野 誠

自衛隊鹿児島地方協力本部長の内野でございます。

昨年3月の着任から1年、豊かな自然に溢れる鹿児島において、これまで地域の皆様の温かな人柄に支えられ、勤務して参りましたが、ここ鹿児島は、先の大戦における本土防衛の最南の地でもあり、多くの特攻基地が作られ、熾烈な戦いの歴史を有する地でもあります。このため、鹿児島においては、別表の「鹿児島における慰霊祭等」に示しますとおり、年間を通じ30以上の慰霊祭が行われており、また、これら慰霊祭においては、県内に所在する陸(国分駐屯地、川内駐屯地)、海(第1航空群)の自衛隊により、音楽演奏、儀仗並びに慰霊飛行などの支援も行っております。

私自身も、このような歴史を有する鹿児島での勤務において、より多くの慰霊祭に参加するよう努めており、先日の4月16日(火)にも出水市で行われました出水市特攻慰霊碑慰霊祭に参列する機会を得ましたので、その時の様子を紹介させていただきます。

本慰霊祭が行われる出水市は、鹿児島県の北西部に位置し、人口5万6千人、熊本県との県境にあり、その昔は薩摩と肥後の国境として設けられた野間之関所や一国一城制度における薩摩藩の外城制度によって数多くの薩摩藩士が郷士として住んでいた出水籠武家屋敷群など数々の史跡が今もなおその形を残しております。また、世界一の鶴の飛来地としても知られており、毎年10月から3月の間は1万羽を超える鶴が越冬のため飛来します。更には、農・水産物にも恵まれ、数多くの特産品もあります。

このような豊かな自然溢れる出水市が先の大戦末期には特攻基地(出水海軍航空基地)が開隊され、銀河隊等による特攻出撃が繰り返され、昭和20年4月までの間に、その多くの勇士が散華されました。

出水市特攻慰霊碑慰霊祭は、出水市特攻慰霊碑顕彰会が主催し、昭和35年以降、毎年この時期に行われ、今年で第54回を迎えることとなります。

前日(15日)の夕刻には、渋谷出水市長、特攻隊戦没者慰霊顕彰会副理事長の藤田様を始め、全国から駆け付けられた御遺族並びに各協力団体の方々の参加の下、前夜祭として慰霊祭交流会が行われ、参加者総員で「我が戦友

よ」、「同期の桜」を合唱するなど、終始和やかな雰囲気の中で行われました。

当日(16日)の出水市特攻慰霊碑公園は、早咲きの桜がかすかに残り、温かな陽射しの中、海自第1航空群P-3Cによる上空からの慰霊飛行に始まり、慰霊祭が厳粛かつ整齐と執り行われ、参加した私も国家存亡の国難に際し、自らの身命を賭して戦い、そして散っていった勇士達の心情に触れ、身の引き締まる思いがいたしました。

因みに、私は今年に入り、旧鹿屋基地特攻(鹿屋市)、海上特攻第二艦隊(枕崎市)、万世特攻(南さつま市)の慰霊祭(追悼式)に続き、出水市特攻慰霊碑慰霊祭は4カ所目の参列となります。どの慰霊祭におきましても、「国のため、民族のために尊い命を捧げられた戦没者の想い(意志)を決して忘れてはならない」また、「この歴史を正しく認識し、後世に引き継ぐ努力を怠らない」ことの証として、脈々と行われているものでありますが、終戦から60有余年が過ぎ、御遺族やご同期の方々の高齢化など、将来の慰霊祭の継続に対し、不安の影が年とともに大きくなっていくようにも感じられます。

御遺族の方々の中には、「私は、足

腰も弱り、来年の慰霊祭には参加できそうにありませんが、どうぞ、皆様来年も宜しくお願いたします。」といった言葉を残していく方も少なくありません。私は、このような場面に出会う度に、「我々世代は、お国のために尊い命を捧げた戦没者の想いをしっかりと受け止め、また、それをより若い世代に伝えていく努力がまだまだ足りないのではないかと感じてしまっています。

私は、これからも慰霊祭等に参列して参りますが、各慰霊祭においては戦没者に対する慰霊とともに、努めて御遺族の方々とも言葉を交わし、「我々が、しっかりと若い世代に引き継いで参りますので、ご安心ください」という気概が御遺族の方々に伝わるよう努めていきたいと考えています。また、皆様におかれましても各地域で行われております慰霊祭等に、是非足を運んで御参加頂き、戦没者の当時の想いに触れ、決して繰り返してはならない歴史の再認識を図るとともに、そのことれば幸いに存じます。

## 鹿兒島における慰霊祭等(25年度)

名 称	時 期	場 所	主催者等	自衛隊の支援【24年度実績】
旧鹿屋基地特攻戦没者追悼式	25. 4. 6(土)	小塚公園慰霊塔前(鹿屋市)	鹿屋市	(海自1空群):慰霊飛行、儀仗
戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭	25. 4. 7(日)	犬田布岬慰霊塔前(伊仙町)	伊仙町観光協会	24年度は日程等合わず。
海上特攻第二艦隊戦没者追悼式	25. 4. 7(日)	平和祈念展望台前(枕崎市)	*25年から自主参拝	(海自1空群):慰霊飛行、儀仗
万世特攻慰霊碑慰霊祭	25. 4.14(日)	万世特攻慰霊碑前(南さつま市)	万世特攻慰霊碑奉賛会	(陸自12普通):音楽演奏 (海自1空群):慰霊飛行
出水市特攻慰霊碑慰霊祭	25. 4.16(火)	出水市特攻慰霊碑公園前(出水市)	出水市特攻慰霊碑顕彰会	(陸自12普通):音楽演奏、儀仗 (海自1空群):慰霊飛行
国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭	25. 4.22(月)	特攻機発進の地(国分駐屯地)特攻慰霊碑前(霧島市)	国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会	(陸自12普通):音楽演奏、儀仗 (海自1空群):慰霊飛行
知覧特攻基地戦没者慰霊祭	25. 5. 3(金)	知覧特攻平和観音堂前(南九州市)	知覧特攻慰霊顕彰会	(陸自12普通):音楽演奏 (海自1空群):慰霊飛行
三島村特攻平和記念祭	25. 5.11(土)	黒島平和公園	三島村	*25年度は慰霊飛行予定(第10回記念)
瀬戸口藤吉翁を偲ぶ演奏会	25. 5.17(金)	垂水市文化会館(垂水市)	瀬戸口藤吉翁記念行進曲コンクール実行委員会	(海自佐世保音楽隊):音楽演奏 (海自1空群):表敬飛行、儀仗
東郷平八郎記念式典	25. 5.19(日)	東郷墓地(鹿兒島市)	東郷平八郎記念日式典実行委員会	(海自佐世保音楽隊):音楽演奏 (海自1空群):慰霊飛行、儀仗
指宿海軍航空基地哀悼の碑慰霊追悼式	25. 5.27(火)	旧指宿海軍航空基地哀悼の碑前(指宿市)	哀悼の碑顕彰会	(海自1空群):慰霊飛行
鹿兒島県沖縄戦没者慰霊祭	25. 6.23(日)	鹿兒島県護国神社(鹿兒島市)	鹿兒島県沖縄戦没者慰霊会	(陸自12普通):音楽演奏
霧島市戦没者追悼式	25. 8. 1(木)	霧島市隼人農村環境改善センター(霧島市)	霧島市	(陸自12普通):音楽演奏
鹿兒島県太平洋戦争戦没者無名戦士追悼式		城山公園(鹿兒島市)	鹿兒島県	
伊佐市戦没者追悼式(旧大口市戦没者追悼式)	25. 8.15(木)	伊佐市文化会館(伊佐市)	伊佐市	
第2次世界大戦戦亡者慰霊祭		探勝園慰霊碑前(鹿兒島市)	鹿兒島市	
大東亜戦争戦没者慰霊祭		鹿兒島県護国神社(鹿兒島市)	鹿兒島県護国神社	
くれないの塔慰霊祭	25.9.(未定)	くれないの塔(奄美市)	奄美大島青年会議所隊友会	(海自1空群):慰霊飛行
旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式	25.10.12(土)	串良平和公園慰霊塔前(鹿屋市)	鹿屋市	(海自1空群):慰霊飛行、儀仗
薩摩川内市戦没者追悼式	25.10.23(水)	川内文化ホール(薩摩川内市)	薩摩川内市	
曾於市戦没者追悼式		末吉総合センター(曾於市)	曾於市	(陸自12普通):音楽演奏
南大隅町戦没者追悼式	25.10.29(火)	南大隅町体育館(南大隅町)	南大隅町	(陸自12普通):音楽演奏
鹿屋航空基地追悼式		鹿屋航空基地(鹿屋市)	第1航空群	
鹿兒島県戦没者追悼式	25.10.30(水)	鹿兒島県総合体育センター(鹿兒島市)	鹿兒島市	(陸自12普通):音楽演奏
志布志市戦没者追悼式	25.11.中旬	志布志市文化会館(志布志市)	志布志市	(陸自12普通):音楽演奏
芙蓉部隊戦没者追悼式	25.11.中旬	八合芙蓉の塔(大隅町)	芙蓉の塔保存会	
国分駐屯地殉職隊員慰霊祭	25.12.7(土)	国分駐屯地(霧島市)	国分駐屯地	
自衛隊ヘリコプター殉職者慰霊祭	25.3.下旬	自衛隊殉職者慰霊碑(徳之島町)	徳之島町	(陸自8師団):音楽演奏 (海自1空群):慰霊飛行
比島戦没者慰霊行事		開花瀬望比公園慰霊碑前(指宿市)	比島慰霊祭事務局	(陸自12普通):音楽演奏、儀仗 (海自1空群):慰霊飛行
鹿兒島戦没者墓地慰霊祭		永吉公園(鹿兒島市)	鹿兒島戦没者墓地顕揚会	(陸自12普通):音楽演奏
吾平町戦没者慰霊祭		輪戸神社護国殿前(鹿屋市)	鹿屋市吾平町	(海自1空群):儀仗

## 平成25年度・第2回「あ、特攻」勇士之像慰霊祭(京都霊山護國神社)に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

平成25年4月29日(昭和の日)、関西白鷗遺族会(会長山田正克氏)主催の「第2回『あ、特攻』勇士之像慰霊祭」が京都霊山護國神社において執り行われた。本慰霊祭に当顕彰会代表として参列しましたので報告致します。

### 一 慰霊祭の概要

京都霊山護國神社の特攻勇士之像は、平成24年4月28日に全国で11体目の像として建立された新しい特攻勇士之像である。今年は春季例大祭の翌日の4月29日に碑前祭の形で執り行われた。

建立慰霊祭後最初の慰霊祭の主催は、昨年の建立事業に協力された関西白鷗遺族会で、特に会長の山田正克氏はまだ45歳とお若く、司会進行等一切を取り仕切っておられた。参列者は、特攻隊員の御遺族を始め、旧海軍航空隊員、関西白鷗遺族会の御遺族、来賓の方々であり、総勢43名であったが、特に遺族の御家族は子供連れで参列され、若い人たちが目に付いたのは、他

では余り見られないことであった。

神事は、国歌斉唱に始まり、修祓、齋主(宮司)祝詞奏上、齋主玉串奉奠と続き、来賓、代表者、参列者の順に玉串奉奠が行われ、来賓では、当顕彰会代表の衣笠を先頭に、特攻像碑文を捧げた植田喜裕氏、京都霊山護國神社総代奥村由三氏、京都市会議員高橋泰一郎氏他であった。

次いで木村宮司が「・・・この『あ、特攻勇士之像』は平成の時代になつてから、非常に珍しい形で建立され、こうして第2回目の慰霊祭が開かれたという事は、今後3回目、4回目が皆様方からのお気持ち頂戴しながら開催されることと思われる。若くして大空に散つて逝かれた方々に慰霊鎮魂の真を捧げて参りたいと思う。また、8月15日の終戦記念日には、靖國神社を始め、全国には52の護國神社があるので、お近くの護國神社に参拝されて、国のため命を捧げ、戦火に斃られた方々に追悼の真を捧げて頂くようお願い申し上げます」と挨拶をされた。

次いで、主催の関西白鷗遺族会会長山田正克氏から後掲のような主催者としての挨拶があり、また、顧問のボクシングK1級元世界チャンピオンで、「平成武士道の会」を主宰する佐竹雅昭氏の挨拶があった。佐竹氏は「今日

は、今の日本というものを考え直さなければならぬと思ひやつて来た。今の日本は戦争というものに興味を示さないし、経験もない。戦争を考えないし、考えようともしない。それどころ

か戦争を忘れよう、自分の命を捨ててまでこの国を守ろうとした事実を、忘れようと思ひしていることに腹立たしささえ感じる。・・・大東亜戦争で散つて逝つた多くの英霊達は今の日本を見て、残念がついていると思う。知覧で特攻隊員達の多くの手紙を見た。中には『本当は死にたくないが、自分が行くことによって家族を守れることを信じて、自分のこの命を捧げます』という手紙を見る度に、私自身暢気に暮らしていいののかと思う。平和になつた日本、今後更に試練が待ち受けている現在の日本において、我々は、特攻隊員のように命を捨てるのではなく、どうすればもっと素晴らしい人生を迎えられるかを考えることが、英霊に対する恩返しになると思う。今、平成の時代に生きている我々が、責任をもって更に次の世代にバトンタッチして行かなければならない。多くの英霊に感謝し、安らかに眠り頂きたいと思つている」と述べられた。

次いで、参列者全員による記念撮影の後、斎館に場を移し、来賓の挨拶が

行われた。この中で当顕彰会の代表として最初に請われたので、以下の要旨の挨拶を申し上げた。

「先程、昨年4月に建立され、全国で11体目となる特攻勇士之像の2回目の慰霊祭が厳粛かつ整齐と執り行われ、慰霊顕彰の継承として大事な第一歩が着実にスタートしたことに對し顕彰会を代表して敬意と感謝を申し上げます。この特攻勇士之像の奉納は、顕彰会の重要な事業の一つであつて、昨年は12月に福岡護國神社に新たに建立され、全国で合計12体となつた。我々の目標は、全国の全護國神社への奉納であつて、先は遠いが、護國神社と地元の皆様のご協力を得て、牛歩の歩みではあつても、目標を達成できるように、努力したい。(像建立の目的と特攻隊の定義について説明)。また、建立も大変な事業であるが、慰霊祭の継続には更なる困難が待ち受けており、主催者は苦勞されるのではないかと危惧している。護國神社における特攻勇士之像のみの慰霊祭は行われな傾向にあるようであるが、地元根付いたしっかりとした慰霊団体がなければ慰霊顕彰の本当の継続は難しいと思う。そういう組織があれば慰霊顕彰の心は引き継がれて行くと思う。その点、京都では、関西白鷗遺族会会長の山田様



からご連絡のとおり、同遺族会が主催して今後毎年4月29日の昭和の日に慰霊祭を斎行して頂けるのとことで、大変有り難いことと感謝している。現在、国民の先の大戦に対する意識の希薄化や旧軍関係者の高齢化と世代交代等の問題が顕在する中で、身を捨てて国を護ろうとした英霊の慰霊とその精神の継承は、今を生きている我々国民の使命であると思つて活動している次第です。この京都霊山護國神社の特攻勇士之像慰霊祭が、関西白鷗遺族会の皆様により永久に継続され、特攻隊員と共に全戦没者の国を護る心、日本人の心



が継承されることを祈念申し上げ、慰霊祭の御礼と挨拶にさせて頂きます」その後各来賓の挨拶があつて解散となった。

**二 所見**

現在の慰霊団体を見ると、活発な活動をしている会は、その中核に必ず超人的な活躍で会の面倒を見ているキーパーソンがいる。中には生命財産をも掛けてと思われる程尽力され、その組織を支えていることが珍しくない。私は何がそこまで彼等をして貢献せしめ



るのか、いつも疑問と興味を持つている。

今回の京都霊山護國神社の特攻勇士之像慰霊祭を主催している関西白鷗遺族会会長の山田正克氏も今後の慰霊顕彰活動の中心人物の一人と目されている方である。山田氏は45歳、お若い慰霊顕彰活動に極めて積極的である。その背景や動機は何なのか気になっていたが、次の挨拶でよく理解できた。「・・・白鷗遺族会も後継者がなくなり、解散・崩壊等で関西にしが残っていないが、たとえ一つの団体になろうとも、国を護ろうとして亡くなられ



た方の慰霊顕彰を我々40、50歳代から20歳代の若手に語り継がなければならぬと思つている。・(その背景に)：妻方の伯父(西口徳次命)が海軍飛行予備学生第13期で、特攻隊員として沖縄洋上で散華された(筆者注：関西大出身、第13期飛行予備学生・海軍中尉、菊水三号作戦・第九建武隊、昭和20年4月29日、沖縄島北端120度60度)に戦死)。母親の悲しむ姿等を婚約当初から見ていたが、最初は婚約者としての「義理」での関係であった。関西白鷗遺族会の会長になってから始めて、私の父方の伯父も海軍飛行予備



学生第13期生であることを知り、同期

生の甥と姪が結婚したという奇縁を感じた。・・・また、国のため家族のた

め身を挺して国を護った精神を持ち続

けて来られた生き残りの方々が、戦後

三、四十歳代で我が国の経済復興に大

きく貢献されたが、その方々の定年の

5年後にバブルが崩壊した。その原因

は、経済的要因だけではなく、内なる

精神を失って行ったがために崩壊して

行ったのではないかと思う。経済にお

いても気構え、心の問題が大事ではな

いかと思っっている。若い人達に、その

## 第46回戦艦「大和」を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成25年4月6日(土)、前日から徳之島に到着し、特攻平和慰霊碑に参拝した。翌日の午前中は、第46代横綱朝潮太郎記念像や闘牛場を見学し、午後からの大和慰霊祭に臨んだ。

この慰霊祭は、徳之島の伊仙町主催で実施されている。今年は生憎の強風と荒天で、慰霊塔前での式典を取り止め、近くの御崎神社鳥居前に会場を移して執り行われた。

午後1時半から地元・犬田布岬婦人

心を伝承して行きたい。

妻方の伯父が鹿屋を出撃後本部に打

電した電文は「二十年四月二十九日鹿

屋・沖繩北端一二〇度、

一四・四二鹿屋発進、一六・三三光

三つあり、一七・二三敵艦隊見ゆ、

一七・三四我敵艦に必中突入中」が残っ

ている。この三〇秒後には伯父は亡く

なっている筈であるが、最後の最後まで

で正気で報告義務を果たしている。こ

の究極の心構え・精神があれば何でも

できる。特攻を正気の沙汰とか言われ

るが、狂気でこのような報告ができる

会の「あ、犬田布岬」の奉納舞で開式

した。「第二艦隊沖繩特攻攻撃の歌・

第二艦隊特攻の歌」が流れる中、約

130名が参列し、第二艦隊旗艦大和

の沈没時刻(午後2時23分)に合わせて

全員黙祷を捧げた。

遺族代表挨拶は、顕彰会から、高山

友二・千葉少飛会会長が「多くの尊い

命を失って得た現在の日本の平和に感

謝し、修復された慰霊塔を戦争のない

世界平和を熱望するシンボルとした

い」と述べられた。大久保明伊仙町長

は慰霊の言葉で、「自らを犠牲にして

か。彼等は正気の正気でやっていたこ

とを知るべきである。この生き様・精

神を次の世代に伝えていくべく自分も

これに類することをやりたいと思

う。・・・」

戦争も知らない若者達にいきなり特

攻、慰霊顕彰と言ったところで面食ら

うだけであろう。山田氏が慰霊顕彰活

動に積極的なのは、身内に特攻隊員が

おり、死を掛けて任務を完遂したとい

う衝撃の事実を知ったことが大きな要

因であると思われる。我々が我々の後

継者を育てる場合、如何なる方法で彼

悪天候下の慰霊祭であったが、天城

中学校吹奏楽部員による「宇宙戦艦ヤ

マト」の慰霊演奏で閉会となった。

翌日は晴天となったので、前日に断

念した慰霊塔を再訪し、碑銘板に刻ま

れた亡き戦友達の名前を探して面影を

思んだ。紺碧の空と穏やかな海面から

は68年前に激戦があったとは思えない

情景であった。徳之島には地域毎に、

日清・日露の戦争以降、各戦没者の慰

霊碑が整然と整備されていて、島民の

英霊に対する厚い想いを痛感した。町

として今後もこの慰霊祭を継続して行

等を納得させ、理解させて慰霊顕彰活

動に足を踏み入れてもらうかは、重要

な問題であり、脳漿を絞って考える必

要がある。方法の王道はないであろう

が、方法の如何に拘わらず、若者の琴

線に触れることが必須の要件であるこ

とは間違いない。私はここ雲山護國神

社には何回も足を運んでいるが、来る

度に何か感ずるものがあるのは、この

社が霊多く霊験あらたかなる所だから

であるからと思っっている。でき得れば

此処で英霊の御霊から顕彰活動につい

ての示唆を頂きたいと思っっている。

## 第二艦隊特攻戦没者慰霊靖國神社共同参拝に参列して

評議員 及川 昌彦

平成25年4月14日(日)、靖國神社において、第二艦隊特攻戦没者慰霊会共同参拝が執り行われた。昇殿参拝後、グランドヒル市ヶ谷に移動して懇親会が開催され、散華されたお身内や戦友の方々を一緒にお偲びした。

大和ガントリーム会の都竹卓郎氏(海兵72期)を中心に、御遺族、大和生存者、矢野・朝霧・雪風・磯風生存者がそれぞれ近況報告や当時の体験談等を語り合う同窓会的な集まりであった。

# 第47回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

平成25年5月12日(日)、長崎県東彼杵郡川棚町の「特攻殉国の碑」前において、川棚町新谷郷(総代・廣川秀雄氏)主催により執り行われた「第47回特攻殉国の碑慰霊祭」に、当顕彰会を代表して参列しましたので、以下に報告いたします。

## 一 慰霊祭の概要

川棚町のこの地には、昭和19年4月海軍水上・水中特攻隊員の養成・訓練のため、海軍水雷学校の分校として、臨時魚雷艇訓練所が設置され、震洋隊を主体とする魚雷艇隊、回天隊、水中特攻隊等の特攻隊員達が猛訓練に励んだ、海軍の一大水上・水中訓練基地であった。約3500柱が祀られている慰霊碑は、昭和41年、元震洋隊長からの慰霊碑建設の発議以降、翌42年5月の除幕式と7月の碑保存会発足により、碑の管理態勢が確立され、以来今年で第47回目の慰霊祭を迎えた。今年から他の慰霊祭には見られない地元民間人の主催によるお祭りとなり、生存隊員、御遺族、陸海自衛隊幹部、新谷

郷住民等約200名が参列して盛大に実施された。

慰霊祭は、開会の辞、軍艦旗に敬礼、国歌斉唱、黙祷と続き、慰霊の辞では最初に、新谷郷総代の廣川氏が「...私たちは御英霊の御遺徳と御加護によつて今日の日本の平和と繁栄が得られたという事を忘れてはならない。改めて御英霊の尊い犠牲と御遺族の深い悲しみを越えてもたらされたものだという事を次の世代に伝えていかねばならない。...御英霊に今年も嬉しい報告がある。学童保育の皆さんが今年も千羽鶴を折り、飾って頂いた。長崎県立川棚高校二年一組の皆さんが平和学習で「特攻殉国の碑」を取り上げ、多くの若者が戦地に赴いた歴史を学び、クラス展示物として川棚魚雷訓練所の立体地図(資料館に展示)を作成してくれた。また、昨年から1年間に、海外・国内から764名が訪れ、記帳をして頂くなど、大変有り難いことと

思っている。...新谷郷民として御遺族・部隊の皆様と共に末永く特攻殉国の碑慰霊祭を執り行い、英霊顕彰をして行きたい。...」と述べられた。次いで当魚雷艇訓練所代表として第百二十四震洋隊の藤山氏が「...当訓練所に特攻要員として集まってきたのは、うら若き少年であった。空中要

員として激しい訓練に励み、豫科練課程を終了した次の課程への待機中、突然

総員集合が発令され、高官が、この国難を救うのは諸君の双肩に掛かっている。ここに特攻作戦を展開する。攻撃精神と犠牲的精神を十分に発揮し、熟慮して決意を表明するよう、訓示と要請を受けた。余りに突然、晴天の霹靂であった。操縦の道を閉ざされ、且つ特攻志願の選択を迫られ、心理的葛藤は如何ともし難いものがあつた。特攻は用兵の外道なりとの声がある中で、軍令部が採用に傾いたのは、戦争遂行に強い危機感を持った、窮余の策と思う。しかし戦局に鑑み、選択肢の無い状況と態勢の流れの中で、強い危機感を持った若い集団の理解と決断は早かつた。阿吽の呼吸でそれぞれ決意を提出した。そしてこの川棚の地に着任し、震洋特別攻撃隊員として訓練を開始、無線交信・気流手旗信号・接敵運動等々を一カ月で終了して征途に就いた。隻数五千隻、遠く小笠原・フィリピン・台湾・中国・沖縄・内地に布陣し、来襲に備えた。...」と当時の生々しい状況を述べられた。

次いで長崎県知事代理、川棚町長の慰霊の辞があつた。式次第どおり、慰霊電報・書簡が奉呈され、祭主、御遺族、生存者、来賓等参列者全員により

拝礼を行った。

次に、男性合唱団「オールドダックス」による献歌が行われた。「オールドダックス」は昭和61年に結成され、現在40名の団員を有する、長崎県内で少数ない男性合唱団で、主として県内で活動している。献歌は「震洋にのる」「鎮魂」の2曲であつたが、「鎮魂」は県内の作曲家小川 源氏がこの碑に衝撃を受けられて作曲、現指揮者井手俊彦氏が編曲した曲で、平成17年に初演された。見事な男性調和音に披露後万雷の拍手があつた。引き続き、「同期の桜」を全員で斉唱した。

最後に主催者である新谷郷総代廣川氏からお礼の言葉があつた。その中で「...私達は一集落、且つ民間人でありますが、この慰霊祭のため郷民は一生懸命やっています。行き届かないところは来年には必ず修正していきたい。...この慰霊祭でオールドダックス合唱団が震洋に関わる曲を2曲も披露して頂いた。また、1週間前には隊友会・老人クラブの約50名の方々や清掃を実施するなど沢山の方々のご支援を頂いて慰霊祭を実施することができました。...昨年予告した資料館も予定どおり開館することができた。今後逐次整備していきたいので、ご支援をお願いする。...今後も5月の第2

日曜日に慰霊祭を執り行うのでよろしくお願います」旨申し述べられた。

以上で新谷郷民によって主催し、実行された特攻殉国の碑慰霊祭は滞りなく終了した。終了後早速「特攻殉国の碑資料館」を拝見したが、開館直後でもあって、残念ながら資料は一部に止まって少なく、今後の整備を期待したいと思った。

## 二 所見

他の慰霊祭の参列者が逐次減少していく中で、この特攻殉国の碑慰霊祭は毎年200名を超える参列者を集めている。その理由の一つに、本慰霊祭の特色である地元住民との結び付きがある。

昭和19年4月に、臨時魚雷艇訓練所開設に当たり、土地取用等、最初から地元は協力的であった。土地の古老が「多くの民家が立ち退かされ、先祖からの墓まで移転させられたが、特に問題にならなかつた」という土地柄からか、海軍と民間の関係は良好であった模様である。

戦後、碑の建立に奔走され、平成24年に逝去された保存会の西村金造事務局長は、昭和54年に「・・・この碑の建立時、土地の買収に当たり、新谷郷地元住民の支援を受け、その後の碑の

お守り、慰霊祭は事毎に地元新谷郷の手厚い庇護の下に執り行われています。この殉国の碑をお祀りし、且つ支援している新谷郷の長老又は有志としては、この碑の面倒を見ることを部落の仕事・天命と考えておられます。・・・と述べておられる。このような良い関係になるには、海軍の民間への施策が長い年月を掛けて醸成されたものなのか、他の地域では余り見られないことだと思ふ。

戦後、慰霊祭を、その関係者のみで行っている団体は、当事者・関係者がいなくなると、必然的に消滅していくが、特攻殉国の碑慰霊祭のように、地元新谷郷と一体となって実施している所は、郷民がいる限り慰霊顕彰が継続されるので、慰霊祭の在り方としては理想的である。

昨年、慰霊碑の保存、慰霊祭の執行一切を取り仕切つて来られた保存会の西村事務局長が逝去され、保存会が解散したと承り、慰霊祭は24年度を以て終了かと危惧したが、今年「新谷郷総代」名での案内状を受領し、今回、新谷郷総代の廣川氏から説明を承り、納得し、安堵した次第である。廣川氏は、「保存会は24年春解散したが、特攻殉国の碑保存会規約に『・・・この会は地元新谷郷と協力して碑の保存

とお祭りを行う・・・』とあり、その心を引き継いで、今後は我々新谷郷郷民が慰霊祭を執行していきたい」と述べられたが、真に有り難い言葉であった。

翻つて、我が顕彰会の状況はどうであらうか。春秋の慰霊祭・年次法要は別にしても、会員が参列・供花等を行う全国の特攻隊関係慰霊祭も、特攻殉国の碑慰霊祭のような永続性を持たせるための方策はないものだろうか。

広く国民に特攻隊の精神を伝承することはむろん大事であるが、現在続いている慰霊祭が地元根を生やせば、これほど効果的な伝承方法はないので、大変難しいことではあるが、関係者が消えていく前に、顕彰会の活動として考えても意味のあるものと思料する。



## 特攻司令官の終戦

### —菅原道大陸軍中將—

陸士60期 市川俊次郎

#### ○四人の特攻司令官

陸海軍の航空特攻を指揮した最高司令官には、海軍と陸軍にそれぞれ二人の中將がいた。フィリピンでは海軍の

第一航空艦隊司令長官・大西瀧治郎中將と陸軍の第四航空軍司令官・富永恭次中將。沖繩戦では海軍は第五航空艦隊司令長官・宇垣纏中將、陸軍は第六航空軍司令官・菅原道大中將である。

そのうちの二人の海軍中將は終戦に際して、いずれも自裁して「責任」を取っている。「特攻の生みの親」と言われた大西中將は8月16日未明、「吾死を以て旧部下の英霊とその遺族に謝せんとす」と書き遺して、東京の軍令部次長官舎で割腹自決したし、いま一人の司令長官・宇垣中將は、8月15日の夕刻、「死んだ部下との約束だ、まだ停戦命令は受けておらん」と言っただけで特攻機11機に部下22名を従えて沖繩に向けて飛び立ち、「われ必中突入す」と打電して消息を絶った。

これに対して陸軍中將の二人は、共に戦後長く生き延びている。その一人富永中將はフィリピンで特攻作戦がま

だ続行されている最中に、独断で戦線を離脱して台湾に引き揚げ、敵前逃亡の疑いで軍法会議に掛けられながら不問に付された男である。東京に呼び戻された後、満洲の第百三十九師団長に出され、戦後ソ連から戦犯に問われてシベリアに長く抑留されて、昭和30年に帰国し、5年後に死亡した。享年68歳だった。

富永中將の敵前逃亡については大岡昇平の『レイテ戦記』など多くの戦記に書かれており、責任をうやむやなままで済ました、武人の風上にも置けぬと非難された將軍だが、筆者が知り得た記録では唯一、元第四航空軍參謀長の隈部正美少將が「司令官は心身耗弱の状態にあり、自分が無理やり台湾に移してもらった」と弁護しているだけである。因みに隈部少將は終戦後、母親、妻、二人の娘を道連れに多摩川畔で自決している。

いま一人の軍司令官・菅原道大陸軍中將は上坂次郎氏によって「戦後ながく生をむさぼって、亡霊のごとく老醜をさらした」(『特攻隊員の命の聲が聞こえる』PHIP研究所)と、口を極めて誹謗された將軍だが、彼の身の処し方については世情ほとんど取り上げられることはなかったように思う。

日本には「死に花を咲かせる」とい

う言葉があるように、死を美しいもの、晴れがましいものと見なす精神文化があった。それは「死に時」と「死に場所」を誤るなという武士道の訓えにもとづくもので、事が成就しないとき死によって償う姿形は、日本人の心琴に響く「美学」でもあった。

そうした伝統的価値観の中にあつて自ら命を絶った二人の海軍中將には、特攻作戦の責任を不問に付す傾向が強いのに対して、二人の陸軍中將は「恥知らず、卑怯者」といった謗りが後々まで絶えることはなかった(注1)。

(注1)額田担編『世紀の自決』(芙蓉書房)によれば、敗戦に際し自決した軍人・軍属(家族を含む)の数は568人にのぼる。その中で軍の高官(將官)は阿南惟幾陸軍大臣をはじめ十余人である。多くは軍の要職にあつて輔弼が至らなかつたと、天皇に対する責めを負つての自裁であつたが、中には大西中將のように部下の犠牲に対して詫び、あるいは部下下戦犯の一切の責任を負い甘んじて刑死した司令官もあつた。

#### ○菅原中將は自決せず

菅原中將は陸軍航空生え抜きの司令官で、最初は、一回限りの出撃で絶対死の特攻には消極的であつたと言われる。その彼が、航空總監に就任すると

(昭和19年7月)、敵機動部隊を撃破するには特攻以外にはないと決意するに至り、やがて第六航空軍司令官に就任すると(昭和19年12月)、特攻作戦の鬼と化するのである。

「この戦争にはもはや勝ち目はない、しかし少しでも有利な条件で終戦を迎えたい。その手立てを工夫するのが軍司令官の務めだ」と考え、「特攻」はそのための唯一最善の作戦だと割り切つていた節がある。

米軍の沖繩上陸が間近に迫つた昭和20年3月に司令部を東京から福岡に移し、菅原司令官は連日のように南九州の特攻基地に飛んで出撃する隊員を激励して回つた。彼は訓示で「司令官も必ず後に続く」と言つたはずである。日頃から各級指揮官に向かつて「最後は指揮官自ら特攻に出撃する時期と方法を選択しておけ」と言つており、彼自身も參謀に命じて司令官用の特攻機を準備させ、そのXデーは8月26日と設定していた。

しかし敗戦によつて特攻出撃を断念し、8月15日以降は自決の意志をたびたび日記に認めるようになる。しかしこれまた、あれこれと思わずらううちにその時期と場所を得ないまま、戦後38年間を生きて95歳の天寿を全うする。彼がなぜ死ななかつたのか、ある

いは死にぞびれたのか、敗戦前後の日記(注2)によってその心の軌跡をさぐってみたい。菅原道大中将の日記文は、雑誌『偕行』(平成8年3月号、6月号)に連載された「菅原將軍の日記」によった。「」内は同日記からの抜粋、数字はその日付けである。8月12日、御前会議でポツダム宣言受諾の聖断が下ったとの情報が舞い込んだが、その一方で陸軍大臣と参謀総長からは、「各軍ハ作戰任務ニ邁進セラレ度」との電報が届いた。菅原中將はその日の日記にこう書いている。

「嗚呼万事休す。最後の兵一機まで！真に世界の強國全体を相手にして散るも、國民として皇祖皇宗に対して十分申し訳立つることなり。」

たとえ無条件降伏になっても、ここまでやれば軍人として天皇陛下への責任は果たしたと割り切り、その後で、「既に作戰に死を期し、又全面降伏に際しての覚悟も予めきめ居たるも、余り突然に過早なる此の決を見、正に戸惑ひの姿なり。徐に意を決せんとす。特に軍司令官として完全に任務を終了してのこととすべし。恰も乃木將軍の明治大帝の御葬送の日なるが如く。」(8・12)と。

この文面で見ると既に特攻突入を断念し、軍司令官として戦後処理を

最優先させる心境になっている。だから8月15日に幕僚から將軍自身の特攻出撃を迫られた時も、「死ぬばかりが責任を果たすことにならないと唇をふるわせ」(神坂次郎、前掲書)るのである。その日(8月15日)の夕刻、阿南陸相の自刃と第五航空艦隊司令長官の宇垣中將が沖繩に突入したとの情報が入った。阿南陸相に対しては、「アアしてやられた」との念湧く。陸相はよくやって下さったとの感謝の念も湧く。然しまた、もう少し戦後処理の緒を就けざりしや、多少過早の譏なきやとの感も湧く。然し結局は早い方が勝ちなりなど、功利的な考えも生ず。」と率直だが、宇垣中將の沖繩突入についての感想は実に冷静で批判的である。「実に痛快なりと雖も聊か？との感あり」「予としては最も希望する死場所なるが、今更如何にも軍司令官としての処置上平静を失せりと云はざるべからず。かかかる状態にての司令官の決行。予は思ひ及ばざりし処なり。」(8・15)と書く。

その宇垣中將は出撃に当たって「彗星特攻機五機に至急準備を命じ、本職直率の下沖繩艦船に特攻突入を決す。未だ停戦命令にも接せず、多数殉国の將士の跡を追い特攻の精神に生きんとするに於いて考慮の余地な

し。」(『日記戦藻録、八月十五日』)と、覚悟のほどを書き遺している。宇垣司令長官に随行した特攻機は11機に増えるのだが、菅原中將はその行動について、作戰統行中の昨日までとは状況が変わったと、日記にこう認めている。「單に死を急ぐは決して男子の取るべき態度にあらず、任務完遂こそ、平戦時を問はず吾人の金科玉条たれ。いよいよ最後まで任務を完遂して悠々自決せばそれを以て、御奉公尽したりと云ひえんか。」(8・15)

宇垣の直情径行に対するこの菅原の身を引いた冷静さは、同じ最高責任者としてまさに対極にある。菅原司令官は玉音放送を聴くと途端に徹底抗戦の意思を捨て、8月16日に航空総軍司令官から「承詔必謹」の方針が伝えられると、「その趣旨は予が示達せる処と異ならず」と意を強くした。彼はすでに自決の時期を先送りして、いかに「有終の美」を飾るかを最優先する心境にあり、それが軍人として陛下の詔に忠実な態度だと割り切っていたのである。

菅原中將は一方で自決の時期を模索し、①九州を去る日、②軍司令官罷免の時(軍司令官復員の時)、③敵の捕手、身辺に来る直前、④軍内の統制つかず、曠職の責を自覚せる時、⑤精神的苦痛

に堪えず、進んで自決を選ぶ時、この場合を想定する。しかし「只憂ふ、此等の決心も種々の障害によつて真の遂行を妨げらるるに至ることを」と書き添えているように、余り緊迫感はない。それから軍上層部の自決の報が、次々ともたらされ、その都度感想を書いている。寺本航空本部長の死については、「達觀の士は死するは易々たるべけれど、凡人には決して易々たるものにあらず。」とつおいつ左右に浮動するは偽らざる昨今の心境なり。予の如き、既に遠く半歳以前より覚悟し、真の意を詩に託しあるに、尚ほ動揺あり、決して容易なるものにあらず。」(8・16)と悩みの程を記し、隈部正

美少將(前出)の死については、「各方面より夾叉され、氣の弱き者は居たまれなくなる。人各々の立場によりて異なる。後るれば人に先んぜらるるの感深し。」(8・18)と書く。

敗戦から五日後の20日頃には司令部内に逃亡や盗難事件が頻発するようになり、「軍内の統制つかず、曠職の責を自覚しての自決は、いささか不名誉といふべし」という心境になり、さらに十日近く過ぎると、「覚悟したる死期(の決定)が仲々六ヶ敷、かくては遂に死期を失ふに至らん。只死が是なるや否やに惑ひある為、葉隠の様

に単純に行かざるなり。」「結局、最後迄、そして最後に潔く」に落着けり。要は何時にても死ぬる準備の下、着々事務を進捗せしむるにあるか。」(8・29)

菅原中將は敗戦後、英傑の死生觀を探ろうとして、乃木希典や大石良雄、西郷南洲に関する書を求めて読むようになった。その中で西郷の「死を急がず、死を恐れず」の心境に共鳴して、「目下の心移りに照して興味深く思ふ。：即ち徒らに急がざりしを喜ぶ。」(9・4)と書く。

この辺りの文面からは自決を忌避する「言い訳」のようにも受け取れるのは、そもそも何の為の自決かはっきりしない中での「決意」だったからではあるまいか。しかし、9月半ばに米軍の福岡進駐が取り沙汰されるようになると、「自決」の二文字が再び頭をもたげ始める。問題はどの手段を選ぶか、である。「割腹は所謂武士道的にして、最も欲する処なるも、介錯なきに於ては更に頸部の切断を為さざるべからず。」(9・15)と、乃木將軍のように作法にのっとりた自決をする自信はなし、さりとして今となっては介錯人を頼むこともままならぬ。

新聞で東條大將や杉山元帥などの自決方法を読んでは、悩んだすえ拳銃を口にくわえてやるのが一番確実だと考

え、拳銃の試し撃ちをやったりした。○死神を振り払って

9月に入ると東條大將の自決未遂にはじまり、杉山元帥など先輩・同輩の自決のニュースが続々と報じられた。そうした報道を読んで菅原中將は「いよいよ圧迫を感じる」が、「杉山元帥の死、吉本大將などの死は果たして如何なる意義ありやと疑う」(9・15)といった風に、自決が一種の流行のようになっているのに反発する気分になる。彼が自決の意思を放棄するのはそれから間もなくである。

周囲から「自殺など無意味で自慰行為に過ぎません、それより軍司令官として部下の職業輔導に尽力して欲しい」と懇請され、中には空中勤務者を支那軍(蒋介石軍)に周旋してどうかといった提案まで現れるが、特攻戦没者の顕彰事業や「英霊」の回向、あるいは遺族の救恤に当たっていたきたい。それはほんらい国民こそやってやるべきことだが、敗戦国でそれがやれるのは閣下を措いてない、と言われると、「今後予が天職として為すべき仕事あらば喜んで生きながらえん。：陸軍特攻を一手に引き受けて、七百余名を沖繩に投入したる予として何事をか為さざるべからずと痛感しあり。：：茲に於てか、予として再考三考を要す。」(9・23)「斯考へを変え来れば、飽迄生き抜かざるべからざるを覚ゆ。」(9・25)といった心境に達した。こうした菅原道大元司令官は死にそびれたまま「自決」から遠ざかっていく。その時点で彼は武士道的美学を放棄し、「恥」を忍んで戦後を生きる道を選んだといえる。

地位あるところ責任と義務が伴うのは当然である。七百余名を死に追いやった結果責任を、この国の伝統的作法によって償うことをせず、慰霊と顕彰事業で果たそうとした菅原道大中將の責任は、自己完結したかという疑問は残る。乃木希典大將の例がある。彼が西南戦争での軍旗の喪失や、旅順攻撃における部下のおびただしい戦死など、現役時代のさまざまの負い目を帳消しにされて軍神と崇められたのは、明治天皇御大葬当日の殉死という一点によってであったことを想起したい。

昭和20年12月に菅原元中將は復員業務を了えると、特攻戦没者の遺族弔問の旅に出た。初めは元軍司令官の肩書きを頼っての旅行を考えたが、敗戦後の軍人に対する世間の風当たりは冷たく、国鉄の殺人的混雑と食料難の中の旅であった。しかし収入の当てのない一介の復員軍人としてはたちまち旅費が底をつき、「旅費などを要せぬ托鉢

的旅行を」とも考えたが、三県程巡ったところで中断を余儀なくされた。

彼は特攻戦没者の家庭を慰霊に訪れた時の感想を日記(21年3月12日)に書いている。それによると「生活の程度は一割に過ぎず」貧しい家が大半で、「よく志願せるに感服す」とか、「一人息子、養子等にて親に打ち明けずして赴けるもの。：ありしは予想を越えたり」と驚き、「予想したる恨み言など言ふものなかりしなり」と書いているが、果たして乃木大將が凱旋時の感懐を詠った、「愧ず我 何の顔あつてか父老に看えん」といった心境にあつたであらうか。

#### ○母の嘆き尽きることなく

##### (特攻隊員の母の手記から)

昭和39年5月、知覧で催された特攻隊戦没者慰霊祭に出席した菅原道大(元第六航空軍司令官)は、祭壇に献歌されたあつた短歌の前で足を止めた。それは愛児多田良政行陸軍少尉、戦死後大尉)を特攻で亡くした、母ときのが詠んだ歌で、菅原中將は多田良少尉の最高司令官であつた。

着替えなきよみ路の旅の長ければ

飛行服のまま垢づきて居む

菅原道大は詠者の多田良ときのに便りをしたためた。その手紙の内容は知るよしもないが、折り返し、ときのか

ら長文の手記が送られてきた。手記(注1)はこんな書き出しであった。

「第五〇振隊隊山吹隊第二隊長陸軍少尉多田良政行、これが現身のあの子の最後の姿でした。昭和二十年五月二十日午後七時十分、『ワレットニュース』の無電を限りに、あの子は身につけた一匹さへ残さず、愛機も共沖繩中城湾の上空から戦艦に突入したのです。」

この手記は敗戦五年目に、ある婦人雑誌の記者の勧めで書いたもので、母親の「傷しみ」を綴ったものだったが、人目に触れることに気後れがして文箱にしまったままにしてあった。それを献歌が縁で元司令官から慰めの手紙を貰い、思い切ってその原稿を菅原元中將の許に送り届ける気になったらしい。「戦に敗れその裏面が明らかになつてみれば、生きながら神にまつり上げられ、讃辞をもって死に追いやられた幾多の特攻隊員の若い生命は何のためか捨てたのか?戦の真の意義などわからう筈もなく、一部の指揮者達のおどらされ種々の美名のもとに、純真に一途に死に向かったあの子達に何の罪があるのでしょうか。・・・軍人としての道を我を捨て忠実に守った多くの軍人の死はどうなるのでしょうか。(中略)宝にも玉にもかえがたくいづくしみ育てた愛し子を・・・涙一滴も見

せないで死の道へ送り出した父の母のやりどころのない今の心をどこへもつて行つたらよいのでしょうか。・・・その血みどろな心の痛手こそ、戦争への抗議でなくてなんでしょう。」

そこには、息子に特攻出撃を命じた司令官への恨みと、愛児の死の意味を問う言葉が連ねられている。この手記が書かれた昭和25年といえは、日本の戦争責任を問う世論が高まる中で、「特攻くずれ」といった言葉が流行り、特攻戦死者を無意味な無鉄砲な行為だとと非難する風潮がひろまり、その家庭にまで冷ややかな視線が向けられていた時代である。(注2)

戦没学徒の反戦の手記『きけわだつみのこえ』が出版されたのは、そうした環境下の昭和24年10月であった。同書が、ときの目にふれたかどうかかわからないが、もし目を通していけば、そこに述べられている強烈な反戦思想に、同じ学徒兵の息子を持った母親として強いショックを受けたに違いない。その序文には、勇壮で深い言葉を遺した学徒兵の手記は、「酷薄な条件」のもとで「追いつめられ、狂乱せしめられた若い魂の叫び声にほかならぬと考へ、社会にマイナスの影響を与え、社会を考慮して、すべて不採用にした」という意味のことが書いてある。そ

んな、戦死者に対する世間の目が冷淡になってきている今でも、母親は「あの子の心根を替えてあげたい」と思う。「犬死になつて・・・」と人は言つてくれるけれど、決して私はあの子の死を犬死だとは思いたくありません。「皇国を守る者は自分達である」と、かたく信じて・・・征つたものを、母の

私がなぜ涙を見せられましよう。(中略)あの子の死がこんなにも惨めな結果になつた今でも、あの子はあれでよかったのだ。信じた道を信じるままに進んだのだから、あれでいいのだ。あれから五年、思つても見なかつた種々の世相を見て来た今でもそうです。」

たとえ戦争目的が間違ひだつたとしても、また世間から何と批判されようと、息子は国難に殉じる一念から若者らしく、純真無垢なままに逝つたことを信ずる母親の気持ちは変わらない。母親にとって息子の死はあくまで「散華」であつて、小田実氏の言うような「難死」(注3)などでは断じてないのである。

この手記が菅原元中將の目に触れたのは、それから14年後のことだが、元司令官はこれをどんな思いで読んだらうか。そしてどんな返書をしたためただろうか。特攻隊生き残りの作家から、「至純の若者たちを石つぶての如く修羅に投げこみ・・・(自らは)戦後な

がく生をむさぼつて」(神坂次郎「特攻隊員の命の声が聞こえる」)と書かれた司令官である。その人が余生を特攻戦没者の慰霊に尽くしたことは知る人ぞ知るだが、そのことによつて子を失つた母の嘆きが薄れることはないし、司令官としての責任が消えることもない。

(注1)菅原元中將は多田良とときのの手記を文箱に遺したまま昭和58年に亡くなった。この「手記」が公になつたのは、元中將の没後十数年たつて、元中將の息子・道熙氏によつて(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の機関誌「特攻」に発表されたからである。道熙氏はこの手記を公表するに

当たり、ときの住所のあつた広島県三原市役所に消息を問い合わせたが、回答は得られなかつたという。(注2)昭和25年はこの国の再軍備への回帰が不気味に蠢動を始めた年でもあつた。元日にマッカーサー元帥は日本国憲法は自衛権を否定しないと声明、6月に朝鮮戦争が勃発して、その2カ月後の8月には警察予備隊が発足するという、戦後史の変節点となつた年でもあつた。

(注3)小田実「難死の思想」(岩波同時代ライブラリー、1991年)

○菅原元中將の戦後



菅原中將は復員して程なく埼玉県飯能の在(下加治)に少しの農地と楡皮葺きのアバラ屋を手に入れ、農耕と山羊、鶏を飼って自給生活に入った。「聴松庵」と名付けたそこでの暮らしは、「むしろを吊って雨戸の代用にし、畳は敷かず板の間に寝起きし、雨の日は屋内で傘をさしカッパを着て端座していた」と伝えられているが、三男の菅原道熙氏の話によれば「もともと雨戸はなく、むしろを吊ってはいなかったと思います。窓は目の細い金網に何かを塗ってガラスの代用にし、ビニールがしまわるようになってからはそれを張ったと記憶しています。」また「小生が素人大工で屋根の補修をしましたので、雨漏りはそう度々ひどい状態になったことはありませんでした」と、ということだった。いずれにもせよ窮状は目に見えるようで、近くに住む次男の深堀道義氏が後に、自宅の敷地に父親のために離れを建てたが、元將軍は決して陋屋から移ろうとはしなかった、という。そんな老將軍の生き様を那須野の原で自活生活を送った乃木大將になぞらえる向きもあったが、現実の世間の風当たりは毀譽褒貶さまざまだったようである。

元中將は昭和24年頃から特攻戦没者慰霊のための観音像の建立を志し、浄

財を募って昭和30年には知覧に特攻平和観音堂を建立し、毎年5月に知覧で催される慰霊祭には欠かさず出席するなど、最晩年まで特攻戦没者の慰霊に力を尽くした。また知覧や万世、鹿屋などの元特攻基地に特攻の実態を後世に伝える施設が生まれる契機を作った意義を評価する向きも少なくない。

92歳で妻を亡くしてからは急速に老人性痴呆が進み、時々「刀を持ってこい。今から腹を切る」と言ったり、「拳銃をどこに隠した」と言ったりして、身の回りの世話をする者を困らせたというのだが、そんな状態に陥りながらも、慰霊行事などに出席したときは、家族が驚くほどしっかりした挨拶をしたらしい。(深堀道義氏)

90歳を過ぎて元中將は家族の勧めで『卒寿来』という回想録(小冊子)を書いた。そこには生い立ちから陸軍航空での輝かしい経歴が書かれているが、こと特攻隊に関しては、「予の遭遇した大東亜戦争は、著しい明暗があった。即ち緒戦の赫々たる戦果と、終戦直前の悲痛極まりなき特攻の指揮とである。」と、ただそれだけである。菅原道大は昭和58年12月、飯能市郊外のアバラ屋「聴松庵」で95歳の天寿を全うした。

## 特攻隊員の母の手記

菅原 道熙

「編注・本稿は平成8年4月発行の会報『特攻』第27号に掲載されたものであるが、前稿の関連記事として、参考のために再録した。」

菅原注・借行文庫に納める資料探しで、父道大の遺品を整理していて、多田良ときの様の父宛の手紙と手記が見付かりました。昭和39年9月4日の消印になっております。その年の5月、知覧の慰霊祭に出席した父が、多田良様の献句『着替なきよみ路の旅の長ければ 飛行服のままに垢づきて居む』を知って手紙を差し上げ、それを機に多田良様は7月に基地跡を訪ねられ、15年近く手許に温めておられた手記を父に読んで貰いたいと、手紙と一緒に送って来られたものであります。手記は多田良政行少尉以下9名の第50振武隊が出撃された状況を、現地から報道した主婦の友社の婦人記者が、戦後母堂に手記を書かないか、と話を打ちかけて来たので、筆を執ってはみたものの、とても人目に触れられる勇気は起こらず、そのままにされていたものであります。」

第50振武隊山吹隊第二隊長

陸軍少尉 多田良 政行  
これが現身のあの子の最後の姿でした。

昭和二十年五月二十日午後七時10分  
『ワレットニュース』

の無電を限りにあの子は身につけたものの一片さへ残さず、愛機もろ共沖繩中城湾の上空から戦艦に突入したのです。その事実を事実としてうべなう心の底から、まだどこかにあの子は居るよううで、一千里、二千里、地球の果てまでもたずね求めたならば、あの時のままの姿が見られるよううで、この五年間をあの子の死の実感がしつかりつかまれぬままに過ごしてきました。

戦に破れてその裏面が明らかになつてみれば、生きながら神にまつり上げられ賛辞をもって死に追いやられた幾多の特攻隊員の若い生命は何のために捨てたのか？

当時の日本の立場、支那事変から大東亜戦争と大きく拡がって行った戦の真の意義などわからう筈もなく、一部の指揮者達の手におどらされ種々の美名のもとに国民全体が完全に政治、外交に対しては盲にせられ、只々戦争一色に塗りつぶされたうちに純真に一途に死に向かったあの子達に何の罪があるのでしょうか。

戦争であろうと、平和であろうと、

例えばそれが正であろうと、邪であろうと、その時の国家の方針に従ってよき道を進んで行くことが国民の義務である以上、その国民としての義務を、我を捨てて忠実な軍人としての道を、我を捨てて忠実に守った多くの軍人の死は一体どうなるのでしょうか。

もしあの時一人でも戦争を厭う者がいたとしたら非国民としてどんな答を受けなければならなかったか。

その時々々の時代相とはいえ、室にも玉にもかえがたくいつくしみ育てた愛し子をほめたたえこそすれ、涙一滴も見せないで死の道へ送り出した父の、母のやりどころのない今の心をどこへもって行ったらよいでしょう。

然しその悲嘆の中から又思い直してみれば、その大きな犠牲こそこれから立ち上がる日本の平和への導きともなるであろうかと、こうして後に残った母のみじめな心にもる小さな灯としてせめて一人心に慰め言いきかせつつ生きています。

かけがえのない子を戦に失った多くの父と母、父を失った多くの遺児、夫を失った多くの妻、この戦を限りに悲惨な運命を背負わされた多くの家庭、その血みどろな心の痛手こそ戦争への抗議でなくて何でしょう。

「犬死になつて・・・」

と人は言ってくれるけれど、決してあの子の死を犬死だとは思いたくありません。

「皇国を守る者は自分達である。」

と固く信じてあんなにも当然のことにように若い生命も、胸一杯の希望も絶ちがたい肉親への愛情もすべての絆を振り切つて、あんなにもほがらかに征つたものを、母の私がなぜ涙を見せられましょう。あの子の心を心として「此の度の御奉公こそこの世に生まれて来た政行の使命であつたのだ」と、励ましたものです。

火にも水にも母はいましと共にあり心おこせず征けよ我が子よ

この時ぞ命捧げて死ねと言ひし

母の心の深きかなしみ

歌を書き添えた日々の頼りに私はあの子の覚悟をたたえこそすれ母心の悲しみは露ほども知らせたくなかつたのです。

あの子の死がこんなにも惨めな結果になつた今でも、

「あの子はあれでよかつたのだ。信じた道を信じるままに進んだのだからあれでいいのだ」

と、亡き子への悲しい愛情の中からも私一人の心の中であの子がえらんだ死を悼む気にはなれませんでした。あれから五年、思つても見なかつた種々の

世相を見て来た今でもそうです。

大いなる喜びが我に来たるとも

この悲しみの消ゆる時なし

現身にこれが最後と床二つ

並べて汝とい寝し思い出

小学校から中学校、更に専門学校と長い学生生活に終止符を打つと直に自分から進んで飛行学校への道を選び、特別操縦見習士官として家を出る頃にはすでにあの子には戦の重大さがよくわかつていて、自分自身が行くべき道もちゃんと覚悟が出来ていたのです。

おろかな母はそんなことには少しも気づかないで二十一のあの子と十九の次男と二人を軍人として同じ日に送り出すことに有頂天になっていました。

大君の御盾とならん男の子二人

もちて軍国の母となりたり

愈々家を出る前夜何気ない様子でいつも私に話しかける調子に「お母ちゃんは何の死をどう思う？」と聞きました。その言葉の中に何となく真剣さを感じて、私が平素から死というものに対して持っている信念をそのまま答えました。

「僕と全く同じ考えだ。これで安心して行かれる。お母ちゃんは大した哲学者だハハ・・・」と、大きく笑いましたが、「自分が死んでも母は決して取り乱して嘆くようなことはないか

ら、安心して征かれる」と後になってその時のことを戦友の一人に話したと聞いて生き返らぬ覚悟で家を出た深い決意を知りました。

残して行つた日記の一節に、

「祖国のある限り個人の死はない。生きる為に死んでゆく・・・。高き精神、崇高なる現実、我にこの意気あり、諦観にあらず、宗教に非ず、空虚なる議論の結果に非ず、しかめつ面な思索の結果に非ず、只斯の崇高なる精神により近づかんとする現実の精神なり」

死の高さまで自分を高める為にどれだけあの子は苦しみ悩んだことか、現実のすべての欲望から抜け切つた心境に至るまでのあの子の苦悩を思う時、私は涙なしではいられません。

もう出撃か、もう出撃か心もそぞろに整備基地への面会の旅を幾度繰り返したとか、その飛行場では特攻隊員だけが日々烈しい練習を続けていますが、目を覆いたくなるほどの空中での離れ業には、私は度々心に寒いものを感じながら見ていました。

そういう母の心に悲しい印象を残すまいとの心やりから、あの子は私がいづつのも明くるく朗らかに話したり、笑つたり、食べたりしていたあの子で

生き死にのおもいを越えて汝が語る

心がまえの尊かりけり

特攻隊と知って再びは生きてかえらぬことを心に深く言い聞かせ四人の育児日記の中からあの子のものを書き抜いて「もう一度母のふところをおもい出してくれ」と、誕生日毎に撮った写真を添え、いつ出撃ともわからぬせわしい中へ送り、やっとそれも終わりと

なった或夜、  
「明朝八時出撃基地へ出発となった」と、長距離電話で、  
「お母ちゃん、さよなら・・・さよなら・・・さよなら」

と、叫ぶように此の世で最後の声を送って来ました。  
これがあの子の声の聞きおさめかと受話器を碎いて声について行きたい程の思いでした。我が子の死の床に泣く世の母の悲しみに数倍まさる思いに胸つぶれて、それから死の知らせを耳にするまでの四日間を昼も夜もなく寝るも起きるも我が身に心もそわぬ思いで過ごし、今か今かとラジオにかじりついて身も心も細る思いでした。

遂に五日目の午後七時あの子達十二名の山吹隊が艦砲射撃中の米戦艦へ突入との簡単なニュースを聞きました。それまでどうにかこうにか張り切っていた気持ちも全身の血と共にスーッ

と引く心地で、

「アーアツ」と言ったままうつ伏せて暫くは身も世も忘れ、「政行は死んだ、政行は死んだ」と泣くことさえも忘れてつぶやくばかりでした。

最近の便りには、

「お母ちゃん、まだ生きています」と葉書に一行ばかり書いたり、  
「父の一周忌頃には・・・」  
と書いたりしていましたがその父の命日より二日早くあの子は遂に母のいる此の世から姿を消してしまいました。

大君に捧げし子ぞと思ひ決めし  
心裏ぎり涙湧きくる  
出撃の模様を一日も早く知らせたいとのあの子の心やりで特攻基地に居られたあの子の学友だった新聞記者の御尽力で、それから三日目の夕方には少しばかりの遺品と共に  
「出撃の直前お茶のお手前の真似事をした」

「のり巻をもつて飛行機にのった」  
「とても元気でほからかに征く」  
あの子がふだん外出して家に帰ると外での事をあれこれ話す癖があったがその通りに、つぶさに、しかし、きれぎれに記した手記が届けられました。

それから少しおくれで当時発行の月刊雑誌、主婦之友の特派婦人記者の「国を守る若き神々と共に」の記事によつて基地に於ける様子、出撃の模様、ことに第二隊長としてのあの子の態度、言葉等を委しく知ることが出来て悲しみの中にもいささか心慰められるおもいでした。

私への最後の便りが四、五日おくれで手に入りましたが、

「なつかしい母上様、なつかしい母上様」とくりかえし呼びかけて、  
「私は理解あるお母様をもつてほんとうに最後まで幸福であった。二十三年間のこの幸福を胸に抱いて思い残さず出撃します・・・」

北支派遣中父を亡くしましたので、残った私へ、母へ母へと最後まで切々の思いを運んでくれました。

整備基地へ残してあつたわずかばかりの遺品は心ある方の協力によって、死んで三日目には私の手に帰り、一週間目にはやはり民間のお方の御厚情によりまして原隊からの遺品全部が届きました。それ等の遺品はそれぞれ整理も行き届いておりいささかも心の乱れは何われませんでした。

満二ヶ年の軍隊生活中に私が送つてやつた新聞や雑誌の帯封を丁寧に抜き取つてまとめ、紙袋に納めていました。が、「母の筆跡だから破り捨てられな」と親友に語つたと聞かされて幼い頃から思いやり深い優しい子であった

と思ひ出に泣くばかりです。  
小さい時から大の故郷自慢で専門学校時代には尾道を紹介するのだと休暇の度に同窓のお友達を二、三人お連れしては帰省していました。

飛行機の都合で原隊から整備基地へは只一人で飛びましたが、その途中故郷尾道も見納めと思つたか、尾道の空を幾度も低空旋回をして心ゆくまで名残を惜しみ、尾道の人々も其日あの子がとぶことをどうして聞き知つたのか、友人に限らず尾道の屋根の上は旗の波といたい程盛んに送っていただきましたことを非常に感激して喜んでいました。

女学生の慰問などを受けた時には、きつと「故郷を離るる歌」の合唱をお願いしてはじつと聞き入っていたり、自分も合唱の仲間に入って歌っていたそうです。

そのなつかしい故郷への愛着の深さを思う時、立派に覚悟はしていてもどんなにか寂しい幾夜々を過ごしたことでしょう。

突入の一週間前まで書き続けていた日記の中にも、「吾は帝国軍人なり」とか「吾は陸軍将校なり」とかしばしば書いているのを見るにつけ、こうした言葉によって時々あの子の心に起こる葛藤から逃れるすべとしていたのか

と

と、今更思えばその心情のふびんさに胸をかきむしられるばかりのこの母です。

尾道も空襲の危険がある故、田舎へ疎開せよと度々すすめてきましたが、例え白木の箱で帰るにしても尾道で生まれ育った二人の男の子を送り出した家へ又迎えてやりたいばかりに末娘と二人でがんばりつづけましたが、建物の強制疎開でその思い出多い家も失い、ついにあの子の故郷尾道にも住まねなくなつて終戦を限りに尾道をも去り、勤めの都合で次男や末娘とも別れ住んでまるで敗戦の産物でもあるように次々に我が身にふりかかる不幸にうちひしがれつつ亡き子が永久にかえり来ぬ悲しみと共に母は昨日も今日も又明日も・・・



去りがてに思い親しむ山も海も  
亡き吾子しのぶなつかしの地ぞ

「菅原注・昭和39年多田良ときの様から父宛に来た手紙の住所は、広島県三原市木原町三六一八の一となつており、現在御存命かどうか市役所に問い合わせましたが、回答を得られませんでした。御遺族の消息を御存じの方はお知らせ下さい。」

第五十振武隊 (一式戦・隼)

昭和20年5月20日 沖繩周辺洋上にて敵艦に突入、戦死

少尉 齋藤 數夫 岡山 陸士57 (大正12年生)

少尉 小木曾亮助 愛知 特操1 (大正9年生)

少尉 多田良政行 広島 特操1 (大正12年生)

少尉 速水 修 兵庫 特操1 (大正11年生)

伍長 飯高喜久雄 宮城 少飛13 (大正14年生)

伍長 大野 昌文 長野 少飛13 (大正14年生)

伍長 松崎 義勝 新潟 少飛13 (大正14年生)

伍長 松尾登代喜 佐賀 少飛13 (大正14年生)

伍長 柳 清 和歌山少飛13 (大正13年生)

昭和20年5月25日 沖繩周辺洋上にて戦死

少尉 高橋 章 東京 特操1 (大正11年生)

少尉 藤田 典澄 広島 特操1 (大正11年生)

昭和20年5月28日 沖繩本島付近洋上にて戦死

伍長 磯田 德行 熊本 少飛13 (大正14年生)

「幻の桜花四三乙型ターボ

ジェット特攻機」(前編)

兵器システムの全容と作戦運用構想を探る

会員 川村 巖

まえがき

昭和20年3月、硫黄島の失陥に続いて米軍の沖繩上陸を目前に控え、陸海軍とも本土決戦に向けた本格的な取組みを進めていた。海軍は、搭乗員の操縦教育を中止し、練習航空隊を転用して特攻航空隊を編成するなど特攻作戦を最重視した航空兵力の整備を進め、一方では各鎮守府に特攻戦隊を編成して九州から関東、東北にかけた本土太平洋沿岸一帯に震洋、回天などを装備する水上・水中特攻基地の建設と突撃隊の配備を促進して本土決戦への布陣とした。さらに沖繩戦が終盤に近づいた5月下旬には、関東から中部東海、紀伊半島にかけた太平洋沿岸に桜花特攻基地の建設を下令し、特攻兵器システムの開発と実戦配備に本腰を入れた。

向けて開発が進められていた桜花四三乙型を指す。

一旦、出撃した後は事情の如何を問わず生還を期し得ない冷厳非情なウエポンシステムであることに変わりはないが、陸上の秘匿基地からの出撃(射出)、作戦海面まで自力飛行、最後は目標への突入という、それまでの桜花特攻とは兵器体系、戦術思想を異にするコンセプトと言えよう。

本稿では、このような構想、計画が生まれ、開発と実戦配備に向けた準備が進められた背景、経緯と本土決戦における水際撃破の航空決戦兵器とも言ふべき「桜花特攻」兵器システムの全容を明らかにし、謎の部分の多い作戦運用構想について考究する。それは史実の追究、集成ということだけではなく、そこから当時の戦備・作戦計画等に携わった関係者たちの思考のプロセスや行動判断の由つて来たる所を読み取り、現代に処する上での一助になればという願いを込めたものである。

前編では、航空機(エンジン、機体)及び噴進射出システム(射出装置等)のハード面について、後編では基地の配備・構築、搭乗員の教育準備、そして決戦兵器としての作戦運用構想について述べる。

ここで言う「桜花」とは、沖繩周辺海域の作戦に投入され悲惨な結果を招いた桜花一型ではなく、実戦配備に

一 本土決戦における航空作戦の本命

海軍が初めて本土決戦(決号作戦)の方針を明文化した「帝国海軍当面作戦計画要綱(大海指第513号、20・3・20)」では、「決号作戦においては各種特攻攻撃を以つてする敵船団の洋上及び水際撃破」を作戦の主眼として打ち出している。

この時期、水上・水中特攻基地の建設、突撃隊の配備に拍車がかけられる中、航空作戦については、この作戦計画要綱の「各種特攻攻撃」の中に決戦兵器としての桜花四三乙型はまだ顔を出していない。

この要綱が出された翌日、鹿屋航空基地を出撃した第一神風桜花特別攻撃隊(母機、一式陸上攻撃機18機、乗員135名)、それに護衛戦闘機隊(零戦10機)の全機が未帰還という悲惨な極めた特攻作戦を皮切りに、6月まで10次に及ぶ神風桜花特別攻撃隊の出撃が続けられた。

それらの出撃状況等作戦の仔細については戦史に記されているところである。

桜花特攻の戦訓から生まれたもの

桜花に「自力航行(飛行)能力」を持たせることは、悲惨な結果に終わった桜花特攻の戦訓として、作戦関係者にとって本土決戦を目前に控えその方

策の実現は喫緊の要事であった。折しも、双発特殊攻撃機「橘花」の原動機として開発が進められていた軸流式8段圧縮機1段出力タービン「ネ20」ターボジェットエンジンが、3月末には地上運転の段階に入るに至り、この実用化に対する期待が桜花の皮肉な運勢を決することになったと言えよう。

桜花への「ネ20」エンジン搭載について、陸上攻撃機「銀河」を母機として使用する二二型、開発中の四発陸上攻撃機「連山」を母機とする三三型、潜水艦からカタパルト発艦させる四三型、そして陸上基地の射出台から発進させる四三乙型等、作戦海域や運用方法に応じた幾つかのバリエーションが案出され、並行して開発・実戦化に向けた研究が進められたが、「連山」の開発中止や器材の開発遅延等により、最後(終戦)まで実戦配備に向けた大々的な努力が続けられたのは、桜花四三乙型特攻機であった。

本土決戦における航空作戦の終局的な形態が、本土の山間部等各所に建設が急がれていた秘匿滑走路(基地)から出撃する奇襲特攻へと推移するであろうことは目に見えており、秘匿基地(射出台)から出撃する桜花四三乙型特攻機こそ、桜花特攻の戦訓に端を返し、日に日に悪化する戦局の中で起死

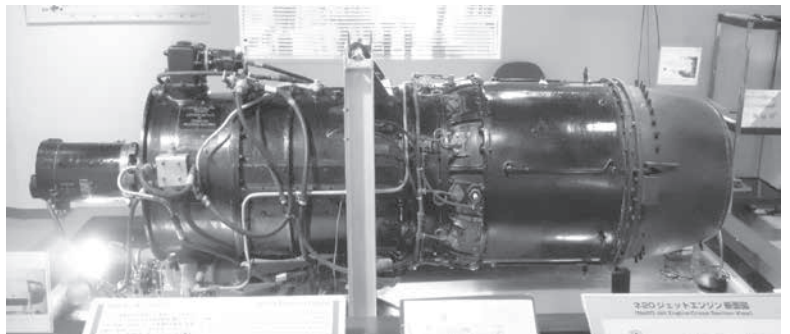
回生、水際撃破の決戦兵器・切り札と目され、航空作戦の本命の座に着くとを余儀なくされたのであろうか。  
着手された桜花特攻基地の建設

「機密横鎮命令作第496号(20・5・22)」により、筑波、房総南・東部、三浦半島、大井及び鳥羽付近約40箇所、7月中旬から9月中旬までの完成を至上命令として桜花特攻基地の建設が下令され、突貫工事が開始された。各基地には、当面、桜花四三乙型5〜10機の配備目標が示されたが、基地の増設・配備機数の増勢指示により最終的には50基地、500機以上の配備が計画されたと言われる。

桜花特攻基地の建設が横須賀鎮守府の管轄地域に絞られた事情は定かではないが、本土防衛の重要度、優先度、工事の緊急性等の問題からかもしれない。射出基地の建設状況については、後編「射出基地の建設」の項で述べる。

二 「桜花四三乙型」特攻機の開発  
1 「ネ20」ターボジェットエンジンの採用

桜花へのターボジェットエンジンの搭載は、ロケット推進機として設計・開発された桜花の機体をベースとした空力(空気力学)構造の共通・類似性に加えて、航揮(ガソリン)より低質の燃料で運用でき、構成部品のアイテ



《写真1 ネ20ターボジェットエンジン (IHI資料館展示品)》  
終戦後、米軍に接收され、米国のノースロップ大学に保管されていたもの  
撮影：IHI顧問吉田 正秋氏

ム数が少なく生産面で有利、といった当時の燃料、金属材料、生産事情等に鑑みた必然の選択、帰結であったと言えよう。  
海軍航空技術廠(空技廠)の種子島時休大佐が開戦前から執念を燃やして取り組んできた噴流式ガスタービンエンジン(以下、本稿では「ターボ

ジェットエンジン」に統一する)の開発に見切りを付け、19年中頃ドイツからもたらされたBMWターボジェットエンジンに関する僅かな断片的な情報・資料にヒントを得て、設計図も仕様書もない状態で開発に着手した軸流式ターボジェットエンジンが、翌年の3月に地上運転試験にこぎ付けたことは驚嘆すべきことである。

とは言え「ネ20」がBMWエンジンのコピーや思いつきの所産ではなく、噴流式ターボジェットエンジンに関する長年の研究から得られたノー・ハウを土台に、劣悪な状況下「一日でも早く、人が乗り、操縦する高性能のエンジンを前線に送り出そう」という技術者たちの真剣な取組みと切々たる思いが込められていたものと推察したい。

### 木更津上空を飛んだ「ネ20」

「航空戦備資料(海軍航空本部、20・8・1調)」では、「ネ20」エンジンの開発状況について「各型審査、運転終了。量産は改四型タービン翼、改五型軸流送風機を採用することに決定。松根重油・普通揮発油混合燃焼実験中。松根油混合率50%以上の成果は期待できず。燃料予熱及び空気噴射装置の試験は、部品製作のため8月中旬頃に遅延の見込み」とある。また、同資料ではネ20エンジンを搭載した「試製橘花」

の開発について、「第一軍需工廠にて実機1号機完成。月末、木更津において試験飛行予定、概ね9月頃戦力化の見込」とある。

戦後記された関係者の資料によれば、終戦直前の8月7日、木更津海軍航空基地で行われた「橘花」による11分間の軽荷重飛行試験では、エンジン性能に特段の問題はなく好成績を収めたと言われる。実用化への前途は多難であるが、ともかく関係者の努力が空中に開花した一瞬であった。

### ネ20エンジンにかけた期待と実情

桜花特攻の悲惨な戦訓に心え、かつ本土決戦の奇襲兵器としてネ20ターボジェットエンジンに託した期待は大きいものがあつたと言えよう。

地上運転及び飛行試験のデータは不明であるが、戦後、当時の関係者が記した資料等によれば、ネ20の運転結果、懸念されたタービン翼の損傷が現実のものとなり、耐熱金属材料開発の技術的な問題から耐用寿命は30〜40時間が限界と見られていた。航空機用エンジンの開発・実用化には技術的に10年の歳月を要すると言われた時代、実用エンジンとしての信頼性の保証にはまだ相当の時日を要したところであり、よ

晶が特攻機の原動力として使われることになろうとは、まさに想定外のことであつたであろう。

いかんともし難い敗勢の中にあつて、作戦上の要求が技術、補給、生産、操縦訓練・技量等すべてに優先・先行した感を禁じ得ない、というのが筆者の偽らぬ所懐である。

### 2 「桜花四三乙型」機体の開発

官房空機密第823号訓令(20・5・8)により、第一技術廠(空技廠の後身)に対して「桜花四三型」機体の開発指示が出されている。この文書は見当たらないが、後述の関連文書から実用の機体及び練習機(単座)の開発を指示したものと見られる。

開発の細部、経過等を知ることのできる記録資料は少ないが、桜花四三乙型機については、ターボジェットエンジンの搭載、噴進射出装置併用による射出台からの射出、隧道格納方式等に適合させるため、幾つかの仕様が作戦上の要求として計画要求書に盛り込まれている。第一技術廠で試作を担当した三木忠道技術少佐の戦後の回想「桜花四三乙型試作経過概要メモ」によれば、次のような事項が技術上の課題として取り上げられている。

○燃料消費が翼面荷重(の変化)に及ぼす空力上の問題解決のため、主翼

の可変翼化、翼端分離方式の採用あるいは補助推進機(ロケット)の装備  
○胴体後部両側のエンジン空気取入れ口の有害抗力(抵抗)を小さくするため、風洞試験による最適形状の模索等

これらの問題がどのように解決され、設計に反映されたかは分らないが、6月末には実用練習機による射出試験が行われている。

横須賀武山の高台で練習機の射出試験  
三木少佐のメモには「7月初め第2横須賀海軍航空基地(武山)の海岸の高台(丘陵)で行われた模擬射出試験に成功。射出時の機体の安定性、滑空操縦・着陸性極めて良好」という記述があり、また、その時テストパイロットを務めたという横空審査部水上班所属、カタバルト発艦経験のあるK氏(甲飛5期)の回想記には「6月末の2日間行われた試験では、桜花一型を2座に改造した実用練習機で後席に1名同乗させ、射出時火薬ロケットに点火して何回か滑空飛行を実施。ときには三浦海岸に着陸したこともあるが、操縦性能は概して良好」との記述がある。

航空戦備資料(海軍航空本部、20・8・1調)の「実験機2機製作中。練習機射出実験終了、成績良好にして実用に供し差支えなし。射出訓練基地決定、

《表1 桜花四三乙型特攻機 設計性能要目》

全長	8.16 m	最大速度	300 kt (556 km/h)
全幅※	9.00 m	航続距離	150 nm (278 km)
全高※	1.15 m	飛行時間	約30分
自重	1.15 t	燃料搭載量	400 ㍓
全備重量	2.27 t	兵装	頭部800kg炸薬装備
※主翼折畳時：全幅約3.60m 全高約3.70m 降着装置(橋)は練習機のみ装着			

訓練開始予定」の記述からも、6月末から7月初めに行われた実験用練習機による一連の射出試験が成功裡に終わったことを示している。

最終的に桜花四三乙型の設計性能要目は、データの出处に不詳な点もあるが、

〔表1〕に示すとおりであり、桜花一一型より一回り大きい構造になっている。

「複座型練習機」開発指示の意味するもの

航空機密第5392号(海軍航空本部、20・7・24)で出された「試製桜花四三型練習機(単座)改造(操縦訓練用として)に関する件通牒」では、「官房空機密第823号(20・5・8、注：桜花四三型機の開発に関する文書)に関連し、試製噴進射出装置を以つてする射出可能なる如く改造の上実験研究し、実用複座を判定するとともに改善資料を得る」として、「構造強度、射出・実用試験を8月末までに速やかに完了すること」が指示され、供試機・器材として

- ・試製桜花四三乙型練習機(単座)四機(二空廠横須賀補給工場在庫中)
- ・試製噴進射出装置(含む滑走車、後述)一式

が準備されている。

前述の三木少佐等のメモ及び航空戦備資料でも、武山での練習機の射出試験では「試験成績良好、実用に供し得る」という評価がなされており、すでに訓練部隊も編成(滋賀)され射出訓練の竣工(比叡山、後編で述べる)を間近に控えた時期に「複座型練習機の開発実験」の指示が出されたことは、なぜ最初から複座型練習機の計画がな

かったのか、前述の射出試験との関連性はどうなのか、理解に苦しむところであり、背後に意味深長なものがあると推測する。

当時の搭乗員の操縦教育、訓練環境等を総括すると、

- ・3月以降の操縦教育の中止、5月後半から一部再開されたが飛行時間の大幅な制限(月間15時間以内)
- ・枯渴状態の燃料事情、器材(航空機)の不足、空襲の激化による訓練の制約
- ・特攻出撃、迎撃戦闘等で減耗一方の搭乗員・等々

極めて悲観的な要素ばかりであり、特攻要員の絶対数の確保はもとより、桜花特攻要員として飛行時間200時間足らずの搭乗員の確保すら至難な状況で、時の経過とともに悪化の一途を辿つたであろうことは想像に難くない。

畢竟、訓練時数の絶対的な不足を「教官同乗による実地指導で補う」と言うよりは飛行時数の、極めて少ない搭乗員を教官同乗により短時間・短期間で「速成」するための「苦肉の策」という見方もできようが、その真意・真相は不明である。これについては後編の「作戦運用構想」にも大きく関係することと考えられ、再度、触れるこ

とにする。

いずれにせよ、この複座型練習機の改造実験は未了のまま終戦を迎えたものと見られる。

### 三 噴進射出システムの開発

ここで言う噴進射出システムとは、噴進射出装置(滑走車、射出軌条等)とその運用に関わる機体格納壕等の付属施設を含めた総称であり、桜花四三乙型特攻機の運用の成否を左右する重要なシステムである。

戦後、当時の技術関係者が編纂した「旧海軍技術資料(末尾の注参照)」の中に「発着兵器」として開発経緯等が記されており、海軍の関連文書と照らして主な点について述べる。

#### 1 五式噴進射出装置の開発

噴進原動力として圧縮空気、蒸気、火薬燃焼方式が検討されたが、艦船のカタバルト発艦や空母の艦上爆撃機、攻撃機の発艦補助推力(火薬燃焼ロケット)の経験実績に鑑み、火薬燃焼によるロケット推進方式の「五式噴進射出装置10型」の開発が決定され、第一技術廠主担当で開発実験が進められた。

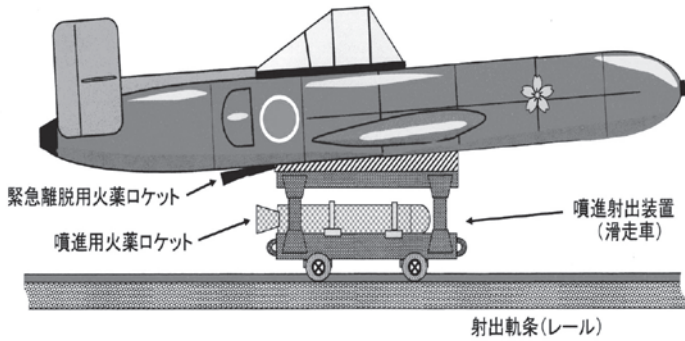
#### 横須賀・武山に実験場開設

官房空機密第858号(20・5・16)により、「第二横須賀海軍航空基地(武山)に5月末日以前になるべく速やかに完成」を条件に、試製桜花

《表2 五式噴進射出装置 性能要目》

射出軌条		噴進射出装置(滑走車)	
全 長	97 m	噴進原動機	火薬ロケット2基
軌 条 幅	1.2 m	最大射出速度	50 m/sec
有効加速距離	86 m	許容最大加速度	3.0 g
抑 止 距 離	8 m	平均加速度	1.25 g

(海軍技術資料データ抜粋)

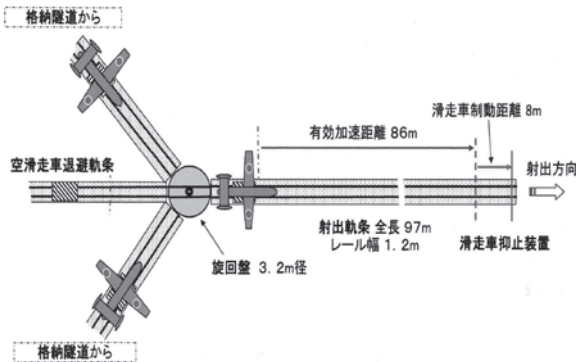


《図1 噴進射出装置上の桜花四三乙型特攻機・イメージ》

この施設標準には、ほかに射出台の敷設に関する地理的な条件(設置方位)や指揮所の編成、指揮通信系統等について規定されており、後編で取り上げる桜花特攻の作戦運用構想を考究する上での重要なキーワードや示唆に富む内容が含まれているものと考えられる。

- 3機程度格納可能な隧道構造格納庫の設置
- 全長 2L+5 (n-1) L
- 機長 (8.16m) n: 配備機数
- 幅 4m以上 高さ 4m以上

- 射出軌条(射出台)は長さ約100m、先端に滑走車制動装置を設置
- 据付は原則として水平、状況により1~15度の傾斜上反角設置も可
- 射出軌条(射出台)に接続して旋回盤(ターンテーブル)、空滑走車退避軌条、格納庫搬出入用の運搬軌条等の敷設
- 2) に示すとおりである。
- 2 噴進射出装置付属施設等の整備
- 内令兵第27号(海軍省、20・6・14)により示された「桜花四三型基地施設標準」では、噴進射出装置付属施設等の整備に関して次のような仕様が示されている。
- 射出軌条(射出台)に接続して旋回盤(ターンテーブル)、空滑走車退避軌条、格納庫搬出入用の運搬軌条等の敷設



《図2 噴進射出システム・イメージ》

四三型射出訓練場の建設が下令された。「射出訓練場」となっているが、この文書と同時に出来た官房空機密第859号(20・5・16)では、滋賀海軍航空基地および比叡山に操縦教育用の施設と射出訓練場の建設が下令されていることから、武山基地は装置の開発試験のための実験場と考えられる。「5月末日以前に速やかに完成」という一見極めて無茶な要求であるが、武山基地では既に昭和20年初め頃から装置の開発試験が行われており、実験場としての基礎はほぼ整っていたものと見られる。

文書、記録資料はないが、5月末には武山でダミー(航空機を模擬したもの)を使用した射出実験が行われ良好な結果が得られたと言われる。

- ・ 参考文献・資料
- ・ 「旧海軍技術資料(社団法人生産技術協会編、1970・9)」
- ・ 戦史叢書 防衛省防衛研究所戦史部編纂
- ・ 「海軍戦備(2)」、「本土決戦準備・関東の防衛」ほか
- ・ 「特殊攻撃機桜花・ジェットエンジン」20の技術検証(石澤和彦著2006)
- ・ 関係する旧海軍の文書・記録等については本文の中で注記



## 戦争から学んだこと

(曾野綾子著『この世に恋して』より)

【編注・『この世に恋して』は、曾野綾子氏が80年の人生を振り返って、「私は感動的な人生を沢山見せてもらいました。何よりの贅沢でしたね。様々なことを体験したし、小説のように面白い人生でした」と書いた自叙伝である(ワック社刊)。

曾野綾子 1931年東京生まれ。

聖心女子大学文学部英文科卒。ローマ法王庁よりヴァチカン有効十字勲章を受章。日本芸術院賞・恩賜賞受賞。著書に『無名碑』(講談社)、『神の汚れた手』(文芸春秋)、『貧困の僻地』(人間の基本)(以上新潮社)、『老いの才覚』(ベストセラーズ)、『人生の収穫』(河出書房新社)、『揺れる大地に立つて』(日本大震災の個人的記録)(扶桑社)、『夫婦、この不思議な関係』(沖繩戦・渡嘉敷島「集団自決」の真相)『悪と不純の楽しさ』『都会の幸福』『図解いま聖書を学ぶ』『ボクは猫よ①②』『働きたくない者は、食べてはならない』(以上ワック)など多数。

夫君は三浦朱門氏。

私という人間を作った体験として、

戦争の存在は本当に大きかった。現代の人生で起きることの善悪があまりにも単純に分かれ過ぎています。誰にとっても戦いよりは平和のほうが良いに決まっていますけれど、実はそうとは

「退屈は死ぬほどつらいと言う人もいますし、退屈だから賭け事をしたり、

盗通をしたりする人もいます。それだって家族の中ではれつきとした不幸ですからね。でも私は十三歳のときにアメリカの空襲を夜毎に受け続けて

いて明日まで生きていられるかどうかかわからない体験をしました。ですから、平和の定義なんて簡単なもんです。誰にも明日までたぶん生きていられるだろうという状況を作ることなんです。水汲みに行ったり、両親に会いに行ったりするだけで死ぬかもしれないという内戦は不幸なものですから。生き続けた後の幸福の築き方はその人の努力です。

昭和二十年(一九四五)三月十日の東京大空襲は今も住む大田区で体験しました。うちから三百メートルくらい離れた所にあつたペーカリーが爆弾の直撃を受けて一家九人が全滅即死です。

明日の朝まで生きていられないかもしれないと思っただけで、私は気が小

さかつたんでしよう。砲弾恐怖症にかかつて一週間ほど口がきけなくなりました。

死というもの、殺されるということはどういうことか。戦争では五十センチ右に立っていた人が撃たれて殺され、五十センチ左に立っていた人が生き延びる。そこに理由はない。ほんの少しの差が自分では動かせない運にながると知れば謙虚になります。

関東大震災のときも大きな災害でしたし、決して死者の数で不幸を比べるわけではありませんが、大東亜戦争は比べられないくらい不幸を与えたんです。一九四五年三月九日から十日にかけて東京は大空襲に見舞われましたが、その一晩だけで約十万人が焼死したんです。私の知人にも家族を失った人がいます。そのどちらも遺体は発見されていないでしょう。当時はDNA鑑定なんてものはありませんし、黒い色の死体の中から個人を判別する国家的余力など全くなかったのです。

ある人が私に話してくれたことですが、隅田川にかかる橋のどれかを歩いていた。空襲の翌朝のことです。橋を吹く風に乗って粒のような光るものが舞っていたんだそうです。それは人骨だったというんです。当時の日本の家

屋の材料には、不燃性のものなんてほ

とんどありません。木と紙の家ばかりですから。それが全部燃料となって生きている人を燃やしたんです。ついでに言っておきますと、戦災による国家補償というものも特殊なものを除いて一般人には一切ありませんでした。戦死者の家族、傷病兵、大陸からの引揚者、原爆の被災者、シベリア抑留者などにはささやかな補償や年金がおりたと聞きますが、私の周りには家を焼かれた人、お父さんやお兄さんや子供が空襲の直撃にあつてけがをした人、それに続く財産の没収などを補償する措置は一切ありません。

東日本大震災のように、その晩緊急に食料や水が届けられたとか、避難所の指定があつたとか、被災地から逃れるバスなどが用意されるとか、その後仮設住宅ができるとか一切ありませんでした。どうして生きていたかという、焼け残った友人の家に転がり込んだり、焼け焦げたトタンなどをその辺で拾い集めて指し掛けを作つたりして、つまり焦土の上に野良犬のように生きていたんです。両親を失った子供にも組織だった援助の手などなかったでしょう。彼らもまた通り過ぎる人たちのわずかな慈悲にすがって浮浪児として生きていたんです。

東日本大震災の方々に私は深く同情

しますが、戦争のことを考えたなら、国家も知人も警察も軍隊も外国のボランティア・グループまでが手を差し伸べようとしている現状は、戦争のときの悲惨さとは比較になりません。今度の震災の場合、被災者以外の土地、北海道と中部以西に住む日本人はみんな日常生活を保っていて援助ができませんでした。しかし、当時の日本は誰もが物とお金がなく栄養失調でそんな力はありませんでした。

その年の五月から翌年二月まで金沢に疎開しました。東京で最も激しい空襲は終わった後でしたが、まだ空襲があるかどうか、自分たちの運命を見通すことはできませんでしたからね。父は直腸ガンの手術をして戦争には行っていないかったので、家族三人一緒でした。

高等女学校に紹介で編入されたその日から、私は動員されて飛行機の部品の絶縁体を作る樹脂加工工場の女工になりました。十三歳で朝七時から夕方六時まで、昼休みなど少しの休み時間のほかは長時間労働をしたんですけれど、私は生活の変化を楽しんでいました。自分にもこういう労働ができるという自信になった。そのおかげで私は今でも工場労働に不安を持っていません。

戦争で私たちはみんな貧しくなりました。髪や衣服にシラミがたかったり、何人ものが入るどろどろのお風呂に入ったりする体験もそのとき初めてしました。戦争中、民間の労働者はモンペに代表される衣類しか着られませんでした。二つの意味があるんです。物が無いということと、あっても着るのは戦意高揚の空気に反するから入れなかったという、二つの圧迫によって着ることはありませんでした。

私は戦争の終わり頃、上海に行っていた日本人からももらった華やかな木綿のワンピースを持っていましたが、それを着る機会はまったくなくて、ただ空襲で焼くのはもったいないと思いつつもリュックサックにいれて持ち歩いていました。お砂糖のお菓子があってもたぶんそうしたらろうと思います。

でも日本中みんなそうだったから、こんなもんだ、と思っていました。どうやら飢え死にはしないし、裸でもないんですから。

初めて髪にシラミがたかっているのを見つけたのは、頭が痒くて手袋をはめた手で引っかいたときに、網目の指先に動く小さな虫が付いているのでわかったんです。工場の作業台の仲間からもらってきたんでしょうけど、それまで自分の髪にシラミが付くなんて

思ったこともありませんでした。生きたシラミは洗えば落ちるんですけど、髪の毛に産み付けられた卵がやっかいなんです。でも東京に帰ったらお洒落な叔母がいて、髪にウエーブをつけるコテを持っていました。そのコテで髪の毛に産み付けられた卵を全部やっつけてくれてホッとしましたが、シラミがわいていることの惨めさをこうやって今でも覚えているんですね。

でも私は最近になって思うんです。どん底を知るという体験も一つの財産なんです。

今の人は贅沢をする財産ばかりを求めている—それが当然ですけど—マイナスの財産に対する評価などまったくないでしょうね。でも私たちの世代はその負の財産家になったんです。

人生は思い通りになるものではないし、育ってきた環境はそれぞれです。いい環境も悪い生活もそれなりに教育的です。

私は砲弾恐怖症にはなつたけれど、戦争から実に多くを学びました。戦争は悪いものですが、教育的な面もあつたんです。

昭和二十八年(一九五三年)頃、新潮社から吉田健一訳でニコラス・モンサラットの『怒りの海(原題・Crimé de la Mer)』という作品が出ました。先日

見てみたら、上下二巻組みで九ボ二段組み、定価二百五十円でした。

吉田健一氏は、吉田茂元総理のご長男で、英文学者でした。妹さんが麻生和子さんで、そのご子息が元総理の麻生太郎さんです。

吉田健一氏はこの作品の最後の解説でつぎのように書いています。

『西部戦線異常なし』ど『戦艦大和の最後』を挙げたが、この二つの戦争という異常な体験を、それが異常である故に人間の精神に及ぼす甚大な効果の面から描き、そうすることでその精神の肉感的な輝きとも言うべきものを捉えているのに反して、『怒りの海』はもつと別な、戦争文学で何故か今まで見落とされて来た一つの可能性を實現している所に特色がある。それは戦争、殊に交戦国の国民全体が文字通りに戦争に巻き込まれる近代戦というものの性格を逆用して、戦争という同一の激しい刺激に対する人間の集団の一人ひとりに異なった反応を取り上げることでその集団の動きを肉感的に掴む、要するに、そういう強烈な光線を人間の社会生活に当てて見ることである。

— 当時の世の中の動きは、当然ですが戦争は百パーセント忌避すべきもので、そこには一片の価値もないという

ものでした。何しろ戦争が終わってま  
だ十年も経っていない時期ですから。  
しかし私は『西部戦線異常なし』にも  
この作品の中にも吉田氏が言われる通  
り、戦争のみが教えてくれるものがあ  
り、それを全面否定してはいけないと  
思っていたんです。この姿勢がたぶん  
私の中に定着して、後年、渡嘉敷島(と  
かしきじま)の集団自決を調べた『あ  
る神話の背景』(沖繩戦・渡嘉敷島「集  
団自決」の真相)に改題改訂してワッ  
クより再刊)を書くにいたった動機に  
なったのだと思います。

## 第42回萬世特攻慰靈祭

会員 原島 淳子

平成25年4月14日(日)、鹿児島県  
南さつま市加世田高橋に建立されてい  
る、万世特攻平和祈念館及び萬世特攻  
慰靈碑「よろずよに」の前で執り行わ  
れた第42回萬世特攻慰靈碑慰靈祭に初  
めて参列させていただきました。

この慰靈祭の会場となった場所は、  
当時でもその存在を知られていなかっ  
た、幻の飛行場と言われた旧萬世飛行  
場の跡地であり、当頭彰会のホーム  
ページのトップに掲載されている有名  
な子犬を抱えている少年達、第72振武

隊の少年飛行兵出身隊員達の出撃前日  
の表情が撮られた場所でもあります。

慰靈祭は、海上自衛隊鹿屋航空基地  
から飛行したP-3Cによる慰靈碑港  
によって開始され、遺族の方々個々の  
紹介、旧隊員の方々の各部隊や各会の  
紹介の後、式次第に沿って肅々と進め  
られました。

万世特攻慰靈碑奉賛会副会長の開式  
のことばに続き、陸上自衛隊音楽隊の  
演奏に合わせ、旧隊員による国旗掲揚、  
それに続く黙祷が行われ、前日拝見し  
た遺影の顔が浮かんで参りました。そ  
の後、奉賛会会長の追悼のことば、  
遺族代表・旧隊員代表による各慰靈の  
ことば、弔電披露、錦城会加世田道場  
有志15名による献詠と続き、その後、  
参列者330名全員による献花が行わ  
れました。特攻隊員の方々が、この場  
所から征かれたのかと思うと、合わせ  
る掌に思わず力が込もってしまいまし  
た。

続いて旧隊員代表と遺族代表による  
「よろずよに」の碑に対する献酒、陸  
上自衛隊音楽隊による献奏、感謝状の  
贈呈、南さつま市市長の挨拶があり、  
更にこの式典に若者の誓い、若者代表  
の言葉を織り込まれたことに、驚くと  
ともに嬉しく思いました。

今回誓いの言葉を捧げたのは、皇學

館大学の女子学生でした。この学生の  
言葉が胸を打つ内容でしたので、英霊  
の方々の御意志をきくと継いで行くと  
いう力強い言葉には、不覚にも涙を止  
めることができませんでした。今の若  
者の中にもこのような子がいるのだ  
と、改めて教えてもらえたようで、良  
かったと思います。ここから出撃して  
征った201名の英霊の方々も、頷き  
ながら聞いていただいたと思います。  
その後続いた「加藤隼戦闘隊」の奉  
唱は、降りて来られた英霊の方々も一  
緒に歌いつつ、天にお帰りになられた  
のではないのでしょうか。

続く国旗降納も、陸上自衛隊音楽隊  
の演奏に合わせ、旧隊員の方々の手に  
よって行われ、奉賛会副会長の閉式の  
ことばで慰靈祭は滞りなく終了しまし  
た。

式の間時々吹いた突風に、201名  
の英霊の方々が次々に降りて来られた  
のではないかと思ってしまう。  
最後になりましたが、慰靈祭に先立  
ち、昨年11月に逝去された元陸軍少尉  
苗村七郎氏に対し、長年の英霊顕彰に  
尽くされた御功績に対する感謝状の授  
与が行われたことを記しておきます。  
「特攻隊員に遺骨はない。戦死の地の  
確認もできない。最後に飛び立った所  
が戦死の地」と、この地に戦後亡き戦

友の方々の霊を弔うために、慰靈碑建  
立に奔走し、遺品館設立に尽力され、  
その生涯を慰靈に費やされたのが、苗  
村七郎その人である。苗村氏無くして、  
今日の慰靈祭、平和祈念館も無かった  
と言っても過言ではないかも知れませ  
ん。

当日お目に掛かりたかった。お話を  
聞かせていただきましたかった。とても残  
念でなりません。今頃は、お仲間たち  
と笑って語り合っておられることで  
しょう。心から御冥福をお祈り申し上  
げます。

苗村氏が作られた万世特攻平和祈念  
館には、この地から飛び立った201  
柱の英霊の方々の遺影・遺書・血書・  
遺品等が多数展示されております。是  
非一度訪ねていただきたいと思いま  
す。

萬世飛行場、征って帰らない方々が  
飛び立って征かれた場所。その跡地で  
の慰靈祭。言葉に表すのは難しいので  
すが、何かが違う。空気が違う。想い  
が違う。そう感じながら参列させてい  
ただきました。この慰靈祭が長く長く  
続くことを願って止みません。

最後に、次の一句を捧げます。  
征く君の 瞳に一輪 桜咲く

## 特攻コラム (その二)

### ○特攻隊員を悼む (その二)

前回、特別攻撃隊を生むに至った旧陸海軍の航空要員養成の遅れについて私見を披露したが、今回は技術面から見てみたい。航空特攻は正に我が航空機対米機動部隊との死闘であったが、我が攻撃を阻止した米側の決定的な技術は、レーダーを活用した組織的艦隊防空能力と、近接信管の開発成功にあったと考えている。対空レーダーによる警戒・探知、邀撃機の効率的な誘導は、昭和15年英本土航空作戦において、30数基のレーダーを運用し、英本土を守り切ることに成功したのが発端である。このレーダー網の構築に深く関与した米国は、この技術を適用し、レーダー網を活用する組織的艦隊運用を実施するに至っていた。その結果、サボ島沖夜戦でのレーダー砲撃を皮切りに、機動部隊対決に米襲撃を早期に見出し、その結果次々と勝利することとなったのである。我が海軍のレーダー開発は列国に伍し、昭和12年にセンチ波マグネトロンの開発に成功(日本無線)し、順調に開発が進んでいた。にも拘わらず、当時の海軍首脳部は、

「レーダー発射などともんでもない。我が艦隊の所在位置を教えるようなもの」と切り捨て、予算の配分を行わず、3年間のブランクを生ずることとなった。この結果、主要艦艇がレーダーを装備したのは、昭和19年であり、時に遅しの感があったと言える。特に悲劇的であったのは、レーダー網の特性を弁えず、特攻機に護衛戦闘機を配し、真つ向から攻撃するという力勝負に出たため、多数機に遠距離から迎撃され、その多くは敵艦隊に届かず、無念の涙を飲んだのが実情である。特に特攻最盛期となった沖繩戦においては、数少なくなつたベテラン組を、空戦の必要な護衛戦闘機隊に充て、前回紹介した昭和18年後期以降教育を始めた大量養成期の新人が、その主力とならざるを得ない状況となつたのである。

もう一つの米艦隊防空の優位を作り出した大きな要因となつたのは、近接信管(VT信管)の開発成功である。これは、5インチ砲弾の弾頭に超小型のレーダー発信器とドブライ受信機を内蔵し、ドブライ周波数の変化する微妙な瞬間を捉えて起爆させる信管である。トランジスター、ダイオードといった半導体技術のなかつた当時、超小型で、砲弾発射の衝撃と続いて発生する高速回転による高い荷重に耐えねばならぬ真空管の開発が必要とされ、困難を極めたことが推察される。当然本研究には多大の資源が投入され、原爆開発を上回るものがあつたと言われている。しかし、開発は成功し、昭和17年9月には最初の量産弾が在庫することとなつた。そして、ラバウル・マリアナ・フィリピンと戦いが進むにつれ、逐次各艦艇に行き渡つた。その結果、余りの命中制度向上に、我が海軍前線航空部隊では、新型兵器出現の噂が広まるほどであつた。因みに、当時対空砲においては、弾頭がピアノ線を引きずる形で発射され、途中方位を変更することに、扇形に有効射面を広げる等の研究が行われていた。

ここで1枚の写真を紹介したい。ガダルカナルにおける一式陸上攻撃機の勇姿であり、有名な写真である。一番機と三番機の異常な飛行高度に注目してほしい。海面1ないし2mを飛行しているが、大変力量の必要な飛び方である。次に周辺で炸裂している対空砲火の発数の多さにも驚かされる。砲弾の炸裂煙は数秒で消えることから、弾幕の凄まじさが読み取れる。そして最も注目すべきは、これらの砲弾が1発も海面に到達せず爆発していることである。これだけの弾幕であるので、通常はかなりの発数が海面に水柱を上げて然るべきであるが、その痕跡はない。近接信管装備の砲弾が、海面反射波に感応している状況が明らかである。前線部隊では、戦訓から海面すれすれの超低空では、砲弾の起爆高度以下となり、被害が局限できることを知っていたと思われる証拠写真なのである。



次回に細部を紹介したいと考えているが、レーダー網による組織的艦隊防空、近接信管といった我が航空攻撃を阻止した科学技術戦においても、対抗する手段は「戦の常」として存在し、一部の前線部隊は体得していた事実がある。真に残念ながらそれらの知識を

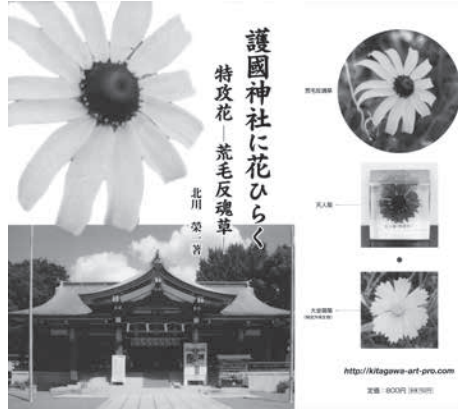
全軍に反映させるシステムがなく、本格的な特攻作戦において、相手にとって守りやすい真つ向勝負に出たことは、残念なことであった。

筆者は若き飛行班員の頃、かの有名な黒江保彦さんの指揮下で勤務した経験があり、出張時の送迎操縦者に指名を受ける光栄に恵まれたほか、練成訓練においても数回の同乗飛行で鍛えて頂いた。T-33という練習機で、性能の優れたF-86-Fを相手に空中戦闘を行うのであるが、ひねり込み、反転、追い出し等見事な操作で相手を翻弄する。さすが伝統の加藤隼戦闘隊長を務められた腕前であった。こうして見ると、黒江さんにしても、写真の一式陸攻操縦者にしても、戦場ならではの見事な錬度にあったことは明白である。これらの識見が、戦法として反映されたとえ十死零生の特攻攻撃であつても、成功確率の高い戦いが取れなかったのは残念の極みであるし、若くして散つた多くの勇士に、せめて士気の根源たる「自信」を持つた出撃にして上げたかつたと目頭を熱くする次第である。(ペンネーム・蒼蒼子)

## 新刊図書紹介

① 北川 榮一著

### 『護國神社に花ひらく 特攻花―荒毛反魂草―』



著者は昭和8年10月、京都生まれ。銀行マンから日展嘱託を経て、昭和50年6月、アートプロデュース(株)を設立、取締役社長に就任。美術と文学の融合一体化を目指して多くの展覧会、出版、テレビ出演・企画等を手掛けて活躍中である。本書は平成22(2010)年7月に出版された『特攻花―荒毛反魂草―』の続編とも言えるべきもので、今年・平成25(2013)年1月14日に出版された。著者は、「特攻花」

と言われるものを知って以来、その検証を進め、その史実や謂れなどを、探究した。「特攻花」については諸説あり、またそれぞれに思い入れもあつて、「桜」以外に考えられないとする人も

いる。「桜の小枝」を打ち振つて特攻隊員を見送つた事実から言えば、「桜」は壮行花と言えよう、「特攻花」は飛び立つたその後には咲き出したとされるならば、帰還花である。特攻隊員の「魂の帰還花」と言えよう。

当時、本土と沖縄の中継地点として、給油などに利用されたのが喜界島である。ここに「天人菊」という花が咲く。これを喜界島では「特攻花」として大切にしている。長年この花の研究を続けている仲田千穂さんは、19歳の時にこの花のことを知つたという。知覧や鹿屋の地元では「大金鶏菊」を「特攻花」としていた。特攻花が帰還花とすれば、戦後少なくとも一、二年で咲き出すのが穏当であろうが、この花は戦後15年も経つて噂となった。この花は帰化植物であつて、戦後すぐには鹿児島県に分布していない。更に、この「大金鶏菊」は、平成18(2006)年2月1日に、環境省から、生態系に悪影響を及ぼすとして特定外来生物に指定され、その譲渡、輸出入、移動、栽培は禁止され、これらに違反すれば、法

人1億円、個人300万円の罰金が科されることになった。これに反し、荒毛反魂草や天人菊は昔から分布している。『源氏物語』の中に「荒毛」とは「むくつけき心の中に好きたる心のまじりて」とあるように、武骨な男性像を連想させる。「反魂」とは死者の魂を呼び返すこと。死んだ人々の魂を甦らせること。「反魂香」は古代中国の漢の武帝が李夫人の死後、香を作らせ、それを焚いて面影を見たという故事による。また、「反魂丹」というのは、中国の靈薬の名前で、死者の魂を呼び返すと言われ、その丸薬を日本では元禄の頃から富山の葉売りで全国に広めたという。これらを総合して、荒毛反魂草は、特攻隊員の魂の帰還花、即ち「特攻花」と言うに最も相応しく、整合性がある、との結論を得た。そしてこれを、靖國神社で扱つて封入してしまえば、「不老不死」となる。特攻隊員は、散華したが、遺骨はない。この花をその縁にしたい。平和・不戦といった聞こえの良い言葉ではなく、戦後67年を経て戦争体験者が年々少なくなる中で、原爆の恐ろしさや、フィリピンや沖縄などで散華した特攻隊員等、戦争の記憶を忘れてはならない。決して風化させてはならない。人

間を万物の霊長というなら戦争の愚かさを知るべきで、戦う相手は人間ではなく、「戦争という悪魔」であること。それを次の世代へ繋げてゆきたい。アクリル封入の「荒毛反魂草」が、少しでもその手助けとなるなら・・・と。

そこで、散華した特攻隊員たちの魂が帰るところを考えてみると、散華した全ての特攻隊員が「靖國神社で会う」だったのか、やや腑に落ちないところもあった。夢にまで見た懐かしい故里、家族、愛する人たちの元ではなかったのか、そして、全国各地にはそれぞれの土地に護國神社がある。散華した人々の魂は、まずは故郷の護國神社へ帰り、それから靖國ではないか、各地の護國神社には特攻隊員の方々も祀られている。そこで、各地の護國神社に「特攻花」を植えれば、風化させまじの一助にもなると考え、早速全国各地の護國神社に『特攻花―荒毛反魂草―』を1冊ずつ贈呈し、その主旨を添え書きして、特攻花の種子を植えさせてもらいたいと願ひ出たところ、いろいろの反応があり、その主旨に賛同する護國神社十余社に、特攻花の種子植への行脚を続けておられる。それら各地の護國神社の由来や様子もよく記されている。当顕彰会が進めている、

全国護國神社への「特攻勇士之像」の建立奉納事業とも関連し、著者の活動への支援ともなるので、是非、御一読をお薦めしたい。

なお、本書末尾の「平和への思い」と題する項に、当顕彰会の藤田幸生副理事長との対談の内容が記されているので、摘記すると次のとおりである。

私が元海上幕僚長の藤田氏と縁が出来たことを知り、私とは全く価値観の違う同じマンションに住む知人から、「日本は何年か先に必ず抑止力として『核』を持つと思うが、この考えをそうした経験者はどう考えるか聞いてほしい」と頼まれた。藤田氏とは三度目、靖國神社の参集殿応接室でお目にかかり、核保有をどう思われるかを質問してみた。「私は持つべきではないと考えます。核抑止力には戦略として自分も核を保有するという手段もありま

す。現在の核保有国は、この考え方であり、今もこのようにして核が拡散しています。しかしその他の手段として、日本には特別の手段があります。それは人類唯一の被爆国として、その悲惨さを体験しているからです。《保有しようと思えばいつでも保有出来る材料・技術・資金を持っている。しかし核は保有しない。これは自らの意志である。日本は非人道的な核爆弾の廃絶

を世界に要求する。自衛のため以外の戦争はしない》と主張していくことで、この外交カードをもっと強く抑止力として主張していくことであります。これが唯一の被爆国としての義務とさえ言えるものでしょう」と。思わず手を握ってしまいました・・・

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会専務理事(現副理事長)の藤田幸生氏は、「あ、特攻」の像を各地の護國神社に建立中。京都霊山護國神社が十二(十一)番目(平成24年4月28日)である。全国五十二の護國神社に建立する為、日々努力を重ねておられる。今年には福岡県、そのあと埼玉県、大分県と続いており、世田谷特攻平和観音寺(世田谷山観音寺)は神社ではないが、すでに建立が済んでいる。藤田氏は昭和17年生まれ、私は8年生まれ。1年3像建立としても13年かかる。完成の暁には巡拝ルートが出来れば嬉しいといわれる。

私の「特攻花」はどうだろうか。各地の神社が広めて下さって、藤田氏建立の像に寄り添い花咲き、語り継ぎ繋がる縁となれば、これ以上の幸せはない。

○発行所 アートプロデュース(株)  
〒113-0031 東京都文京区根津2丁目28-5-1201

電話・FAX 03-5815-4535  
定価 800円(本体762円)

② 吉本 貞昭著  
『東京裁判を批判した  
マッカーサー元帥の謎と真実』



本書は、著者が昨年7月、同じく(株)ハート出版から発行された『世界が語る大東亜戦争と東京裁判―アジア・西欧諸国の指導者・識者たちの明言集―』の第2弾として刊行された。前書は、世界の指導者・識者たちの大東亜戦争と東京裁判に関する豊富な明言を収録し、大東亜戦争の歴史的意義を明らかにし、戦後の教育ではタブーとされた真実を、若い人々にも分かり易く、資料を駆使して明らかにした力作として注目を集め、出版後1年足らずで6版以上版を重ねている(当顕彰会の機関誌『特攻』第93号・平成24年11月発行にも紹介記事掲載)が、その極東国際軍事裁判(いわゆる東京裁判)に関し、その裁判所の設置と施行規則や戦争犯罪概念に関する規定の制定等の主導権を握り、A級戦犯を選定し、起訴

し、有罪判決に導き、その判決に対する再審査を拒否し、刑の執行を命じた連合国軍最高司令官マッカーサー元帥が、その後、昭和26年5月、米上院軍事・外交合同委員会が公表した、トルーマン大統領とマッカーサー元帥との歴史的なウエーキ島会談での秘密文書の中で、注目を浴びた「極東軍事裁判は誤りであった」との発言を何故したのか。東京裁判を批判し、裁判の誤りを何故認めたのか、これまで日米における東京裁判やマッカーサーについて書かれた夥しい書物や映画などでの定説に惑わされることなく、偏見を持たず、真実を正しく伝えようとの著者の努力により、内外の豊富な資料を駆使した解説によって、歴史の真実が明らかにされる。また、戦後のGHQによる検閲の実態を明らかにし、特にその検閲下に報じられた「東京裁判は誤り」の報道、朝日新聞を始めとする全国54紙の報道を収録し、その時メディアは何を報道し、何を報道しなかったのが明らかにされる。

### ○発行所「株式会社ハート出版」

〒171-0014

東京都豊島区池袋3-9-23

TEL 03-3590-6077

FAX 03-3590-6078

定価 本体1800円+税

## DVD紹介

### 泉水隆一監督・脚本・ナレーション DVD『凜として愛』

この映画は、平成10年の靖國神社創立百三十年を記念して平成12年の暮れから3年間かけて制作されたが、完成前から内外の圧力で、僅か2日間、遊就館で上映されただけで、中止となった。泉水隆一監督はこの映画の中で、日本の長い歴史において、特に大東亜戦争を中心に明治以来の近代戦争の部分を取り上げて、日本が歩んできた歴史の事実を若い人達に知って頂きたい、また、この映画を見た人が日本民族の魂に触れて、もう一度日本人が日本人としての原点を取り戻してほしい。そして、命をかけて日本を守ろうとした先人の思いを、今の日本人に知ってほしい、との思いで作られた。

欧米の植民地として呻吟するアジア諸国の独立という大義と、A B C D包囲網によって資源を絶たれた、我が国の自存自衛の戦いが大東亜戦争である。そして、この間国家のために殉じた幾多の英霊に報いるには、一人でも多くの日本人が先人に対して感謝と哀悼の思いを持つことだ、という思いが籠められている。

泉水監督は、平成22年に逝去されたが、その後監督の想いに共感した団体や個人によって、DVD化された映画『凜として愛』の頒布・上映活動が広がりがつある。特に、福井大学大学院工学研究科の荒木陸大教授が、全国の国立大学一六一校の学長宛に『凜として愛』のDVDと学生の感想文をまとめた冊子を送られたところ、賛同・激励の声援が相次いで送られ、若者の間に感動の輪が広がりとつあるのとである(以上、地方(神戸市)のオピニオン紙『アイデンティティ』第60号(平成25年2月1日発行)より)。

「日本は何故戦わなければならなかったのか」。明治開国から大東亜戦争終結に至るまでの戦いの歴史を振り返り、日清、日露の戦争は、朝鮮独立と我が国の生存をかけ、数十倍の兵力を擁する大国との戦いだ。通州事件など数々の中国側の居留邦人に対する虐殺事件への国民の怒りに応えて我が軍が立ち上がった満洲事変、支那事変。

「国民は必死に頑張つて国を守ろうとしていたのに、今日まで日本兵が悪いことをしたと思っていたことを

恥じました」

・「今の日本があるのは、昔の戦争で戦ってくれた人のお陰なので、その人たちに感謝すると共に、次の世代に伝えていくのが私たちの役目だ」  
戦後の学校教育を受けてきて「初めてこんな話を聞いた」という学生がほとんどであった、ということである。

### ○問い合わせ先

〒104-0061東京都中央区

銀座1-14-5 ML172

愛国女性のつどい「花時計」

handoket2010@gmail.com

『凜として愛』拡散プロジェクト

頒価送料込み1本1000円

## 事務局からのお知らせ

一 第62回特攻平和観音年次法要の実施について

平成25年も、9月23日(月曜日・秋分の日)の午後2時から、世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が、例年のとおり、駒繫神社との神仏習合により執り行われます。詳細については、同封の「年次法要のご案内」に記載してありますので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださるようご案内申し上げます。

二年会費の納入について  
今回、特攻平和観音年次法要に参加される方のために、「郵便払込票」を同封しております。

なお、会費欄に「入金済」とゴム印で表示されている方は、本年度の年会費は既に納入済みであります。入金済みの表示がなく、「年会費納入のお願い」が同封されている方は、お手数ですが、平成25年度年会費の納入方よろしくお願い申し上げます。

### 事務局からの報告等

#### 寄附者御芳名(敬称略)

(平成25年4月1日～6月30日)

- 六〇 松本 聖二 二〇 森山 正義 (単位千円)
- 一〇 永田 利夫 一〇 上田真美恵
- 五 藤本 松彦 三 山田 昭
- 二 福田 充 二 野上 五夫
- 二 山上 薫 二 川田久四郎
- 二 金子 茂平 二 阿部 敏行
- 二 小原真知子 二 加嶋 昭男
- 二 有川 信男 二 酒井 弘義
- 二 日野有希子 一 高橋こずみ
- 御芳志誠に有り難うございました。

#### ◆ ◆ ◆ 新入会員名簿(敬称略)

(平成25年4月1日～6月30日)

千葉県	黒川 一夫	東京都	真田 八束	高松	真希
東京都	相部 一正	高橋	信義		
神奈川県	池田 清光	伊藤	玲子		
長野県	細井 秀雄	松岡	伸助		
静岡県	阿部 功祐	岡本	政昭		
大阪府	毛利紀和子				
大阪府	山岡 謙吾				
広島県	池上 聖治				
	加納由香利				
北海道	舟津 辰義 (25・3・17)	北海id	角田 和男 (25・2・14)	群馬県	樋口 秀二
埼玉県	伊奈源太郎 (24・12・18)	東京都	吉田 豊 (25・1・2)	埼玉県	大野 俊康 (25・4・16)
埼玉県	村田 武一 (25・3・6)	東京都	神保外巳雄 (24・11・26)	東京都	伊達智恵子 (25・5・31)
東京都	服部 修 (25・2・27)	東京都	山本 覚 (25・5)	東京都	廣井 瑞希
東京都	安藤 英雄 (25・1・7)	東京都	田邊 整市	東京都	吉村 伍 (24・12・31)
東京都	堀 玉彦 (25・2・20)				

#### ◆ ◆ ◆ 会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

#### 会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

#### ○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化  
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様  
二代會長 瀬島 龍三 氏

平成5年11月財団法人認可  
三代會長 山本 卓眞 氏

平成23年1月公益財団法人認定  
現理事長 杉山 蕃 氏

#### ○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・広報誌等の発行
- ・講演会等の開催その他

#### ○年会費

・一般会員 3000円  
・学生会員 1000円

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1  
靖国神社遊就館内 公益財団法人  
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電話 03-5213-4594  
FAX 03-5213-4594

#### ご投稿についてのおお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1  
靖国神社遊就館内 公益財団法人  
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電話 03-5213-4594  
FAX 03-5213-4594